

# 語り継ぐ震災の記憶

聞き書き 佐佐木邦子

編集 仙台市若林区中央市民センター



深沼海岸（撮影：佐藤 豊）

平成26年3月

## はじめに

東日本大震災から3年が過ぎました。

東北を襲ったこの未曾有の災害により仙台市も大変な被害を受け、若林区においても多くの尊い命が犠牲となり、さまざまな生活基盤が失われました。特に東部の海浜・田園地域は、大津波の直撃により、豊かな緑と水をたたえた美しいその姿を一変させました。ご自宅、職場、学校、農地、海岸、道路……、徐々に復興が進むなか、今も多くの方々が暮らしの再建に向けて懸命の努力を続けておいでです。私ども区役所も復興事業に邁進しております。

やがて、被災された方々がご自宅を再建し暮らしを取り戻す日が来ることを確信しておりますが、たとえ生活基盤が整ったとしても、家族や親しい人を失った悲しみは癒えるものではありません。受けとめがたい恐怖と苦しみの記憶も消えることはないと思います。無念のうちに亡くなられた方への思いは深く心に刻まれ、この先も、日々その思いを抱えて生きていかれることと存じます。

このたび若林区では、被災されたお一人お一人の体験を生の声として大事に伝えていきたいと、沿岸地域にお住まいだった方々への聞き書き記録集「語り継ぐ震災の記憶」を刊行する運びとなりました。震災当時の体験を直接ご本人から伺い、仙台在住の作家・佐佐木邦子氏のご協力を得て、ここにまとめることができました。

震災後、多くの記録が刊行されていますが、この記録集も、あの巨大地震と津波がもたらした3.11の真実を伝える一助となりますことを願っています。

聞き取りにご協力くださった語り手の皆様、そして現在病床にある佐佐木邦子先生に改めて感謝申し上げます。

平成26年3月

若林区長 氏家 道也

## 編集にあたって

東日本大震災から2年が経過した2013年、若林区では震災を風化させない取り組みとして、被災体験を後世に語り継いでいくための記録をまとめることになりました。震災から2年が過ぎて、ようやく当時のことを語る気持ちになったという声も聞かれ、若林区中央市民センターでは仙台在住の作家・佐佐木邦子先生のご協力をいただき、被害の大きかったこの地域ならではの記録を冊子として刊行することにいたしました。

2013年7月から11月にかけて、当センターの事業にご協力いただいている方を中心に六郷・七郷地区の13名の方に、震災当日の体験から現在のお気持ちにいたるまでじっくりとお話を伺いました。佐佐木先生もほとんどの聞き取りに同席され、その後、録音をもとに文章をまとめていただきました。お話しくださる方の本当の気持ちを言葉にしていきたいと、意欲的に取り組んでいただきました。

聞き書きの執筆が進み、編集方針などを相談しておりました10月下旬、佐佐木先生が突然ご自宅で倒られました。現在も意識が戻らず入院生活を続けておいでです。

編集にあたっては、話し手の語り口を生かしながら物語のようにまとめていくか、また、真摯な聞き書きとして記録に徹していくかといったご相談をしておりましたが、先生のご病状はその先の作業を許さない状況となってしまいました。そのため、先生の文章をもとに語り手の皆様に確認しながら、聞き書きの記録として当市民センターの編集によりまとめさせていただきました。

本冊子の刊行にあたり、体験を語ってくださった皆様、佐佐木邦子先生とご夫君の佐々木勉様に多大なるご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

若林区中央市民センター

# 目 次

はじめに		
編集にあたって		
語り継ぐ震災の記憶		
時間が過ぎて薄まるんじゃないなくて、かえって思い出される気がするんです	末永美代子	1
一度死んだようなものだから、何でもできると思ってんのかなあ	最知 幸子	10
こういう目にあつたからこそ、古里の思い出がほしい	佐藤 豊	17
ボランティア活動をしていたから、救われたと思います	高野 剛／高野 和子	25
人間として大事なものを呼び起こされたような気がします	大友 京子	33
亡くなった方々の無念の思いを感じながら暮らしています	菊地 裕子	38
これからも、井土の人たちとつながってほしいと思います	大友 広美	45
言葉って、こんなに無意味なものだったんでしょうか	大友 泰子	51
生き物が戻ってこない、人間も住めないんでしょうかねえ	佐藤 洋子	58
松林が無くなってしまうと、ごく近くに海が見えるんです	庄子フミ子	68
支え合い、助け合い、思い合いって大事だなあと実感しました	佐藤はつの	78
東六郷栄あれ	片桐 正志	85
写真資料		94
若林区沿岸部地域図		96
東日本大震災 ― 若林区の記録（抜粋）		
地震被害の概況		99
地震発生からの経過		104



## 時間が過ぎて薄まるんじゃないなくて、かえって思い出される気がするんです

末永 美代子 (1944 年生まれ)

震災時 若林区荒浜在住

家はうちの人で3代目の兼業農家です。100年ぐらい経つんですけど、あの土地の中ではそんなに古い部類ではありません。海から300mぐらいだったもので、海は子どものいい遊び場でした。着替えて走っていくと、路地と松林を抜けてすぐって感じだったんです。夜も波の音が聞こえてね。窓を開けていると海風が入ってきて、夏でも扇風機なんかたまにしか使いませんでした。

地震の当日、家にいたのはわたしと主人だけです。4人暮らしなんですけど、姑は閑上のデザイナー、息子は仕事に行っていました。主人は友達のグループと松島に1泊して、1時ごろ帰ってきたばかりだったんです。

2階に免許証とか貴重品全部置いて、着替えて、下のお茶の間でテレビ見ながらお茶飲んでいましたね。1時間ぐらいたって主人が「ああ、疲れたなあ」って横になったら、テレビに大地震警報と大津波警報が出て、パアッと停電になったんです。それと同時に2人の携帯がビビビビビッてすごい音で鳴ったんですね。わたしはその音にびっくりして、自分の携帯握ったまま、どうしたらいいかわかんなかったですよ。携帯が鳴ると同時に家が揺れだしました。

「こんこん様どこに逃げろ」って主人に言われて靴もはかないで飛び出して、立ってられなくて、しゃがんでたんですね。「こんこん様」って屋敷の神様みたいに、各家々の庭に祀ってるんです。瓦が落ちてこないようなところで、家中で1番安全だったんです。

1回目の大きな揺れが落ち着いたころ、靴と防寒着を取りに玄関に入りました。そしたらもう足の踏み場もない。下駄箱の上に飾ってあった鉢植えとか全部落ちてるし、台所のガラス戸が倒れて廊下がガラスだらけになってる。危なくて2階になんか上がれそうにない。座敷にも色んなものが散乱してました。

それで、とにかく防寒着。わたしは座敷に置いてたんです。でも主人は2階に置いたままで、下には農作業用のしかなくて。靴も、わたしは何だか知らないけどいい靴はいたんですね。主人のは玄関の花瓶の水がこぼれて、中が濡れちゃってる。だから濡れてなかった古い靴をはいて。

そのうちまた2回目の大きな揺れが来たんで、避難しないと駄目なんじゃないかと思ってね。乗用車と軽トラあるんですが、乗用車は、さっき主人が帰ってきたとき、いつものように重い木の戸を開けて作業場の奥に入れてたんです。軽トラはすぐ出せるようになってる。とにかく早く、ということで軽トラに乗りました。

乗るときに車のラジオ入れたら、早いところではもう6mの津波が来てるっていうニュースが入って来たんです。6mじゃ深沼の防波堤越えてくるだろうから急いだ方がいいってことで乗ったんですけど、うちの人、すぐ降りたんですね。屋根を見て、家の周囲をぐるっと回って、屋根の瓦だいじょぶだ、外壁だいじょぶだ、ブロック塀もだいじょぶだ、って確認してるんです。家は建て替えて35年くらいで、宮城県沖地震でもビクともしなかったんです。いつも津波来るって言っても、間もなく避難解除になって帰ってきてたんですよ。だから、今度もそうだろうと思っていました。でも、主人が家の中に入っていったんです。倒れたもの掻き分けて2階から免許

証持って来るのかしら、危ないから止めてと置いていたら、玄関の鍵を掛けて出てきたんです。いつもほら、留守にするとき玄関の鍵をかけてるから。

そして道路へ出て走ったんですが、まだ渋滞って感じではなかったですね。避難してる車はいっぱいありましたけども。道路沿いで家のおじいちゃんの弟夫婦が店をやってるんです。通りがかりに見たら、嫁さんが地震で落ちた商品を片付けてる。「ラジオで津波来るって言ってたから、早く避難した方がいいよ」って声かけて行きました。

荒浜小学校の方へ行きましたら、校舎に入るように避難誘導してる人がいたんですよ。でもうちの人は、深沼は高いところないから、とにかく距離を逃げないと津波に巻き込まれてしまうって。去年避難訓練したとき荒浜小学校に避難した人たちがいたんだけど、ここは正規の避難場所じゃないからって、消防隊のバスが来て正規の避難場所になってる七郷小学校に連れて行かれたんだって。だからここには入らないで高速の東部道路越えるぞって言ったのね。主人は町内会の役員をやったこともあったので、避難訓練にはその都度出てたんです。

その時、信号機のあるところはすごくもたついたのでよ。停電してるもんだから信号機が全部止まってる。塩釜亘理線を越えるのにもなかなか越えられないでいたから、前の車に、主人が「いいから。勢いつけて越えて行け」って大声で叫んで、それで通れたんです。

そして東部道路越えて、右の方に七郷中学校が見えるような、やや広い農道で津波の警報解除が出るのを待ったんですね。心細かったです。雪は降ってくるし、だんだん暗くなるし。

そのうちカーラジオで、仙台新港に10mの津波が来た、仙台空港が津波に呑まれたっていうようなニュースを言い出しました。あらこれじゃ深沼は駄目だなと思ったんだけど、なんか全然ね、自分の家が流されたっていう想像はできなかつたのね。避難する途中、空港が呑まれたって聞く前ですけども「いやいや、帰ってから津波の後の掃除大変だなあ」って話を2人でしてたんですよ。そのあと10mの津波に呑み込まれたって聞いて「あらあ、お父さん、掃除しなくてもいいよ。それどこじゃないみたいだよ」って話はしたんですがね。でも全然実感がわかなくて。

そこに2時間ぐらいいたでしょうかね。そのうちにわたし、トイレに行きたくなったんです。中学校が近かったんで、そこのトイレに行きました。中学校には地元の人が集まっていて、体育館から何か貰ってきてる。わたしも行ってみたら、おにぎりを配ってたんですね。それ貰って食べて。

だけでも寒くて寒くて。避難してる人数はまだそう多くはなかったんですけど、その晩は軽トラで寝ることにしたんです。軽トラだと、まだ少しはマシな気がして。余震は何回も来ました。ヘリコプターは飛んで来るし。左の方だから多賀城の方角でしょうか、煙とか火の手とかが見えるんですよ。暗くなると火の手がますますはっきり見えて、すごい不安でした。

2日目も体育館に行ったんですけど寒くていられなくて、その日も軽トラで過ごしたんですね。私の携帯だけ手許にあったんです。主人のはコタツの上に置いたままだから、財産というわたしの携帯と軽トラだけ。娘のところと連絡したんだけど、すぐ電源が切れちゃって使え

なくなって。閑上のデイサービスに行ってた姑とも連絡取れないんです。2日目の日中、公衆電話無料で使えるって言われて、お金も何もないもんだから並んでかけたんだけど、これも通じない。結局誰とも連絡取れませんでした。うちの人の兄弟が若林区で近くにいたもんですから、明日明るくなったら無事な姿見せながら回った方がいいってことになって、次の日回ったんですね。

最初に福田町の主人の姉さんのところに行ったら、泣いて喜んでくれて。「おばあさんと連絡取れないの。ごめんね」ってまず謝りました。おばあさんのことが一番気がかりで仕方なかったんです。そしたら姉さんに「いい、いい。年寄りには後でいいから。あんた達助かったんだから」って言われて、なんか、すごいほっとしたのね。「ああ、姉さんがこういうふうに言ってくれるんだったら、他の人に何言われても、まずは」って、気持ちが楽になった。

一緒に暮らしてた95歳の姑です。わたしたち夫婦は畑やってたもんですから、1人になる時間けっこうあるんです。デイサービスへ行けば友達もできるから、ということで行くようになって、3回目か4回目。楽しみにしてて、その日も「んじゃ行ってくるから」って喜んで出かけたんです。

わたしたちは一銭も持ってないから、お姉さん夫婦のところを取り敢えずのお金を借りて、上飯田に住んでた一番下の弟の家に行きました。そこの奥さんに「娘たちが顔色変えて探して歩いてたよ」って言われて。わたしたちずっと軽トラにいたために、避難者名簿に名前を書くってわかんなかったんですね。で、娘たちはどこを探してもわたしたちの名前が書いてないから、一番最初のニュースで、若林区の荒浜に200から300の遺体があったって流れましたよね。てっきりその中に入ったんじゃないかと思ったって。

3日目の午前中に八木山の娘の家に行ったら、ちょうど下の娘2人もいて「お父さんお母さん生きてて良かったあ」って泣かれて「なんで名前書かなかったの。今からグランディに死体を確認しに行くところだったんだ」って言うんです。中学校にも来て避難者名簿見た、小学校にも行ったって。何回か行って、知っている人に「逃げたようだよ」とは聞いたけど、津波でどうなったかはわからなかったって。どこに避難しても避難者名簿に名前を書いておくってこと、大事なんだなあと思いましたね。

その日の午後、子どもたちは「お父さんとお母さん無事だったから、じゃあおばあさん探してくる」って探しに行っただけです。まず名取の市役所に行ったら「生きてる人よりも亡くなった人を探した方がいいから、遺体置き場に行きなさい」って言われたんですって。そしてそっちに行ったら、そっちの人からは「いや、すごく人数が多いから、やっぱり生きてる人探した方がいい」って言われたって。それでいろいろ施設関係に連絡取ったら、日辺の方に助けられているってことがわかったんです。わたしたち夫婦はパニック状態で、子どもたちがみんなやってくれました。

閑上もすごかったんですね。なかなか逃げなかった人も多かったみたいで。閑上も深沼とおん

なじで、高い場所ってないんですよね。避難するのは、むしろ深沼より大変な感じしますね。深沼は東部高速が波をさえぎってくれたようなところ、ありますから。

おばあさんは閉上の施設で首まで水に浸かって、意識を失って毛布にくるまれて置かれていたんだそうです。意識のある人から助け出されたようなんですけど、途中で意識を取り戻して助けられて、日辺の「春風のころ」って系列の老人施設に運ばれて、無事だったんです。

震災後5日目ごろ面会に行ったんですね。まだ電気つかないから真っ暗で、お年寄りがいっぱい避難してました。みんな不安そうな顔をしていました。

おばあさんは、わたしたちを見つけて「早くヘリコプターに乗れ、ヘリコプターに乗れ」って言うんです。何を言われてるのかわかんなかったけど、ずいぶん落ち着かない様子だから「はいはい乗るから。んじゃまた来るからね」って帰ってきたんです。あとで考えると、ヘリコプターに乗って逃げろってことだったみたいですね。自分もヘリコプターで助けられたから。あとで行ったときは電気もついてたし、おばあさんも落ち着いてたから、もう言わなかったですが。

おばあさんを誰が引き取るかって兄弟たちと相談したんだけど、みんなそれぞれ事情があって、なかなかね。まさか避難所に、95歳で足腰が弱くなりヨタヨタってしている人を連れていけないし。困っていたらケアマネージャーさんが「閉上も深沼も同じ状況だから、しばらくこの施設にいていいですよ」って言ってくれたんで助かりました。

危機的な状況のお年寄りの方、いましたね。住むところ落ち着いたら、だんだんに引き取っていかれたようですけども。わたしたちも、おばあさんを中心に住むところを探したんです。一戸建ては見つからなかったんで、エレベーターのあるマンション。当初借り上げではなかったんです。家賃高かったのもう少し安いところって探してる途中で借り上げになるってことで。やっとみつかったのが今住んでいるところです。

おばあさんは3月の震災から5か月間施設にいて、友達もできて、施設の行事に参加して、楽しく過ごしてました。8月に入って、「お盆だし、そろそろおばあさん引き取らないと駄目だねえ」なんて言ってたんです。そしたらケアマネージャーさんが「急がなくていいですよ。連れていくと新しい環境に慣れなくて具合悪くなる人多いし、また入所させたいと思ってもなかなかできないから、いいですよ」って言ってくれました。

ちょうど8月12日、明日からお盆だからって、墓掃除してたんです。深沼の浄土寺です。墓石、見つかったんですよ。墓石も流されて、瓦礫処理してた人にみんな運んでもらってるから、うちでも運んでもらいました。

お墓探すのも大変だったんです。瓦礫だらけですからね。歩くスペース作るのに、次々と何か所かに積み上げて、下になってしまうと全然わからない。お盆までには見つけないって、みんな必死に探してました。なかなか見つからなかったら、近所の人が「あんだいのお墓、あそごいら辺にあるから見てこい」って教えてくれて。法名碑2つに割れて、棹石もありました。

家のお墓は、おじいちゃんの弟のお墓と並んで同じ所に、こっちうち、こっち叔父さんのとこ

って並んで建ててあったんです。そっちの家は子どもたちは遠くに住んでるから、奥さんに当たる86歳になる叔母1人しかいませんでした。そしてその叔母も、流されて2か月ぐらい見つかなかったんです。叔母の弟夫婦が近くに住んでるから大丈夫だろうと思っていたんですが、その弟夫婦も流されていて。だから自分の家の墓石だけじゃなく、叔母の家のも探さないといけなかったんですね。

なんかやっぱり、生きようって気持ちが強くないと。家の姑は生きよう生きようとしてましたけど、その叔母はいつ遊びに行っても「もう1人だし、いつ死んでもいいんだ」って。叔父の3回忌のときも「おれの葬式と同じなんだ」って言ってたような人なんです。我が家の斜め向かいの「おんちゃん」って85、6歳の人も「足弱ってるし体も弱くなってっから、おれいつ死んでもいい」なんて常日頃言ってたのね。姪っこ達が車で逃げるとき「一緒に行こう」って言ったんだけど「いい、いい」って乗らなかったんだって。だからそこらへんの意識ってのもあるのかなあと。

それで、8月12日にお墓掃除してたら、突然施設から電話が来て「おばあさんの状態が悪くなりました」って言うの。「これから救急車で脳外科の病院に運びます」って言われたから、わたしたちもすぐに病院に向かったんです。脳出血を起こしたみたいで、その日の夜10時ごろ亡くなりました。死に顔は安らかで「おばあさん起きて」って言うと起きてくるような感じでした。先生の話では血管が脆くなって、出血したとこが大きかったみたいなんです。前から持病の脳梗塞があったし、頸動脈も細くなってると言われてました。

初めて自宅跡に行っただのは2週間ぐらいしてからですね。なんだか行く気になれなかったんです。検問してたんで、免許証を見せて「家を見に行く」って言ったらすぐ通らせてもらって。検問通ったら風景ががらっと変わりました。道路の両脇が瓦礫の壁なんです。田んぼの中には松の木やら車やら家の残骸やらいっぱいあって。そして深沼の町の近くになると、娘たち「あれ、ここ誰々ちゃんの家だったよね」とか「なになに屋さんの店だったよね」とか、もう土台しかないもんですから、見るたびに「ええ、ああ」「ええ、ああ」って言うような、ほんとにびっくりした声しか出ませんでした。

そして家のとこに行ったら、土台と、一部の敷き板が残ってるばかりで。しばらくぼうっとしてましたね。ああここがお茶の間でここが座敷でここがお風呂場だったよね、そしてこっちはってというような感じで……。2年前にオール電化にしたんです。もう死ぬまで手を掛けなくてもいい、なんていうくらい直したんですけど、何もなくなってしまいました。買ったばかりだった野菜の冷蔵庫、農家やってたからお米入れといたり野菜入れといたりする、すごい大きな冷蔵庫なんですよ。それも流された。トラクターも。トラクターは貞山堀に頭を先にして突っ込んでました。だからほんとに土台しか残ってなかったです。

梅干し20キロぐらい漬けたのが、1個だけ埋まってたんです。すごい綺麗な色でした。ああ、

こんな綺麗に漬かってたんだなあと……。いつだったか八木山の娘の家に行ったとき、おにぎり握ってたんですよ。梅干しがあんまりないようだったんで「じゃあ漬けたのあるから、やっから」って言ったら「お母さん何言ってんの。流されたでしょ」って言われてしまったんですけどね……。

みなし仮設に移る前は七郷中学校にいたんですけどね、七郷中学校も地震に弱いところだったんですよ。それで10日目ぐらいに若林体育館に移ったんです。荒浜の人を中心に、七郷の人たちもいましたね。

体育館だから広くて自由に使っていたんですが、市の方から、七郷小学校も危ないから明日ここに引っ越しさせて欲しいって言われたんです。わたしたちは200人弱だったんですけど倍ぐらい来るっていうので、1日待ってもらって、それなりに計算して。あそこは段ボールの仕切あったんです。発砲スチロールの敷くやつも。発砲スチロールを1人どのぐらいの広さでって計算して、前からいた人の住むところを縮小して、場所を空けたんです。うちの人が頼まれてそういう役をやっていたので、みんなに協力してもらって。そこに300人か400人ぐらいの人が来て、合わせて500人以上の人数になりました。

体育館にいたのは2か月半。あの頃は大変だったけど、けっこうみんな協力してやってたように思いますね。そんなに大変だっという思いもなかったような気がします。物は流されたけど命は助かったんだって気持ちが強くて。とにかく夢中だったしね。食事当番は体育館に移ってからだから10日ぐらいたってからでしょうかね。列によって当番を決めてました。自衛隊の方も1か月近く炊き出しとかしていただきましたし。自衛隊の人が作ってきて置いていったものを、食事当番が盛りつけて取りにきてもらう。最初のうちは朝いただいて昼なし、というようなこともありましたけども、体育館に移ってからは分量は間に合いました。お代わりも、すれば出来るような感じで。

支援物資も来るようになりました。前に中学校にいたときは、小学校は正規の避難所だから来るんだけれど、中学校にはなかなか届かなくて。おんなじ被災者なので同じようにして欲しいって係の人にお話したことあったんですが。

お風呂に入れないし、下着取り替えられないのが辛かったですね。何日ごろからかなあ、山形の温泉からお風呂に来てくださってことで、バスに乗せてもらって何回か行きました。自衛隊の霞目駐屯地や苦竹のお風呂に入れて貰った人もいます。そのうちに、うちの人の友人のお宅やお姉さんの家のお風呂に入れてもらいました。

寝るときは布団がなくって、毛布を2枚重ねて掛けて寝てました。体育館に移ってからは段ボールで囲みがあったり、敷くものがあったりしたから、当初みたいな寒さを感じないですみましたけど。布団が来たのは4月になってから。「えー」って。もう少し早く来ると良かったのになってみんなで話したの覚えてます。

うちは農家だから、田んぼや畑がありました。畑は二郷堀のそばだったんです。家から離れた馬場の近くで、川みたいに大きい堰なんです。松林越えてすぐ貞山堀だったし、二郷堀の方からも波が来て。結構広い畑だったんですけど全部塩をかぶりしました。前の年の冬、すごい手入れしたんですよ。親戚から米糠いっぱい貰ってきて入れて、肥料も入れて、耕して、いまだかつてないぐらい手を掛けて、来年は良い野菜とれるなあと、うちの人と話してたら、その土が津波にすっかり運ばれてしまって……。

おまけに二郷堀にかかっている旧道の方の橋は流されちゃったんですね。で、護岸修理の工事の車が、うちの畑を駐車場みたいにしてたもんだから、ますます土が駄目になりました。色んな工事するのに、駐車場として正式に貸してほしいという話があったみたいなんです。あそこは畑としてはもう使えないでしょうね。

田んぼも塩水をかぶって、除塩のために山土を入れたんです。土に含まれてる塩を土ごと剥いで、そこに山土を。だから石がゴロゴロ入ってて、馴染むまで大変なんですね。今年はとりあえず豆を植えて、少しでも田んぼに精を付けようとしたんですが、蒔いた豆も芽が出てないのがいっぱいあって、スムーズにいったんです。うちの田んぼの中には危険区域になるところもあるんです。塩釜亘理線のかさ上げ道路の東側。そこで農作業するってのもねえ……。

メガソーラーとかの話を出してるんだけど、なかなか進まないようですね。できるだけ農家の人に良いようにって、行政では考えてるようなんだけど。農地政策っていうか、大型化するって話もあるんですけど、大型化すると今度は農地持っても十分に暮らしていけなくなる人も出てくるらしいんですよ。よくわからないけど、漁業の人たちは再建に向けてやっていますよね。だけど深沼の人たちって大部分が農業だけなんです。そして65歳以上の人が殆どで、長年やってきた中で農機具をいろいろ揃えて、もう死ぬまでこれを使って働けるって状況にあったんです。その農機具が全部流されてしまった、どうしようかって。今さら買えないし。農業の再建って難しい気がするんですね。若い人が跡を継いでいるような地域は、大型農業で結構いろいろやっているけど。

難しいけども、やっぱり現金収入を得るような何かを自分たちで考えていかないとと思うんですよね。畑に植えると何かしらは育つんですよ。野菜は、わりと塩に強かったみたいで。そういうふうなのをやって、自分たちで食べている人たちもいるけど、仮設に入って色んな支援物資来てるから、支援物資もらえるうちは何もしないで今まで苦労した分楽しようっていう話も聞きますね。でももう2年過ぎてます。これから何年あそこで生活するのかわかりませんが、そのうちに何ていうか、気力がなくなっていくんじゃないかと思うんですね。農家の主婦の人たちは、味噌作ったり漬け物作ったりお煮付け作ったり上手だから、そういうので少し生計を立てていけるのではないかなと。5年たっていざ何かしようたって何も出来ないんじゃないかと。難しいですけどね。

うちの人たち、畑を狐塚のヘリポートの入口に、十何軒か近所の人たちで借りて、やっтерんです。わたしは毎日じゃないけど主人は毎日軽トラで通って、前に植えてたようなものを小規模ながら植えてます。収穫も楽しいんですけど、バラバラに住んでる元の近所の人たちも来るんですよね。「おう、一服しろ」って言われて、馬鹿話をして笑って、午前中終わったりして、それがより楽しくて、みんな無事で元気なんだって。

生活再建に向けては、住むところが早く出来ないかな、というのが一番ですね。落ち着かないですよ、今いるところは仮の住まいって感じで。みんな同じだと思うんだけど、早く落ち着いたところに住みたいです。わたしたちも集団移転で、27年に宅地が出来る予定なんです。神屋敷ってところに人数分の宅地は確保してあるんですけど、自分の家はその囲いの中のどの部分になるかってのは、宅地造成が終わってから抽選で決まるわけです。だから、どこが当たるかわからない。それが決まっても、何百軒がいっせいに家を建てるわけだから、大工さんがすぐ見つかるかどうか不安ですね。

土地だけでもあればいいんだけど、前に住んでたところは危険区域になったし、もうあそこに住みたいとは思わないですね。なんていうか、こっちは緑があるんですけど、あっちはもう荒涼と。深沼で亡くなったのが186名なんです。なんかやっぱり、ざわざわって感じます。

親しくしてた人で、流された人が何人もいますね。テレビとか見ると思い出します。涙が出てくるんです。新町に住んでたうちの人の親友の奥さん、班長をしてて、隣の隣のおばあさんが地震で何かにはさまれて動けなくなったんだそうです。近所のもう1人の若い人と2人で助け出して、その若い女性が車で一緒に逃げましょうって言ったんだけど、本人は自分の車で避難するからいいって。ご主人は漁業やってて、海に避難してたんですね。その人は家に戻って、携帯で「お父さん、津波来るから気を付けてね」って言ったのが最後だったって。あとで、海に逃げて助かったそのご主人が「おらいのやつ、グランディで寝てた」って。同じ年代でね、仲良くしていたんです。

それからうちの遠い親戚で、深沼の方では農業の第一人者。当時園芸センターで会議やってたんだけど、すごい揺れだったから会議を中断してそれぞれ自宅に帰ったんですって。彼も奥さんが心配で、自宅に帰って奥さんを軽トラに乗せて、近くに事務所があったんで行って、大事な書類を持ち出そうとしているうちに波が来たんです。雇っていた若い男性2人は天井に逃げて助かったんだけど、彼は奥さんを軽トラに乗せたままだから急いで軽トラに乗ったんだけど、間に合わなくて流されたって。

あと、家の近所の5軒ぐらい離れた50代の夫婦なんです。すごい農業熱心で、いい野菜とか作ってたのね。そのときは買い物に2人で出たみたいなんです。母親が心配で戻ってきて、母親を車に乗せて荷物を取りに行ったときに津波が来たようなんです。夫婦別々のところで見つかったんですが、母親はなかなか見つからないで。その車が貞山堀に沈んでいて、しばらくして消防団が車を上げたんですね。そしたらその車に母親が乗っていたって。

わたしの叔母も亡くなっています。だからすごい重いですね。叔母はなかなか見つからなかったの。娘が家の近くを捜したとき、見つからずにいたけど、そこにネックレスとかハガキとかが落ちていて、「和子、私ここにいるよ」という声があったっていうの。もう1度お願いして捜してもらったら、そこに、見覚えのあるエプロンとバックをかけた叔母がいたんだって。娘は「母が、わたしに知らせていたのよね」って。いつもその人たちの笑顔が浮かんでくるの。うちの人の親友で奥さん亡くした人はね、今でも「あいづさえいてくれたらなあ」って言うんです。2年たって時間は過ぎたんですけど、だからって薄まるわけじゃない。かえって、なんかこう、思い出されるような気がして。

これまでだったら、死ぬってのは病気とか年を取ってとかだったんですよね。だけどこれに関しては突然いなくなるわけでしょ。なんだろう、死ぬってどういうことなんだろうって思っています。

避難訓練はたびたび行って欲しいし、こういうことがあったということを話して、つなげていきたいです。災害の形って、そのときそのときで変わるから、避難訓練の内容も変わっていくんですよね。前に参加したからいいんじゃないかって、その都度全員が参加する必要があると思います。そして、その訓練のとき、避難者名簿があって必ず記入することも強調してほしいです。家の娘たちのような心配する人がいなくなるように。

## 一度死んだようなものだから、何でもできると思ってたのかなあ

最知 幸子 (1944 年生まれ)

震災時 若林区荒浜在住

すごいよね、自然の力っていうのは。何を起こすかわかんないものねえ。

未だに信じられない。この草ボウボウのところ、人が住んでた場所だったんだらうかって。新町だけで 300 所帯、北区だって西区だって東区だって南区だって 100 所帯ぐらいあったのに。東西南北・新町が合わさってひとつの荒浜っていう町だったのに、それがもう何にもないんだもの。忘れられないね。

地震のとき、わたしは午前中は七郷市民センターの体操教室に来てたんですよ。うちの人も図書館に行って帰ってきて、一緒にお昼食べてゆっくり休んでいたんです。

そしたらあの地震が来たんだよね、ガタガタガタッてすごい地震、長くて長くてなかなかやまなかった。うちは角地で、北側も東側も道路なのね。何人かが道路を逃げて行くから、聞いたなら七郷小学校まで行くんだって。七郷小学校が避難所になっていたの。

向かいの嫁さんが赤ちゃん抱いて「おっかない、おっかない」って出てきたから、わたし「赤ちゃん預かってるから、オムツとか必要な物持って、七郷小学校に逃げたらいいよ」って、しばらく赤ちゃんを抱っこしてたのね。嫁さんは家の中入ってって色々持ってきて、「おばちゃんどうすんの、車あんの」って言うの。「わたしたちは自分の車で逃げるから先に避難してて」って赤ちゃん渡して、その人たちは七郷小学校に避難したの。

そのうちまわりもみんななくなった感じになったのね。わたしもお父さんと車に乗って家を出たんだけど、2丁目の交差点渡ったらすぐだね、渋滞で動かなくなったの。「なんだよ、なんだよ、こんなに車混んでて」ってお父さんと言ってたのね。

そしてふっと後ろ向いたら、すごい、なんていうんだらうねえ、音は聞こえなかったのね、そのときは。防風林を越えて、こう、濁流がね、20 m より高い防風林を越えて、ワァーっていうかゴォーっていうか、壁みたいになったのね。黒っぽいような茶色っぽいようなのが、松林の上から滝のようにかぶさって来たの。あの防風林、閑上の方から 10 キロ以上続いているでしょ。1 本 1 本の木だって高い。その木よりもっと高いの、その上からザーッと来たんだもの。「なんだ、あれ！」ってわたしが言ったら、「津波だ！」ってお父さんが。「早く前行け、早く早く」って言うてるうち津波がパーンと車にぶつかって……。

そしたら車が浮いたんだね。津波が車の下に入ったのかなあ。そしてそのままザーッと流されちゃったの。もう、なにがなんだか訳わかんなくなっちゃたのね。お父さんもこれで終わりだと思ったのか、ハンドルぎっちり握って離さないんだよね。

お父さんが運転してて、わたしは助手席じゃなくて後ろに乗ってたの。そのまま流されて、瓦礫だの角材だの、車にいっぱいぶつかるのね。角材がパーンとぶつかって、フロントガラスがピピピーって蜘蛛の巣が張ったみたいにヒビが入った。バックミラーがギギギギギーってもぎ取られるような音が聞こえんのよ。そして 1 回ガクンとなったのね。「ああっ、もう駄目だ」と思ったなら、そのまんま、また浮いたんだよね。なんかに乗ったみたいなの。

そしてずうっと1キロか2キロ流されて仙台一高のグラウンドが見えてきたの。グラウンド見えたなあと思ったら、グルーッと回って、また戻ったんだね。何ていう所だったんだろ、昔「谷地」って言ってた所なんだって後から聞いたね。そこの垣根にぶつかったんだよね。そしたらその拍子に窓が開いたのよ。前と後ろの、左側の助手席側。そして運転席の下の方から水が入ってきたの。「これは沈む」って、開いた窓から急いで出て、垣根の木に登ったんだね。お父さん前から登って、わたし後ろから。1mぐらいの間隔の木立だったのね。角のところにお父さん登って、1本置いて次の垣根の木にわたしがすがったの。車はそのまんま流されて、どっか行っちゃたのね。

窓は割れたわけじゃなくて、すーっと開いたの。木にぶつかって、その拍子に落ちた感じだった。不思議だねえ、エンジンもかかんないのに。それまではエンジンかかってたさね、渋滞で止まってたんだから。前や後ろにいた車もみんな濁流で流されて、あっち行ったり、こっち行ったり、どっか行っちゃったよ。木の上から他の車が「ああ沈む、沈む」って見たのもあるし、「あれ窓開いてるよ、人乗ってるんだ」って見てて、沈んでいった車もあった。

それで、木につかまったらいいけどさあ、見渡すかぎり泥沼でしょ。深さはわかるのね、ビニールハウスあるから。ビニールハウスの屋根ぎりぎり、屋根から10センチぐらい下がったところまで水が来てるから、ああ2mはあるなってわかんない。

足の下は泥沼よ。木は枝が張ってるから、枝につかまって。ちょうどわたしベンチコート着てたんだよね。ベンチコートの袖を木に縛って、それで体を支えてた。

お父さんもベンチコート。なんか2人ともいっばい着てたの。ズボンも3枚はいてた。なんでそんなに着てたのか覚えてないんだけど、逃げるときに、寒くなるんじゃないかと思ったのかもしれない。ズボンの上からヤッケズボンはいて、上もジャンパーの上にベンチコート着てたのね。帽子もかぶってた。上から下まで黒ずくめ。そんなの着て、いつも背負って歩くナップザックしょって、中に貯金通帳なんかも入ってて。そして2、3日前に温泉に行ったとき買った10個入りの温泉饅頭が入ってたのよ。

孫に届けようと思って、午前中体操に行ったとき回って見たら留守だったの。だからナップザックに入れたまま持ち帰ってきてたんだね。その饅頭が入ってた。

濡れはしなかったけども、雪降ってきて風ピューピューって寒かった寒かった。足の下を色々な物流れてくるんだけど、袋に入ったままの、新しいビニールシートも流れてきたのね、ブルーシート。いっばい流れてきたうちの、その1つだけが近くを通ったんだね。両手でしがみついていたのを、片方の手をはなして引き寄せたんだと思うけど、よく覚えてないの。本能だったのかなあ。

それ、たぐり寄せて、上側ビツと破いて、中のビニールシートを出したら袋に入ってたから濡れてはいなかった。大きかったの。お父さんが寒いって言うから、それを伸ばして、「お父さん半分巻いて。わたしも半分」って渡したんだけど、風吹くからピューピュー揺れて、落っこ

ちて駄目なの。そのうちに、どうなったんだろ。気が付いたらお父さんだけビニールシートかぶってて、わたしはないの。

足の下を畳だのガスボンベだの、いっぱい流れてるの。ガスボンベ、シュッシュって弾くのね。怖かった、なんてもんじゃないね。火いついたら爆発するわけでしょ。においも、泥臭いっていうか、いろんなもの入り混じって、なんとも言えないね。とにかくぎちっとすがってた。落ちたら死ぬって思ってたから。足は水の中で、ぐじゃぐじゃ。こんなちっちゃい木でしょ、鳥がすぎるように、すがってたから、余震が来るたびに揺れるのよ。そうすると落ちそうになるわけ。1回余震くるたびに「はあああ」って命がけ。頭はガンガンガンガンガン、もう、割れるほど痛くてね。

木にはわたしたち2人のほか誰もいない。その木立は屋敷のまわりの居久根で、そばに家があったんだけど、真っ暗で、そこまでたどりつけないの。沼の中だもの。歩いては行かれないし、垣根渡っては行かれない。木の上から「誰かいませんかー」って呼びかけても誰も答えない。別の方から犬の声が小さくワンワンって聞こえてきた。家とは別の方から、「うー」とか「あー」とか、女の人のような、言葉にならない声が聞こえたんだけど、そのうち聞こえなくなったのね。

近くにあった他の車は明るいうち流されて行ったけども、沈んだり、家の陰になってわかんなくなったりしたのね。右の仙台新港の方の明かりは見えただよね。左はものすごく明るかったね。あとで聞いたら閑上大橋の近くが焼けてたって。右手の仙台新港の方も火事みたいだった。でもそのうち見えなくなった。高速道路の方も見えて、いっぱい車が通るの。でも、いくら呼びかけたって聞こえないのね、遠すぎて。向こうからの声は聞こえるんだけど。

救助のヘリコプターは西のうほうからばんばん来るの。荒浜の消防ヘリポートからは1機も飛んでこなかった。あそこにヘリポートあるのになんで飛んでこないだろうって、思いながら見てた。そしたら津波でやられて使えなかったんだってね。西の方の、苦竹の方からのヘリコプターはばんばんばんばん飛んできて、閑上の方に飛んでいく。だけど気付いてもらえない。やっぱり高さは相当あるんだよねえ。見つけられなかったね。

夜には諦めたわね、いくら帽子振ったって、帽子は黒いし、着てるものは黒いし、みな黒づくめだから。それから着る物が派手になったの。震災後は赤とか黄色とかオレンジとか、そういうの着るようになった。

木の上でお父さんと話はできたんだね。眠くなるとコクンとなって落ちそうになるの。寝たら落ちるもの。落ちたら死ぬでしょ。それでも居眠りするんだよねえ。2人の距離は手を伸ばしても届かないくらい。私の背中にしょってた饅頭、「ほら」って投げた。受け取るんだって大変よ。平らなところじゃないから。木の棘が足に刺さってくるし。居眠りしないように、とにかく喋って、饅頭食べてたよ。何でもいいから口に入れないとたないと思って。しかしねえ、何でも出来るんだねえ、ああいうときって。

次の朝の6時半ごろかな、ヘリコプターが来たのは。その時はフラフラッと腰が砕けて、立ってなくなってしまった。救助隊の人に抱えられてヘリコプターに吊り上げられて、苦竹の自衛隊病院に入ったの。

自衛隊の病院には1週間ぐらいいたかな。ずうっと広い体育館みたいなところに、マット1枚あてがわれて、次から次と人が入ってくるの。そっちの柱に釘打って、こっちの柱に釘打って、ロープ張って、そのロープから点滴ぶら下げる。次から次と何十人も来るから、満杯でベッドなんかないもの。病気の人もいたかもしれないけど、ほとんど怪我、足折ったとかね。着の身着のまま、どろどろだったけど、着いたらすぐに白衣みたいなを着せられてね。

奥さんと車に乗って自分だけ助かった、という人も病院に入ってきたよ。シートベルト、水につかっちゃってるからどうしてもはずれないんだって。奥さんはシートベルト付けたまま車と一緒に沈んでいったって。窓から逃げて、瓦礫につかまって高速道路まで流されて這い上がった、という人もいたね。

わたしは怪我はしなかったけど低体温。体温が30度なかったの。大きな器械で一晩中あっためてもらってね。今でも血圧100はないの。上が98ぐらいで下が45か50ぐらい。震災前はちゃんと110とか120とかあったのに。

うちのお父さんは前は脊髄の軟骨が2か所潰れてるって言われてたのね。ところが震災では全部潰れてたんだって。コルセット巻いて病院に行って、薬飲んだりしてても、何かの拍子に「痛でで」って。最近では1か月に1回ぐらいになってきたけど、夜に夢見るの。前は1週間に2回も3回も見てたねえ。「あっち行け。あっち行け」って、夢見て、うなされて、蹴飛ばして、足の生爪剥がしたこともある。あんまりひどいから揺すって起こすと「ああ、夢だった」って。怖かったんでしょね、死んだと思ったって言うからね。本家のおじさんと実家の弟がこの津波で亡くなっているの。昼間は何も言わないんだけど、恐怖の体験が夢に出てくるんだかね。

そしてうちの人、ショルダーバック持ってたのね。木にすがってるときも、それが肩に食い込んで痛い痛いって。「そんなもの捨てなさい」って言ったら「図書館から借りてきた本、返さなきゃなんねから捨てらんね」って言うの。その日の午前中図書館に行って、借りてきた本が何冊か入ってるんだって。わたしは「あほ！」って言ったんだけど、それ背負ってたから重たいわけよ。通帳も入ってたから、それもあったのかもしれないけど、捨てられなかったんだね。

いやあ恐ろしかったね。ほんとに奇跡だったって言われた。うちの近所でも随分亡くなったもの。旦那さんが亡くなって、奥さんだけ助かった人もいたの。家に2人でいて、旦那さんは車のキーを持ってエンジン掛けに行くと、奥さんはちょっと遅れたんだって。そこに津波が来て、旦那さんは車のキーを握ったまんま亡くなったんだって。奥さんは自分の家の梁に朝までしがみついて助かったの。

仲良くしてた5人組も、わたし以外はみんな亡くなってしまった。後藤さん、池田さん、佐藤

さん、渡邊さん、その日も市民センターに来て「じゃあまた後でね」って言って別れたのに。ホントにあんな大きな津波来ると思ってなかったからねえ。同じ荒浜でも、わたしたちが住んでた新町は海から一番離れた西側だったのね。その東側には旧部落の西区や北区や東区や南区があって、貞山堀も防風林もあったわけでしょ。津波はそれを全部乗り越えて、新町まで来たわけだからねえ……。

「逃げてください」とか「津波が来ます」とかいうような放送は全然聞こえなかった。防災無線の設備はありましたよ、ちゃんと。マイク、四方八方になってて、そっちの公園にもあっちの公園にも。防災訓練なんていうと、うるさいぐらい聞こえるの。だけど肝心のときはなんにも聞こえなかった。あとで聞いたら、みんな先の地震で壊れたっていうんだもの。

あれから精神的にも肉体的にもガタガタ来てさ。いったんは長野県にいる娘たちが迎えに来て、娘のとこに行ったのね。だけど落ち着かないんだよねえ。お父さん置いて、わたし1人でまた戻ってきたの。避難所になってた若林体育館に入ったんですよ。お父さんは1か月ぐらい遅れて来たかなあ。そのあと体育館で暮らして、6月に仮設に入ったの。

自分の家、見に行きましたよ。何にもありません、基礎だけ。あとは石塀がちょっと残ってたけど、ほかは何にもない。がっかりを通り越してさあ、なんて言ったらいいんだか、もう言いようがないんだよね。

わたし、変わってんのかしらね。こっちに来て、体育館から毎日荒浜の元の家に行ったの。車2台とも流されたから、自転車だね。1日2時間貸してくれるって自転車があったの。その自転車を借りて、毎日荒浜に見に行ってた。みんな、怖くて行かれないって言うのにな。そして見に行ったら帰ってくると、お昼過ぎちゃうの。そうするとお弁当も何もないの。昼抜き、毎日。

そうまでして行こうとした理由って何なんだろうね。自分でもわかんない。でも行ったんだよねえ。体育館にいても何もすることないからかもしんないけど。ダンプだの重機だの、ガーガーガーものすごい砂ほこりなのに。ああここには友達が住んでいたって、確認しに行ってたのかもしれない。ここには誰が住んでいた、彼が住んでいたって。ほかの人は体育館で寝てんのね。みんながっかりしすぎて、腑抜けになったみたいな様子の人もあるの。わたしはそうしては入れなかったんだよねえ。

花が好きだったからね、何かしらないかと思って見に行ったのもあるかもしれない。ノウゼンカズラとかボタンとかシャクヤクとか、春夏秋冬に咲く花いろいろ植えといたから、何かしら出てくるかなあと思ったのかもしれない。なんで行ったかわかんないけど、とにかく毎日行ってたの。

背骨折ったのは、それからすぐ。また病院に逆戻り。ボキーンと背骨折って、動けなくなって救急車で運ばれたの。何十人も亡くなったから、葬式がいっぱい重なって暇なし葬式。その日も午前中葬式に行ってたの。そして帰ってきて、水が配給されていて、20リッター入りのピニ

ールのタンクみたいなのが玄関の狭いところにあったから、階段登るのに邪魔になるわけよね。よけようとして持ち上げたら、ボキッとなって……。痛いものにも、起きられなくなっちゃたんだね。

そして寝たきりで、しばらく動けないでいたんだね。ぎっちり2か月は仙台整形に入院してたかね。そのときりハビリのために折り紙やったのね。それがきっかけで後で震災の小物づくりを始めたの。

わたしは農家じゃないけど、近くの畑を借りて野菜作りをやってたの。今も借りて、キュウリいっぱい取って漬け物として出してる。1回行くと100本も200本も取れんよ。今朝もどっさり取ってきてね。みんな1口サイズに切って、ばっちり重しして塩漬けて、1週間か10日漬けてく。塩ぎっちり入れるからきれいな色になる。そして今度2、3日塩抜きして酢と砂糖で漬けると、おいしく漬かるの。仮設の集会所のカフェに、毎日井で出すのね。それ、みんなおいしいおいしいって、よく食べる。すぐなくなっちゃうの。

立ち上げるの、大変だったんですよ。カフェもだし、そのほかのことも。やっぱり反対の人がいるから。それを押さえ込まないと出来ない、エネルギー使うのね。集会所でカフェやるにも、委任状取って臨時総会まで開いた。そこで多数決でやってもいいということになったの。

わたし「鶴亀会」というのと「ひなげし会」というのもやってるの。「鶴亀会」はカエルやカメのストラップとか復興風船とか小物を手作りする。病院で覚えてきた折り紙の復興風船をメインに、そういうのを作ってふるさと祭りなんかにも出してるの。そうするとみんな買ってくれるのね。売れると、そのお金でお菓子買ったりして、仮設集会所のカフェで出すの。そこで出す漬け物なんか「鶴亀会」の人たちで作るの。近くの畑を借りていろんな野菜作って、それを漬け物にするの。漬けて、試食してもらって、欲しいって人には買ってもらう。集会所においておくとみんな「ちょうだい、ちょうだい」って。「いや、ただではあげられないよ。1年かかってやっと取れたんだから。なんぼなら買う？」って言うのと「んだなあ」ってはっきりしないわけよ。みんな何気なく食べてるんだよね。でもキュウリは種から蒔いて育ててね、100本も200本も週1回ずつ取ってきて、漬け物にして出してんのね。その手間ってねえ。

畑は「狐塚」って貸し農園を震災後に借りたの。はじめはラッキョウね。塩水かぶった畑だから何もできないでしょ。ラッキョウだったら強いからと思って、ラッキョウ3キロ買って、お盆過ぎに植えつけたの。3キロのラッキョウから15キロ取ったよ。そして塩漬けて、塩抜きして甘酢漬けて、ひと袋700グラムぐらい入ったかね。それを500円で出したら、1日で完売してなくなった。それも「鶴亀会」の人たちで漬けたの。取ってきて、ヒゲ切って、きれいに洗って、塩漬けて。その後は大根と白菜。それもすぐ売れちゃった。食べ物は売れるね。カエルやカメの小物は1回買うとあとは買わないけど、食べ物はおいしければ何回も買うね。

カフェはね、集会所のちょっと奥に引っ込んだところにテーブル出したのね。はじめは名前な

んかなかったの。ある人が「なかよしカフェ」って名前付けてくれたのよ。みんな仲良く、誰でも気軽に飲めるように、なかよしカフェにしたらいいんじゃないのって。それで「なかよしカフェ」って書いておいたら、みんな来るようになって。毎日、ほとんどそこに交代で詰めてるの。9時半からテレビ体操やるでしょ、それ終わると、何にも催し物がなければお湯を沸かしてコーヒータイムが始まるの。そうするとおばあちゃんたちが来るんだわね。

もう一つやってるのは大正琴。こっちは月曜日と水曜日。この間は市民センターに行って、イベントで弾いてきたの。支援物資で何台も来たんだけど、誰もやったことがない。まずはやってみようということになって、さわってみたら音は出るの。だけど習わないことには弾けないんだよね。それで先生を紹介してもらって、その先生に楽譜とか頂いて覚えたの。「荒城の月」とか「知床旅情」とか演奏するようになって、今15人ばかり。それを「ひなげし会」と名付けたの。

わたしは転勤族なの。北海道にもいたし、沖縄にも。東京航空交通管制部ってのがあって、お父さんがその管制技術官。飛行場があるところ2年ごとに転勤してたんです。

荒浜の家は昭和57年に建てたの。新町にまだ100軒なかったころ。震災のときは320所帯ぐらいに増えてました。わたしにとっては、1番長く住んだふるさとだから、離れたくないよね。ここの復興公営住宅、借りようと思って申し込んだんですよ。今さら建てられないけど、一戸建ての家を借りて住んだ方がいいと思って。そしたら高压線が通ってる下が指定されてきたの。それではがっかりしてしまった。道路幅は狭いし歩道もないし。年取ったら車よけて歩くんだから、歩道ないと困るでしょ。

それで長野に住むって決めたんです。なかなかふんざりがつかなかったんだけど、長野の娘ぐ家の近くに家買ったの。決めてからは早いね。8月に引っ越し予定だから、もうすぐだね。今、畑に里芋植えてるんだけど、その収穫はできないわねえ。一緒にカフェやってる人たちが「最知さんいなくなったら、どうしよう」って言うから「みんなで続けていきなさいよ」ってハツパかけてるの。

「鶴亀会」も「ひなげし会」も、なんでこんなことしてんのかなあって思うけど、死んだと思ってるからかもしれないね。もうなんにも怖くない、というか、一度死んだようなものだから何でもできると思ってるのかなあ。自分でもよくわからないけどね。

## こういう目にあったからこそ、古里の思い出がほしい

佐藤 豊 (1937 年生まれ)

震災時 若林区荒浜在住

思いがけないことに出くわしたときの人間の気持ちって、ほんと、わかんないものです。後でそのときのことを思い出してみても、自分でもはっきりしない。思い出そうとしても、肝心の部分が思い出せなかったりして。

津波に出遭ったときもそんな感じだったんだね。3月11日、若林区の霞目から自宅の荒浜新町に車で向かっていたとき。家に帰らなくてないんだから、とりあえず急いではいたよね。南長沼のちょっと手前まで来たら、目の前に、いきなり白い壁のようなものが突き立ったんだな。高さは……10 m以上もあったかねえ。横幅はすっかりは見えなかったけど、目の前全部壁みたいになってたね。左奥とか右奥とか、視野からはずれた部分はようになってたかわかんないけど、視野に入ってる部分はとにかく全部壁だった。巨大な平った壁がグウッと迫ってくるって感じ。

「あれ、なんだいや。タバパソコン遅くまでやってたから、目がおかしいのかや」なんて思って、目をいじりながら壁に向かってそのまま走っていったわけだ。そして長沼の入口の辺まで来たら、白い壁の上がちょっと動いてんのね。さすがに変な気がしてね。これ、ぼくの目が悪いんでない。確かに壁だ、何が動いてるんだらうってよく見たら、家なんだよね。

巨大な白い壁の上で家が動いてる。浮いてんの。そこで初めて「あ、これ津波だ！」と思って。津波というのは、海から波状に、水平に押し寄せて来るものだと思ってたもんだから、思いもつかなかった。

そこで初めてブレーキを踏んで、とっさに後ろに手を伸ばしてカメラをさぐった。写真をいじっている人間のクセかなのか、最初に思った事がチャンスだ、これ写真に撮ったらいいの撮れるぞ。スクープになるだろうな。まず考えたのが、それ。ぼくはいつも車にカメラを積んでるので、一生懸命後ろ手で探したんだけど、カメラがないの。「あ、カメラないわ、これ」と思って、カメラがない理由を思い出した。自分で下ろしてたんだ。大きな失敗したような気がしてね、津波を目の前に見てんの。距離的にはいくらも離れてない。200～300メートルくらいかな。それなのに、逃げるなんて頭、全然なかったんだね。

それがカメラないのに気付いたとき、これは写真どころじゃない、津波だったら自分も危ない、ってようやく感じたわけだ。そう感じたとき、今度は怖くなったんだね。津波って速いものだと聞いてるから、巻き込まれたら終わり。なにせ目の前だから、Uターンする時間ももったいない。Uターンするためには、少しでも前に出なくてないから、津波に近付くようなのもおっかないし。そんでバックにして今来た道ズズズッと走って、笹新田のあたりまで約800メートル位バックで来て、そこでようやくUターンしたの。

その道、ぼくと反対方向を向いて車がたくさん止まっていた。霞目から帰ってくる途中の、藤田から入って荒浜新町に行く道路、南長沼の脇の道路だね。渋滞じゃなくて、止まって休んでる。少し前に大地震あったからね、津波警報が出て、避難しなさいというような放送があったと思うのね多分。それでその人たち、放送聞いて出て来て、とりあえず県道を越えたから大丈夫だと思って、車を止めて様子見てたんだと思う。だからぼくも「なんでこんなに車があるんだらう。あ

あ、これは津波か何かの警報が出たんだな」と思いながら家の方に向かって走ったんだもの。全部の車が海側に後ろ向けて、内陸部の方を向いてた。反対車線を走ってるのは、ほく1人。津波に向かっているとは思っていないですからね。

とにかく、そういうことで、ほくは海の方を見てたから津波が見えた。ほかの車は内陸の方向いてたから、見えなかった。バックした距離は200か300、いや400m位かと思ったけれど、実際の距離は800メートルありました。長沼の道路から前谷地あたりまで車がたくさん待機してて、藤田から笹新田の間はいなかったんでようやくUターンできたんだからね。

バックで走ってる時は、とにかく夢中。少しでも津波から離れなくてない、逃げなくてない、ってことだけ。津波の速力は相当のスピードと思っていましたが、意外と遅くてだんだん津波から離れて津波が遠ざかり安心し、Uターンして車の向き変えたとたん、今度は、今出てきた霞目の姪っこの家に早く行かなければ、ってことだけしか頭になくなった。それで姪っこの家に着いたら「いきなり壁みたいなの来て、ああいう津波ってあるんだおなあ」なんて、そんなことばかり興奮して喋ってた。

あの並んでいた車の人たちどうしたろう、なんて考えたのはずっと後。ああいうときは自分だけ助かろうとすんのかね。そういうわけではないんだけど、余裕がないんだよね。気が回らないというか。バックで走るって前向いて走るよりずっと神経使うから、脱輪しないように運転に気を取られていたってこともあるけど、それにしても同じ逃げるんなら、窓開けて「津波来てるぞー」とか大声で叫べばよかったんだろうけど、まるで考えつかなかった。それくらい動揺していたんだね。ただ、ほくがバックで逃げてきてるんだから、そのときおかしいと気付いて逃げた人は助かったと思うよ。時間は充分あったから。と、勝手な解釈を許してもらっているのです。

姪っこの家に帰り着いて津波の話をして、誰か犠牲になった人がいるかもしれない、なんてことも思わなかった。反対車線に並んでた車の人たちのことも考えつかなかったし、家内のことも全然思わなかった。ほくが家を出るとき「地震で崩れたもの、帰ってきたら一緒に片付けるから、とりあえず休んでいらいん」と言ってきたんだから、荒浜新町の家には家内はいるはずだったんです。どうなったか考えなかったのは、本当に不思議です。

だんだん時間がたって落ち着いてくると、津波があったってことを考えはじめた。きちんとした情報を聞いたわけじゃないけど、ヘリコプターいっぱい飛んでるし、さっき自分も津波見てるから、相当に大きい津波だから殆どみなやられたんでないかってことが、だんだん頭に浮かんでくる。霞目飛行場の近くだから、ヘリコプターがしょっちゅう行ったり来たりしてるわけだ。これは津波でやられたから、こんなにヘリコプターが飛んでるんでないかって思うようになったのね。停電でテレビもラジオもなかったけど、何となく雰囲気はわかってきた。もう駄目だおな、なんて姪っこと言った。

それでも自分の家が流されたかもしれないとか、家内が危ないかもしれない、なんてことは思

い付かないんだよねえ。家内や姪の親たちも深沼にいたんですから、なぜそれを考えなかったのかと、本当に不思議です。

どうして姪っこの家に来たかって言うとね、その少し前に大きな地震があったでしょ。2時半過ぎに。うちは地盤が良かったのか大したこともなかったんだけど、それでも鏡台が倒れてガラスが割れたりしたんです。家の中を片付けないとなんだけど、おふくろがいるんだよね。今年97歳、当時は96歳で自分では歩けないの。それで、家の中片付けたらすぐ迎えに行くつもりで、ちょっと霞目の姪っこのところに預けてこようと思ったわけ。

その時家内に「どうせ霞目に行くんだったら、清さんも乗せていったらいいんでないの」って声掛けられてね。ああ、そうだと思ったの。清さんって、近所に住んでるぼくの妹の旦那で車イスに乗ってる人。ぼくが行こうとしてた霞目の姪っこは、妹と清さんの娘にあたるんだね。

それで、清さんに乗せるために、自動車の後ろのイスをスパナで外したんです。カメラはこのとき自分で庭に下ろしたんだね。津波が来るなんて頭がないから、余裕持って外した。とりあえずおふくろを姪っこのところに送っておけば、あとは安心して片付けられるってだけだから。それからおふくろを車に乗せて、清さんも乗せるために妹の家に寄ったんだね。

妹の家は玄関の下駄箱が倒れたりして、とにかくメチャクチャ。車イスが家から外に出るような状態ではなかったのね。それを妹と嫁さんが倒れたものを寄せて、車イスが通れる状態にしようとしてたところだった。ぼくが「霞目の姪っこのところへ行くんで、清さんも乗せていくから」って言ったら、嫁さんが「霞目の方へ行く道路は渋滞で通れない」って言うんだね。それで自分たちはこれから近くの荒浜小学校へ行くって。荒浜小学校が地域の避難所になっていたから。

「そんじゃそうして。とりあえずおれもばあちゃん連れて学校へ行くから」って、清さんは乗せないで学校の方へ走ったの。少し走ったとこで農道の方を見たら、けっこう通れそうなんだね。これだったら霞目まで行けるやと思って、荒浜小学校へ行くのはやめて農道を通って霞目の姪っこの家へ行った。

おふくろを下ろして、1人では歩けないから手を貸して家に入れて、折り返し帰ってきたわけだ。時間にして1時間にもならなかったと思う。津波を見たのはこの帰り道。家内が助かったのは、その後妹の家に行ったから。自分で言ってたまえ、ぼくが清さんも乗せていったたかどうか妹の家に確認に行ったんだって。そしたら車イスは外に出されていて、ぼくがすでに荒浜小学校に行ってるはずだって言われたんだって。「津波警報出てるんだから、とりあえずこのまま小学校へ行きましょう」って言われて、妹たちと一緒に荒浜小学校に避難したわけだ、歩いて、車イスを押して。

車イス押していると、荷物あっても持てないんだよね。それで、とりあえずの荷物を、嫁さんが車に積んで学校に持っていったんだって。そしてみんなも学校に避難した、嫁さんはそのまますぐ家に戻った。そして犠牲になった。命運のある人となない人と、そういうところで違うんだろう

ねえ。ぼくらの場合はおふくろがいたために助かった、おふくろいなければ当然ぼくらは家の中片付けてるわけだから。ところが嫁さんの方はねえ。そういうのはやっぱり運命かねえ。

七郷中学校で犠牲になった生徒が2人いて、その1人がその嫁さんの息子、妹にすれば同居の孫なの。3月11日だから、卒業式とか分散会とかあるんだよね。孫は野球部に入ってる、その日分散会があったんだって。分散会に行っていれば助かったんだけど、たまたま分散会を抜けて家に帰ったんだね。本当に残念です。

1週間ぐらいたってから嫁さんの遺体が見つかった。学校の手前にある、ちょうどカーブしたところのセブンイレブン、そこの曲がり角のそこは、瓦礫がみんな寄ったところなんだね。そこんところに車があったんだけど、1番下になってたから、上の方を片付けるまで1週間ぐらいかかった。

なんで嫁さんだっかってわかったかって言うと、嫁さんの姉さんが岩沼にいるの。んで岩沼にひと晩泊まって次の日、埼玉県に行くって計画してた。それで荷物積んでたんだね、寒いときだから冬の支度とか何か。せっかく埼玉県まで行くんだからね、色々なもの。その荷物が車にいっぱい積まってたって。そして荷物を積んで支度してた、その時間分だけ逃げる時間に足りなかったんだね。

その息子の遺体は石場ってところに流れ着いていた。見つけたとき、おらいの妹「違う」って言ったの。「これ、健ちゃんでない」って。「だれ健ちゃん、こんなに立派なの着てるわけない」って。いつもジャスだの何だの着てるから。見つけた遺体は、冬の、ちゃんとしたオーバーみたいな、毛の付いたの着てたから健でないって。んだけど、埼玉県に出かける予定だったから、そういう支度して準備してたのね、今まで着たこともないような外出着きて。

健だけどうして北西の石場の方に流れ着いたんだろうって、それも考えるんだけど……。車に乗らないうちに流されたものか、嫁さんと一緒に乗って避難しようとしてた途中で流されたのか。乗ってたと思うんだよね、助手席の窓ガラス割れてたから。どっちだかはわかんないんだけど、たぶん一緒に乗って、小学校に行こうとして家から出て、西側の道路に入る途中で流されたと思う。

それは後の話ね。当日はそういうことはまるっきり思わないわけさ。当日は何も考えないで寝たのかもしれない。家内のことなんかも考えないで。その晩どんなふうにして寝たんだか、全然記憶にないんだね。停電で電気は付かないし断水で水はないし、暗い中ヘリコプターがいっぱい飛んでるんだから、まるっきり普段と違う状況だったはずなのに、それも覚えてないんだから。ただ思い出すのは、津波の状態を写すことができなかったこと。津波の写真撮れなかったことばかり考えてた。突然思いがけないことに遭うと、人って、そういうふうになるもんだべか。

だんだん状況がわかってきて、どうなってんだかって焦り出したのが次の日あたりだと思う。

避難して助かった人たちは苦竹にいるとか、霞目にいるとか、いろいろ言われて。いろんなこと聞くと、そっちの方に行ってみたりして。とにかく情報集めたさわ。早く言えば妹とその旦那の清さん、姪っこのお父さんとお母さんだね。車イスだから清さんどうなったべって。自分の家内は完全に亡くなったと思ってたから、最初っからあきらめていたからか頭になかった。考えないの。努力して考えないようにしていたんではないんだけど、浮かんでこないの。これも不思議だよね。

家内は死んだけど、妹と清さんは荒浜小学校に行くって言ってたんだから、行ったはずだと思ってた。だから霞目とか苦竹に確認に行ったわけださ。ただ健ちゃんとかミキちゃん、その亡くなった嫁さんミキちゃんて言うんだけど、若いし車持ってるから助かってるってあんまり心配はしてなかった。

荒浜小学校に避難するって言った、妹と妹の旦那だけを探してた。そして2日目の午前中に、清さんは車イスの身体障害者だから、ヘリコプターが最初に救出してるって聞いたんだね。同じ学校に避難した人が「清さんの奥さんもヘリコプターに乗って、付いてってたよ」って言うから、んじゃ助かったんだと分かったのね。その後いろんな人から話を聞いてるうちに「和子さんもいたよ」って言われた。うちの家内は和子っていうの。妹の名前も和子。「んだ、和子も無事だったんだ。ただ、今どこにいるかわかんないんだ。苦竹の自衛隊病院に行ったようなことは聞いたんだけども」って言ったら「いや違うよ、あんだの家の和子だよ」って言われた。こっちは「死んでる」って思ってたからね、「妹の方の和子だべ」って尋ねたら「違う」って。

「んじゃ生きてるんだ」って、それから今度は自分の家内探し始まったの。霞目の自衛隊に夜になって行ってみた。荒浜小学校に避難した人は霞目に連れて来てるって聞いたから、行って待っていたわけ。ヘリコプターが何回となく来るんだよね。ヘリコプターはちょっとずつしか乗せられないから、何回来てても確認取れない。「いや、そういう人、乗ってない、乗ってない」って。そしたら1番最後だったんだね、来たの。若いっていうか丈夫だっていうか、そういう人は、乗せられんの最後だったから。

探して探して、最後のヘリコプター来るまで自衛隊で待ってた。このヘリコプターで最後ですよ」って自衛隊の人に言われたんだけど、それに乗ってるって確認は取れなかった。自衛隊の方だっていちいち対応してられないからね。1時間か2時間たって初めて「荒浜の最後の人に来て、待機してる場所はどこそこですよ、案内しましょう」って言われて。

そこでようやく会った。普通の姿だったかね。濡れててもそのまま来たって言ってたね。寒かったって。荒浜小学校にいたときは毛布が3枚ぐらいずつあったんだって。だけどすっかり濡れたひどい人たちいるからね。そういう人たちに毛布やって、1枚ぐらいでひと晩申いたから寒かったって。

最初のうちは寒いも何もわからなかったって言ってた。下半身みな濡れてるけどもね、寒いなんて感じもなかったって。小学校に避難したときは濡れてなかったの。ところが最初2階にいた

んだけど、だんだん水が上がってきて、ここでは駄目だって3階に移動することになったんだって。車イスの清さんいるから、みんなで抱えて3階に上がろうとしてるうちに水が増えてきて間に合わなかった。それで下半身が濡れたってことなんだね。

荒浜小学校も津波かぶったんだ。当日の晩は周囲が全部水で、外に出るなんてまず無理だった。3階まで水が来たんだから。でも次の朝には、歩ける人は七郷小学校まで自力で歩きなさいって言われたんだって。それで30人か40人、歩いて行ったって。その人達、腰まで水に浸かったらしいね。しかも足場も悪いんで、靴はいたり、いろいろ工夫して、消防団の誘導で消防のホースを綱のかわりにして、そのホースを頼りに水の中を歩いたって。石場の近くまで、石場というより長沼あたりまで、そういう状態だったようだね。

荒浜小学校の校長先生、誘導の仕方も統率もよかったって。子どもたち、全然犠牲になんなかった。犠牲になった生徒っていうのは、頭痛いとかって途中で帰った2人だけだった。校長先生の誘導がよかったから、ここに避難した人たちもみんな助かったって。

学校にいた人たちの話を聞くと、貞山堀から第1波が来たって言うね。閉上の方から遡って。貞山堀越すくらいのもので来たんだけど、そんなに犠牲が出るほどの大きさでなかったって。その後に来たのが第2波。海岸の松林が切れた端から来た津波が、学校まで来てる。この波が1番犠牲者が多かったって。第1波の引き波と第2波がぶつかり合って渦巻いて大波となったって。

不思議なのは、「狐塚」ってところは小さい松の木が5～6本とお宮が建ってる、いくらも高さが無いところなんだけど、あそこが犠牲になってないことだね。園芸センターなんかもっと奥にあるのに、その園芸センターまで強く波が来てて、狐塚は助かってる。いったん陸に入った津波が、まっすぐに来ないでぐるっと回っていつてるんだから、波の動きって複雑なんだよね。

2～3日は妹夫婦や家内の安否確認するんで、自分の家を見に帰るなんて状態では全然なかったのね。3日目で確認とれて初めて、健ちゃんとか嫁さんとか探しに入ったんだけど、そのころになってガソリンがない、食料がないで大変だったね。当時は布団で休まなかった。夜はガソリン入れるためにガソリンスタンドの前で休んでるし、昼はその車使って甥っ子が自分の身内を探し方する。ぼくの車を使わないと探して歩けない。大きい車はガソリン使うけどぼくの車は軽だったから、それにガソリン入れた。そして空いている時間は食料品探し。だから2日3日たって、日にちが変わるっての、さっぱわかんなかったね。

自分の家に行ったのは4日目くらいだと思う。思う、というのは、あの辺の写真撮ってんのあるから。どうしてこの写真あるんだろうなと思うんだよね。ぼくはカメラ持ってないんだから。カメラ借りるか何かして、それ持って遺体探しに歩いてたとき、何枚か撮ったんだろうね。自分でも覚えてない。頭がパンクしてた、というか、目の前のことしか考えられない。まわりの状況に押されて手足だけ動いてるみたいな感じだった。

甥の一家もぼくらも、全部霞目の姪っこの家に泊まった。1か月ぐらい3所帯そこにいる、

その後は家内の弟の家が新寺にあるんで、そこに1か月ぐらい。

最初はいいんだけど、だんだん長くなると居辛くなるっていうか窮屈になるんだね。いくら常日ごろ仲良くしてるからって、同じ空間で生活すると、やっぱり苦になってくる、女の人は特に。いいとこ1か月、あたりの話聞いてもそうだね。

仮設住宅の紹介もあったんだけど、家には97歳の婆ちゃんがいるので上がり降りできない。それで民間の借り上げ住宅を借りて……。しばらくそこにいたんだけど、婆ちゃんに「ここでは死ねない、自分の家の畳の上で死にたい」って言われて、金剛沢に中古の家を買った。いずれ荒浜に戻りたいとは思ってるんだけど、戻れる状態でないからね。

荒浜に観音様できたよね。その観音様のところに2坪ぐらいの小屋建ってるんだけど、ぼくは今そこで写真展をやってる。何もなくなったら、荒浜は終わりだからね。せめて思い出だけでも残しておきたいと思って。最初は震災の翌年、浄土寺のお墓の前でやったの。墓参りに来る人たちに見てもらいたって。津波をまぬがれた人たちは昔の写真をもっているだろうと思うしね。現在荒浜は全部なくなった、けども元はこうだったんだよっていう昔の写真が欲しくて。お墓だとみんな来るし、離れていった人も集まるから。そう思ってやったんだけど、あんまり効果なかった。ないっていうよりも、みんな写真ってそんなに大事なものだと思わない。とりあえず生活が主だよ。これからだんだん仮設を出て自分の家に落ち着く、落ち着いて初めて思い出が出てくる。そのときの思い出を残したくてしたんだけどね。

お墓には地元から出た人も来るからやったんだけど、古い写真は持って出ないのね。自分の家に置いてく。結婚式の写真ぐらいは持って行っても、子どもの頃の写真は納屋や実家の倉庫に残しておいて、持って行く人いないの。だから大概、荒浜の写真はよその人から来るね。趣味で荒浜に写真を撮りに来た人たちが寄越してくれる。ぼくが撮ってたのは全部流されたから、震災前の写真はよそから提供されたものだけ。提供された写真のところに改めてぼくが行って、今の様子を同じような状態で撮ってきて、昔と現在と並べてみる。そういう風な形でやってるんだけど、よその人は理解できないね。地元の人にはわかる。懐かしく見るのが地元の人。よその人は「ああ、これだったら津波の写真も」ってことで、今は津波の方が主なの。

提供された写真に、6年ぐらい前の荒浜の海岸、貞山堀の南側の井土浦近辺の松林撮ったのがあった。そのとき高波来てんの。それが写真でわかる。発泡スチロールなんか全部流れてきて、そのときも南側の松林みなやられてんの。その写真を前もって見てたら、あのときここまで波が来てんだから、これよりもっと大きいのが来ればって、もう少し対応が違ってたんでないかと思うのね。行政の人たちの目に止まって、あれ参考にして何かやってれば、何とか予防できたかもしれない。ぼくらは今だから思うんだけど、今回のこの地震ももっと広めていけば、被害がもっと少なくなるんでないかと思うのね。

その前から記録写真てことは言われてた。中島惣兵衛先生って、荒浜にいた先生が深沼の郷土

史を作ろうって頑張ってたんだね。ぼくは船乗りだったもんだから、船降りて荒浜に住むようになったとき「今の写真、撮っておきなさいよ。いつか必ず役に立つことあるんだから」って言われて、折に触れて写真撮ってたの。その先生が荒浜史作ろうとしたときに亡くなってしまった。ぼくの写真、全部流れてしまったけど、データは先生にも渡しておいた。そのデータも、先生が亡くなったときに家族の人が他のものと一緒に処分してしまったから、一切ないの。

ぼくの家の中は何にも出てこない。写真の一枚も。ぼくは写真を全部データにしてパソコンに入れていたから、なおさらね。DVDに移した後だったけど、逃げるときは貴重品も何も持っていかなかった。すぐ戻ると思っていたから。

ぼくは定年まで漁師。外洋船に乗り込んでいた。だいたい1年2〜3か月で帰って来てただけど、5〜6年、向こうにっぱなしってこともあった。津波の経験もないわけでもない。何十年も前だったけども北洋に行ってたころ。網を張るね、その網が、津波の日はみんなよじれて網みたいになったの。海の中は多分うずを巻いていたんだね。それ、よじれを取って元に戻すのは手間かかったけど、津波がそんなに危険だっていう意識はないよね、海の上では。

遠い土地に行ってて、何かしたとき、落ち込んだときは古里っての思うね。楽しいときはそうでもないんだけど。こういう目にあっただけから初めて古里の良さがわかるっていうか、思い出が欲しいっていうか。震災がなければそういうこと考えないね多分。記録するってのは確かに大事なんだね。何もかもなくなってしまうと、思い出はかけがえがないもの。

地元の人たちも自分の住まいが安定したときは、思い出がほしくなるでしょう。それを期待して、写真の募集をしているんです。あと何年かかるでしょうか。みんなが安心した生活に戻るのは、いつ頃か。それまで、写真募集の写真展を何回しなければならぬか。最終回は、本当に自分が好きな写真展をしたいですね。

## ボランティア活動をしていたから、救われたと思います

高野 剛（1940年生まれ） 高野 和子（1943年生まれ）

震災時 若林区荒浜在住

剛：荒浜には23年住みました。海が好きなんでね、1988年3月に海岸から800mほどの敷地に新築したんです。子どもの学校の関係で3月に建てて、23年後の3月に津波でやられた。約100坪の敷地に総坪数40坪のツーバイフォー、木造総2階建てです。私はそのとき47歳、妻は44歳、子どもは3人で長女が高校2年、長男が高校1年、次女が小学4年でした。次女は今回皆さんが避難した荒浜小学校に2年ほど通いました。

震災当時は子どもたちは独立し、妻と2人暮らしてました。地震が起きた日の午前中は私と妻は別行動で、2人の用事が終わった後、待ち合わせて帰ってきたんです。趣味でやっていたソーシャルダンスが2時からだったんで大至急食事をして、家を出たのは1時過ぎだったかな。

和子：夫はあんまり練習するのが好きじゃないの。行かなくてもいい練習日だったんです。でも、その日は「行こうね」ってわたしが強く言って、一緒に車で出かけました。太白区の東郡山コミュニティセンターです。家から南西の方向に7キロくらい。ダンスの靴とそのほか必要な物を持って。財布は必要なかったんで置いてこうかなと思ったんだけど「ま、いいや」とバッグにポンと入れたんです。その中に銀行のカードなんかも入ってて。ラッキーでしたね。

20人ぐらいで多目的ホールで練習してました。そしたらもの凄い揺れが来て。大きいけど終わるなと思ったら、またドーンと来て、またドーンと来て、動きが取れなくて。あそこ、建物が新しいんですよね。周りにいた人が机の下に入れて言うから、わたしも急いで入りました。夫はドアにしがみついていたみたいです。それからすぐ先生が「今日は練習をやめて帰りましょう」っておっしゃって。

剛：すごい地震でしたよね。幸いなことに落下物も何もなくて、みんな怪我ひとつせずですんだ。でもすぐには帰る気になれなかったんです、とにかく怖いからね。向かい側に郡山小学校があるんですが、そのプールの水がドーン、ドーンって津波みたいになってる。ただびっくりして「おう、すげえなあ」と見ていた。電柱だってガッガッガッガって揺れてるしね。20分ぐらい経過したんじゃないですかね。地震が2時45分頃でしたか。3時頃に、何とかしなくちゃいけない、家を見に行こうと本能的に思ったんです。地震がおさまってから、車に飛び乗って行ったんですけど、バイパスの鹿又交差点、広瀬川の向かい側にある大きな交差点ですが、もう全部信号機の信号が止まっていた。家へ帰ろうと思ってるから、そんなの構わないで橋を渡ったんですが、何となく辺りの様子がおかしいんですよ。これはちょっとヤバイんじゃないかと思って、よく行っていた七郷市民センターに向かうことにしました。

和子：最初は生協行ったの。そこでパンを配ってくれた。七郷市民センターはその後。六丁の目に生協があるんです。

剛：あ、そうだった。家へ帰るのはやめようってことで、六丁の目の生協の駐車場で車を止めて様子を見てたんですね。とにかく情報が欲しいわけですよ。車にラジオはあるんだけど、自分たちのいる所がどうなってるのか、全然つかめない。情報を得ようと思って生協の駐車場に入れたんです。でも生協はメチャメチャになっている。もちろん電気もない。しばらく様子を見ていましたが、その後、「仙台整形」という病院に行って、しばらくテレビを見ていました。

和子：停電だけど、病院の自家発電でテレビが見られたんです。ただ荒浜のニュースは流れてなかった。だから津波が来てることは知らなかったんです、そのときは。

剛：多賀城とか、ほかの海岸の情報は出ていたんです。津波の映像も出ていた。でも自分のところには来ないって思いたいわけです。結構人が集まっていました。救急車で怪我人が運ばれてきて。そこに1時間ぐらいいたのかなあ。

和子：わたしの知り合いの人がそこに入院してたんです。その日退院する予定だったのが1日延びて、翌日の退院になったんですって。それで命が助かったって言ってました。自宅、深沼の方なんです。その日、午前中に退院してたら多分駄目だったろうって。1日延びたために命が助かったって。

剛：私たちの住んでいる荒浜は状況が全くつかめなかったし、ラジオでも言っていない。テレビを見たからなおさら怖くなって、七郷市民センターの駐車場に行って、そこで様子を見ることにしたんです。もう泊まるどころもなく、夕方になっていました。

和子：その前に一度、指定避難所になってる七郷小学校へ行ってみたんです。そしたらいっぱい、足の踏み場もなく。若いお母さんが多くて、小さな石油ストーブ、どっかから昔のやつ持ってきたのね。若いお母さんたちが小さい子どもを連れてぐるっと囲んでるんですよ、体育館で。とてもわたしたち入れる余地がなくて。立っている人もいましたからね。しょうがない車で過ごすか、と。

剛：結局2晩車で過ごしました。エンジンをかけっぱなしでも夜はあまり暖房が利かなくて、寒さと狭さでほとんど寝られなかった。ラッキーだったのは、車のガソリンを満タンにしたこと。それと、妻が老人クラブの世話役をやってまして、翌日に使うためにお茶を買ってたんです。

和子：お茶を買う当番だったものでね。土曜日に「いきいきサロン」っていうのを開いてまし

て、前日、500ミリリットルのペットボトルのお茶30本ほど買って、車に乗せたままにしておいたんです。それがすごく助かりました。水なかったですから。当日は小学校で並んで菓子パンいただいたの。次の日だけ？

剛：ああ、七郷小学校で並んだのは12日だね。当日は並ぶ気力はなかった。車は寒くてエンジンはかけっぱなし。私は後ろからブルーシート取り出して、かぶって震えてました。それに夜の余震。車がひっくり返るんじゃないかと思うぐらい大きな余震がくるんです。夜中の地震というのは恐ろしいです。ローリングっていうか、ガッガッガッガッと。寝るに寝られませんでした。その夜に荒浜のニュースが流れて、200人から300人の遺体が浮いてるっていうんです。住所も我々が住んでるところなんです。ああ、これは全滅だなんて思ったんです。あれ、正確な情報ではなかったんですがね。

和子：でも200人くらいは亡くなってますよね。うちの町内でも80人弱が亡くなってます。新町で。11日の晩と12日は車に泊まったんですけど、寝られないんですね。余震でしょ。それから自衛隊のヘリコプター、朝となく夜となくゴーツとすごい音で、ちょうど真上を飛んで来ます。七郷市民センターから北西の空が真っ赤になってました。あるとき確かどこか燃えてたんですよ。それと寒さ。手足を伸ばせないのもきつかった。

剛：30台ぐらい他の車も止まっていたね。ただ中に泊まってる人はそんなにいなかったです。七郷市民センターも避難者を入れていましたが、我々が入る余地はなかった。センターにいる人たちが出てきても全然声をかけてくれないんで、妻が「あの人たち、家あるんじゃないの」とか言うから「いやあ、そう言うな。水が引いたら家に荷物取りに行くから」なんて言っていました。津波が来るはずないと思っていて、水が引いたら家に行こうと、それしか考えていませんでした。

そして13日の朝になって、七郷市民センターに泊まっていた顔見知りの荒浜の人に会いました。その人が「いやあ何にもないよ、さっぱりしてるよ」って、こともなげに言うんです。こんなあつけらかんと言えものかなあって思うぐらい。あれはショックでした。

和子：その人は荒浜小学校から、津波が来るところを実際に見てるんですよ。現場を見た人から聞いたもんですから、もう確実な話だったんですよ。でもわたし達は信じられなかった。わたしは町内の福祉委員をやっていたので、自宅にいたら、本来ならあちこちお年寄りの安否確認をしないとイケない立場だったんですね。だけど、いたらどうだったかなと思って。民生委員の人が自転車で駆け回ってやってはくれたらしいんですけども、その人も荒浜小学校の校庭で誰か来るのを待っていたんですって。そしたら屋上で小学生たちが「津波が来たー！」って大声で

叫んだんで、慌てて3階だか最上階に上がって助かったと言っていました。校長先生の判断で子どもを屋上に誘導してたんですね。

剛：私の子どもたちは、長女は埼玉県、長男と次女は東京におりましたから、朝から晩までテレビを見てるわけです。200人も亡くなったということを何回も何回もニュースで流すし、これはもう全滅したと思っていたようです。電話もつながりませんでしたしね。

和子：一番下の娘が連絡役で、ちょっとの間間で携帯がつながったんです。それで助かったことがわかったみたいです。2、3日後でした。

剛：13日の朝に荒浜が全滅したのがわかりました。その頃に自衛隊のヘリコプターが真上に来て「津波が来ます」と何回も放送したんです。私はそんなことはないと思っていました。学校では土木工学を下手に勉強してるし、ましてや2、3日たってるのに津波が来るはずはないと思いました。それでもとにかく逃げようと思い、若林区中央市民センターに来たんです。「まなびごっこ」というボランティアを何年かやっています、この市民センターはよく知っていました。ここに来てセンター長はじめみなさん方知り合いなので、気がすごく楽になりました。

ただ文化センターは避難所の指定にはなっていなかったんですね。「何とかお願いします」と言ったら、子どもを持ったお母さんが「少しスペースありますよ」と言ってくれたんです。ほんとに少しありました。和室の上がり框の、人が始終通るところですけど、やっと足を伸ばして寝られました。13日の晩から21日までここで世話になりました。

でも避難所では熟睡できなかったですね、寒くって。毛布が2枚来たので、1枚を敷いて1枚を掛ける。それでもとても寒かった。おまけに狭いところに多くの人がいきましたから、1人あたり1畳ぐらいでしたね。夜中に余震があるたびにワアーツと大声を出して騒ぐ人もいました。日が経つにつれて人がだんだん引き上げていきます。小さい赤ちゃんを連れた夫婦がいたんですが、赤ちゃんは泣くじゃないですか。私は全然かまわないけど、嫌がった人もいて気の毒でした。そういう人に優しくしていたら、引き上げて行くときに一番いい押し入れのそばの場所、ここにいらっしゃいと言ってくれました。

22日の晩「ここはもう閉鎖だから南小泉小学校の体育館に移りなさい」と言われて移りました。体育館だからバスケのポールがある、その真下なんですよ。まだ余震がすごいですから、鉄のポールがガガガンって落っこちてくる気がするんです。トイレの近くだったから臭いし。後から行ったから、そういう場所しかなかったんですが、ちょっと大変でした。

若林区中央市民センターも南小泉小学校も、家族が流されて亡くなったという人はあまりいませんでした。七郷小学校・中学校、七郷市民センターは多かったようですが……。その点は比較的好かったかもしれません。長くなると、避難所の中でも排他的な雰囲気になるんですよね。や

っぱグループのようなものができてくるんですね。

神戸市役所からの派遣職員と仙台市職員が主導して、毎晩食事の後にミーティングです。私も参加しましたが、皆さん情報提供ということで一生懸命融和に努めてくれました。別の避難所の若林体育館では段ボールで仕切を作って、ドアなんかも付けて「どうぞ、いらっしゃい」といった感じでした。私も同じ町内の人がいたものですから、2、3度訪問したことがあります。低い段ボールなんだけど落ち着くようでした。避難所ではラジオ体操もするようになりました。神戸震災の経験者がいるから、避難している方の精神状態がわかるわけですね。

食べ物は毎朝自衛隊が大型トラックで運んできてくれました。それにありがたかったのは町内会の人たちが裏で炊き出ししてくれたことです。そんな南小泉小学校の避難生活もやっぱりきついですよ。東京にいる息子が「親父、早く住むところ見つけた方がいいよ。今に必ずみんな殺到するから」と言ってきていました。

和子：その頃はみなし仮設って考え方がなかったんですが、子どもたちがアパートのお金を3人で分担して出してあげるから早く探せって言うんで、家賃の心配なく探すことができました。その後みなし仮設の扱いになって。そのとき探したのが今のマンションです。

剛：区役所から近いマンションの8階で2LDKなんだけど、当時はガスも水道も電気もなかった。ガスがないと寒くてどうしようもないし、電気がないと何もできない。3月の25日には入れるような契約をしたんですが、家財道具が何もないんですよ。泊まるといっても布団もない。子どもが埼玉から送ってきたガスボンベでお湯を沸かしたりしてました。

電気がついて初めてガスが来る。電気、ガスが来たのが4月7日の夕方ぐらい。震災後ようやく暖かいご飯を食べて風呂に入ったんです。そしたら突然グラグラッと。あれはすごかったな。立ち上がれないんだもの。8階なんです。ガッガッガッガッって。うちの妻、マンションを引き上げようって言うんです。初めて泊まった日なのに、恐ろしくて。ベランダに出てみたら、早い人はリュック背負って逃げる準備をしていました。私も駄目かと思いました。ようやく通じたライフラインがまた駄目になったかと……。

荒浜の家を見に行ったのは3月25日。震災から2週間後です。私は、ダンスの練習なので一番悪いズボンとコートで、ひどい靴をはいていました。妻はスカートはいていけないでよかったですけどね。ダンスをすると冬でも汗をかくんです。だから軽い恰好をしていたんですが、それがアダになっちゃったんです。

それで、宮城野萩通りにある作業服屋という小さい店に行っただけです。「実は津波にやられて」と言ったら店の人が「いやあ、うちもやられた」と言うんです。家族でそこで店をやっている人たちだったんですね。それで「25日にお客さんに物を届けることになってる。ついでに私の家も見てください」と思っています。一緒に乗っけてあげるから見に行きましょう」と言ってもらいました。

こっちはガソリンがないものですから「じゃあお願いします」ってお言葉に甘えて乗せて行ってもらいました。

途中ずうっと南下して蒲生なども見て行ったんですが、涙が出そうなくらい惨憺たるものでした。うちの辺りだけ何とか残ってるなんて、全く考えられなくなりました。私の家の跡は全く何もない。瓦礫もないんです。あのときの気持ちは何と言ったらいいのですかねえ。荒涼とした、凄まじい光景でした。家は、私よりも妻が好きだったんです。ここはああした方がいい、こうした方がいいって、建築屋さんに注文を付けていました。そうやって作ったものだから、なおさら……。

和子：その前に航空写真を送ってくれた友達がいたんで、うちは掘り炬燵式の床暖房で、わたしが設計したんですけど、床に座って足を伸ばせるようになってるんです。その窪みに水が溜まっているから、航空写真でも、このあたりが自分の家だってわかるんです。実際見てみたら、上の建物が全部なくなってコンクリートだけ残ってました。ものすごい勢いで水が流れたんでしょうね。何メートルぐらいかな、防潮林の杉の大木が根っこごと洗われてドーンとのっかってました、そのまま床暖房のところに。

剛：すごかったですよ、跡が。土が露出してるところ。ものすごい潮の流れだったんでしょう。瓦礫がこすった筋が土の上に付いていました。うちだけじゃなく、近所全部そう。いやあこんなのじゃ、私有家にいたらとても助からなかったと思いましたね。

奇跡というか何というか、私、松本清張が好きで本をたくさん持っていたんですよ。それが1冊だけ、その杉の木の下に残ってたんです。あとは何もない。これです、ちょっと臭いですけどね。これ1冊だけ残っていた。何日か天日に干したんですが、まだ泥臭いです。途中まで読んだんですが、やめました。読み通せませんでした。我々の所は、防潮林が薄かったんです。もう少し南に行くと介護施設なんかがあって防潮林も厚かったんで、家は多少残っていました。

私の家は浄土寺のお墓のそばだったんです。道路をはさんで南西の角地でした。そのお墓もメッチャクチャ。えぐり取られてお骨も流されたんでしょうね、墓もどこに行ったかわかりません。悲惨ですよ。墓石も随分流れてました。引き潮で流れたのかな。惨憺たるものでした。でも考えようで、命は助かったんですから。

近所で亡くなった人もいました。向かい側の親父さんね。胃癌で助かった人なんです、年はまだ60代でした。几帳面な人で、地震のあと片付けをしてたらしいんです。

和子：わたしの親しい人は3人が家族もろとも亡くなりました。厚着したままで。友達の奥さんと娘さん、前の日に夫がこの図書館で会って、挨拶したんだそうです。金曜日に図書館に来ていれば助かったのに……。

剛：貞山堀からも水が上がってきたんでしょうね。いったん貞山堀の水が引いて、それから一気に上がってきたそうです。お寺より内陸部に南長沼という所がありますが、そこに大分遺体があったそうです。採石をしていたんで凹みがあったんです。遺体はその凹みに入ったので、引き潮でも持っていかれなかったんですね。お寺のでっかい屋根だけ1.5キロぐらい離れた田んぼの中に残っていました。内陸まで引っ張られたんです。お寺の坊さんも助かりました。流されたもので残念だったのは、写真ですね。少しは見つかりましたけど。どっかに流れ着いて展示してくれていたのを、私が見つけてきました。2階に置いていたのはいくらか助かったんですが、1階にアルバムを作って並べておいたのは全部駄目でした。子どもが幼いころの声を録音したテープなんかも全部なくなってしまいました。

今後の話ということでは、4月13日からサンピアで、3回ぐらい市の説明会がありました。たくさん人が集まったんですが、すさまじかったですね。私の方は目途が付いて何とかかなりそうだからいいんですが、そうじゃない人もいて大変でした。自然災害だから行政の責任じゃない部分だってあるのに、よく市の幹部達は耐えられるなと思うぐらいでした。だんだん落ち着いてきましたけど。

復興まちづくり部の移転個別相談というのがありまして、私たちは荒井西地区の70坪、建坪30坪でお願いしています。50年ぐらい借地することにしました。去年の末から造成を始めてますから、家を建てて入るまでには早くて3年かな。生活再建もだんだん進めていきたいです。

最後に忘れられないことといえば、ボランティアをやっていた拠点の場所で避難生活を送れたことですね。精神的に助かりました。やっぱり誰でも絶望的になりますものね。ものすごく助けてもらいました。市民センターのセンター長はじめ、図書館、文化センター、市民センター、社会福祉協議会。そこでの職員のみなさん、すごかったですよ。電気もないところで厚着して、徹夜で。申し訳なくて見ていられなくなって、私もボランティアをやります、なんて言いました。そのときは和室は30畳、展示ホール、営業をやめていたレストランも空けてもらいました。

和子：わたしも夫もそうですけど、ボランティア活動をやったことで、精神的物質的に随分みなさんが助けてくださったんです。人の気持ちのありがたさ、感じましたねえ。ボランティアをしてなかったら、孤独だったんじゃないでしょうか。仮設へ入るときも10世帯まとまって申し込むって最初のころ市の方針だったんですよね。でも10世帯集めるの、結構苦労したらしいんですよ。あの人とは嫌だとか、ご近所付き合いの、いろいろありましたでしょ。みなし仮設に入った後も。

みなし仮設は孤独ですからね、プレハブ仮設と違って情報ないですから。今まで社会的にあまり外に出ていないと、家にこもりやすい状態になります。一戸建てよりマンションに住んだ方々が多いんですよ。マンションってほんとに交流ないですもの。何もやってなかったら1日箱の

中でテレビを見て過ごす、っていうふうになりやすいんじゃないかと思いましたねえ。

剛：みなさんには本当にお世話になりました。ボランティアの仲間にも助けてもらったし、遠い親戚からも、学校時代の部活の友達からも。高校時代の友達なんてあんまり親しくしてなかったのに、発起人がいましてね、結構な金額の義捐金を集めて持ってきてくれたんですよ。外から来た人に「どうしてそんなに元気なんですか」って言われるけど、逆ですね。助けってもらってるから逆に元気が出るんです。

和子：今ごろになると、わたしたちが震災に遭ってるってこと、周りの友達がすっかり忘れてるんですよ。何気なく話題になって、わたしが「流されて、もうないわ」って答えると「あ、ごめんなさい」なんて。忘れちゃうのね。こっちも忘れることがありますから。お互い健康でやっていますから。

## 人間として大事なものを呼び起こされたような気がします

大友 京子 (1953 年生まれ)

震災時 若林区藤塚在住

うちは海のすぐそばだったんです。五柱神社の近くで、海からは距離にして1キロあるかないか、貞山堀のすぐとなりでした。でも、あのころは松林があって、我が家からは海が全く見えなかったんです。4階5階の建物なら良く見えるのにねえと思ってました。

藤塚は、昔は名取郡だったんです。その後仙台市に合併したんですね。うちの曾祖父にあたる人は、当時の「藤塚村」の役人になるようにとの任命で、ここに住むようになったんです。うちにあった書類をみて初めてわかりました。なかなかえらい人だったんですね。

これは家系図を作らなければと思っていたんですが、その書類も全部なくなってしまいました。もう少し早く作っていたらと悔やまれます。義母も名取の町長だか町会議員だかの家からきた人でした。私は藤塚に嫁に来て30年になりますが、相続のことで書類をとったら、これまで知らなかった家のことが分かること分かること……。ホントに早く家系図を作っておけばよかったですね。

地震のときは、義父といっしょに自宅にいました。あの揺れは尋常じゃなかったもので、これは何か来ると思いました。あんな津波のイメージがあったわけではないけど、とにかく大変なことが起こると思いました。私はすぐに2階から降りて、「じいちゃん行くよー、地震、雷、火事、おやじ。地震が一番おっかないんだからー」と言って、義父を車に乗せました。義父は足が弱かったんですが、何とか自分で歩いてくれました。とてもおんぶなどは出来なかったと思います。

東六郷小学校には、3時10分頃に着きましたが、まだみんな校庭にいました。車の中にいた人も多かったと思います。私は車のラジオで津波がくることは聞いてたので、ここが危なければすぐに六郷の方に行こうと思っていました。10分くらいそうしていると、3時40分には大津波がくるというラジオの放送がありました。これは大変だと思い、「じいちゃん、早く行くよ」と言って、すぐに校舎へと向かいました。足の弱い義父を歩かせてようやく校舎の廊下に入った時、津波が校舎の玄関から押し寄せてきました。50センチくらいの波でしたが、その引き波が90歳の義父の足をさらいました。そのままどぼんと校舎内の中庭にガラス戸ごと落ちたんです。近くにいた人たちがすぐに引きあげましたが、もうだめでした。心臓が悪かったから、即死だったんじゃないかと思います。手を離れた直後だったんです。義父は何とか歩けたので、私は先に中2階のところまで行って、別の車いすの人の手助けをしていました。だから津波は見えないんです。

その時、義父と一緒に4人の方が落ちて、義父ともう1人、71歳の足が不自由な方が亡くなりました。別の場所でも同じようなことがあったようで、私が親しかった仲間は10日後くらいに見つかりました。学校のホールのような場所の下のほうに埋まっていたそうです。色んな物が流れてきて床がいっぱいになっていたんです。逃げたはずなのに何で姿が見えないんだろうと探していたんですがね。あの時、東六郷小学校にどれくらいの人があったかわかりません。

亡くなった義父は家庭科室か理科室かに運ばれました。良く覚えていないのですが、わりと早

く警察の方が亡くなった方の遺体を引き取りにきたように記憶しています。「利府のグランディに運びます」って言われました。義父はあそこで流された第1号だったかもしれません。満90歳、亡くなった年齢はかぞえて92歳。100歳まで生きたいって言ってたんですけどね。もっと早く校舎に入れてればよかったんじゃないかと、思い出すとそこは悔しいです。

校舎のトイレに押し流されたところを見つけれられた方もいました。首から下、身体中ずぶ濡れでした。すぐに新聞紙やらビニールやらでくるんで暖めて、皆でマッサージをして一命をとりとめました。老人会のゲートボールなどをやっていた方で、運動していた人は違うなあと感心してしまいました。背の大きい人だったから助かったのかもしれませんが。今も仮設で元気に暮しています。義父と一緒に落ちた2人の女の人も助かって、今も時々お会いします。

東六郷小学校は新しい学校だったから良かったんですね。あれが古い校舎だったらどうなっていたか分かりません。その日は、2階の教室に地区ごとに別れてひと晩を過ごしました。向いのコミュニティセンターに備えてあったビスケットや水を、消防団の人たちがとって来て配ってくれました。先生方がアルファ米のおにぎりを作ってくくださったのも覚えています。おかげさまでどうにかこうにか過ごしました。

次の日、自衛隊の方々が来て私たちを避難所に運んでくれました。私たち藤塚と二木の人たちは六郷中学校の近くの農協に入り、種次、井土浜、三本塚は六郷中学校でした。

農協の避難所では、地区の方と民生委員で班ごとに休む場所を決めたり、ある程度の段取りをつけました。夜には、地震の時に çıkけていた町内会長も駆けつけてくれたので、私は持病もありましたので農協からすぐに遠見塚の実家に行きました。

家族は主人と娘の3人、遠見塚にある私の実家で落ち合うように連絡がつきました。遠見塚の実家には母が1人で暮らしています。すぐそばにある妹の家が無事だったので、みんなでそこに身を寄せました。2週間くらい妹の家にて、すぐに近くにアパートが見つかったので、私と主人はそのアパートに移りました。

アパートに移ってからも、農協の避難所へは3月いっぱい手伝いに行っていました。食事の段取りやら何やら指示する人があまりいなかったのが、私が勝手に動いてました。あまり前へ出る方ではないのですが、女だからあまり出しゃばらない方がいいかなって思いもありましたけど、そんなこと言ってもらえませんでした。その間、京都、神戸、福岡、新潟などからのたくさんのボランティアの方々とお会いしました。もちろん仙台市内からも多くの方が来てくれました。困っている人に力を貸してくれる方々が何と多くいる事かと感動しました。

その後、藤塚地区は、畳の部屋を使わせていただけるとのことで六郷市民センターに移りました。100人くらいだったと思いますが、6月末まで市民センターにお世話になりました。私はその頃には、時々しか行けませんでした。町内会長さんはずっといらっしゃいましたね。ご自分にはアパートも借りていましたが、揉め事などがおきないようにと、避難している方々の見守りを

続けてくれて、奥さまも一緒にいてくださったようです。頭が下がります。

避難所とのかかわりを通して、無駄をしない、我慢する、助け合うということを再認識したような気がします。生きていくための知恵、大事な心をたくさん感じました。

うちの義母はもう13年も岩沼の南浜病院にお世話になっていたんですが、あそこも津波で大変な被害だったんです。義母は体育館に運ばれて、その後長町病院に入れていただいたんですが、それから間もなく亡くなりました。4月11日、ちょうど1か月後で、あたり日が11日で義父と同じなんです。

私は、義父と義母の葬式ができないことが、どうしても気になっていました。そんな時、長町の葬祭場のベルコが改修を終えたので一番にできますと言われましてね。町内葬は、6月の半ばになるとのことだったので、それを待たずに5月13日にベルコで葬式をしました。立派な会場に参列者は少なかったんですけど、種次から和尚さんも来てくれまして、もう感無量でした。義父と義母の2人分の供養でしたからね。私もそれで少し安心しました。

私は、借りたアパートには1年半いました。去年の10月に、ちょうど若林に新築物件が見つかったのでそこに入りました。おかげさまで、土地の買い取り第1号だったそうです。それからはもうまっしぐらです。引越しやら、いろんな書類を届けることやら。その時は主人も車でぱっぱと動いてくれて、早く済ませることができました。私が運転していた車は流されましたが、うちの人のトラックと娘の軽乗用車がどちらも使えましたし、6月には自分の車も中古で安く買って、動きもとれるようになりました。流された私の車は、盗まれて茨城まで行ってたんです。去年、盗んだ人がつかまったので、わざわざ茨城県警の人が書類の手続きに来ました。そんなこともありましたけど、いろんな援助、支援金や義援金もあって本当に助かりました。

藤塚は90世帯くらいありましたが、部落は全滅しました。でも、亡くなった方は27人だったと思います。「逃げろー」って消防団が言って回ったし、ちょうど3月完成予定の堤防工事をしていた、その工事現場にいた人たちも大きな声を出してくれたんですね。若い方は働いていて家にいない時間帯でしたから、亡くなったのはほとんどお年寄りですね。沖野の人などは、2階3階に上がったよという人がいましたが、藤塚の場合はたとえ2階に上がってもだめでしたね。

主人は仕事から一旦自宅に戻って、家のそばにいたんです。船があがってくるのが見えたっていうんですね。波が見えてこれは津波だ、こうしちゃいられないと慌てて逃げたんですって。トラックに飛び乗って、遠見塚の私の実家まで逃げて来ました。どれくらいスピードを出したんでしょうかね。もうちょっと気づくのが遅れてたら、そのまんま流されていたと思います。

あの地震の少し前にゲートボールの練習があって、その時に「ここには4階以上の避難場所がないとだめですよ」なんて市議員さんと話したこともありました。避難場所を作る前に本当

に大津波がきてしまいました。4階～5階の立派なのがあれば助かったんでしょうかねえ。

震災後、自宅があった場所にはわりと早くから行っていました。我が家は、少し前にしっかりした塀を作っていたので、その塀と家の基礎、それに通路のアスファルトや駐車場のコンクリートは残っていました。でも、建物はすっぽり流されました。

クリの木やツゲの木など、大きな木もたくさんあったんです。クルミの木や、ナシ、リンゴ、カキなど食べるのを楽しみにしていた果樹もありました。義母がよく採っていたのを思い出します。本当に何もかも持っていかれたって感じです。

自宅にはほとんど何も残っていませんでしたが、最初に見に行った人がアルバムを1冊見つけてくれました。おかげさまで、そのアルバムの中の写真が義父と義母の遺影に使えました。孫たちを抱っこした写真なんですけどね。その後も、ボランティアの方々がきれいにしてくれた写真が随分手元に戻りました。本当に感謝です。

すべて流されてしまったので、家そのものの片付けはありませんでした。何だか全部波に片付けてもらったようにも思います。流されたものは何処に行っちゃったんでしょうね。

我が家は屋号が中宿といって、昔は宿屋もしていたんです。昔からの地主で、主人は兼業だけど義父は農業を続けていました。田んぼも畑もあって、この辺りは本当に豊かなところでした。閑上大橋が出来る前は、船で行き来していたそうです。義母は船に揺られて嫁に来て、何だか寂しかったんだと言っていましたね。私は結婚当時、近くの東四郎丸小学校に勤めていたんですが、その時には、もう橋がありましたから、昔からこうだったのかと思っていました。その前は渡し船だったんですってね。それで宿屋もやってたのかもしれない。何しろ海拔0メートルのところに建てた家でしたからねえ。

私もいずれペンションか釣り宿でもやろうかと思っていたぐらいです。本当に豊かな自然があって、私もしょっちゅう散歩しては辺りの景色を眺めていました。まさかこんなになるとは……。

今、主人は敷地の一部に畑を作っています。私もトレーラーハウスでも買ってそこにおけば休む場所になっていいかな、なんてことも考えています。喫茶店のようなものでもできればね。近くの五柱神社は建て直すことになったので、神社に来た人に寄ってもらえるかな、なんて考えています。まあ、お金がたまったらね。

この五柱神社は伊達政宗が狩りに来たときにも使ったという話です。そんな豊かだったこの地区はどうなるんでしょうかね。今はバスも来なくなりました。バスをみると、前は藤塚まで行き先があったなと思いますよ。今は、種次、中野で終わりです。公園にでもなるんでしょうかねえ。

私は震災前から地域のサロンに参加していました。今でも「絆サロン」と「生き生きサロン」

というのをやっています。絆サロンは東六郷全体、生き生きサロンは藤塚だけの集まりで、どちらも日辺の仮設住宅集会所で月1回ずつ開いています。絆サロンは50人近くいて、一緒に歌や芸などをやってもらっています。生き生きサロンは12～3人で、気心の知れた町内の人ばかりです。平日の第4木曜日でお年寄りばかりですが、和やかな集まりです。いろんな支援の方も来てくれます。退職女子教職員でつくる白萩会の合唱グループが来てくれたこともありました。おかげさまで私のまわりに、いろんな仲間が来てくれています。

今思うことは、何とか慰霊の碑を建ててほしいということです。ひとつの部落がまったくなくなってしまったんですものね。荒浜には亡くなった方の名前が全部彫ってある慰霊塔があると聞いていますから、何とか東六郷にも亡くなった皆の名前を残せるような慰霊の碑がほしいですね。石巻の大川小学校は立派なモニュメントが出来ていました。女川の中学生さんも震災のメモリアルに取り組んでいるようですね。私たちも何かしなきゃという思いがあって、町内会長なども話していますが、なかなかそこまではいきません。

それでも五柱神社が建てられれば、何かできるかもしれませんね。

我が家のお墓もまだまだです。種次のお寺さんの近くを墓地にすることは決まっていますが、津波で荒れてしまった藤塚のお墓からお骨を集めることが第一です。たくさんの方が亡くなって土にかえっているんですよ。

実は、種次のお寺の和尚さんが震災後亡くなられたんです。この和尚さんには本当にお世話になりました。震災の年の12月、みなさんの供養など終わって、やっと落ち着いた時だったらしいんですけどね。49歳で、脳溢血だったそうです。今は、岩沼からご親類のお坊さんがいらして助けてくれています。そのご親類の方も津波に追われながら大変な思いで逃げたんだそうです。助かったのはやっぱりその人の運命なんでしょうね。こちらまで助けてもらって……、そんな風にできているんでしょうかね。

大震災はとてつとていやな事でしたが、その後の人と人との絆や助け合いが、人間として一番大事な心呼び起こしたような気がしています。

## 亡くなった方々の無念の思いを感じながら暮らしています

菊地 裕子 (1964 年生まれ)

震災時 若林区井土在住

地震が来たのは、その日、ちょうど家に帰ったときです。高校生になる娘が学校が休みで、アウトレットに洋服買いに行きたいと言われて、帰ってきたのが10分ぐらい前でした。じいちゃんとはあちゃんも家にいて、じいちゃんは種蒔きの準備をしながら裏の田んぼの堀払い、ばあちゃんは家の中で片付け物をしてました。わたしは娘と、買ってきたお洋服をひろげてみたりしてたんですが、いきなり「ドン！」と来て、家が揺れ出したんです。それがあの地震でした。

今までにないような、すごい揺れだったもので、とっさに娘の背中を押して畑の真ん中に逃げたんです。家の前が畑です。家はぐらぐらぐらぐら揺れて、屋根の瓦がバシャンバシャン落ちてきました。立ってられなくて「早く止まれ、早く止まれ」って祈ってたんですが、なかなか収まらなくて。家も、崩れるんじゃないかと思うぐらいたわんでる。怖くて怖くて、娘と抱き合っただけ震えていました。

長い地震でしたよね。やっと終わったとき、前の家のおばあさんが外に出てきて「怖かったねえ」なんて興奮した口調で話しかけてきたり。「余震あるかもしれないから気を付けてね」なんて言いながら、「あ、小学校の娘は大丈夫かな」って思ったんです。地震をすごく怖がる子でしたので、じいちゃんとはあちゃんに断って、車で迎えに行きました。高校生の娘も「わたしも行く」というので、一緒に車で2～3分の東六郷小学校まで行きました。

子どもは2人です、高校生の娘と、小学校4年生の娘です。

小学校まで行ったら校庭の真ん中に先生方と子ども達が固まっていた。親の中では、多分わたしが一番最初だったと思います。地震から10分ぐらいだったでしょうか。娘はみんなと並んでまして、泣いたり、おろおろしたりしている子もいました。先生方には6mの津波が来るという情報は入っていたようで、わたしはそのとき初めて津波が来るってことを知りました。「2階には上がらないんですか」って聞いたら「揺れが強くて校舎の中は危険なんです」とおっしゃって、校庭の真ん中にいました。

わたしは娘を引き取って家に帰るつもりだったんですが、とてもそんな雰囲気ではなかったんです。それでも娘の顔を見たり、知り合いの方と喋ったりしているうちに、なんかほっとしたんでしょうねえ。車を取り敢えず校庭に入れて、そのまま子ども達と一緒にそこにいました。

東六郷小学校は避難所になってましたので、そのうちにどんどん地域の方が集まってきました。そのときに「じいちゃんとはあちゃん、津波来るのわかんないかもしれない」と思ったんですね。津波が来るのを知らないで家にいたんでは大変だと思って、下の子に「じいちゃんとはあちゃん迎えに行くから、あんたはみんなとここにいてね」って声かけて、高校生の子はそのまま乗せて、すぐに戻りました。そのときには地震から30分ぐらい経っていたかと思います。

戻ったら、じいちゃんとはあちゃんは、地域の方が「津波が来るんで逃げてください」って1軒1軒知らせたからわかっていたんですね。貴重品とか位牌とかを軽トラックに乗せて、どうしようかと思ってたときだったみたいです。「トモナは学校に置いてきたから、みんなととにかく学校に行こう」って言ったんですが、なんか頭の中に、1年前にチリ地震津波があったときの

ことを思い出したんです。あのときも避難したんですが、寒かったから毛布とかも必要かなあ、飲み物も必要かなあ、なんて色々思ってしまった。

それで必要だと思う物を、車の中に運んだりしてたんです。そのときじいちゃんが、「あ、津波来たぞお！」って大声で叫んだんです。家からだと他の家があって見えないんですけども、ちょっと出ると松林が見えるんです。で、わたしも出てみたら、松林の、ホントに松林の少しだけ下になるくらいの高さの、真っ黒いのがワァッとゆっくり来てるのが見えたんですね。波って普通先が白波がかってるんですが、真っ黒い塊がゴォーッと来る感じ。

「ああ、もう駄目だ」と思って。「じゃあ2階に、2階に」って、娘は家の中で自分の大切な物探してたり、ばあちゃんは仏壇の前で片付け物してたりしたんですが、説明するも何もなくて「とにかく2階に上がって、2階に！」って、自分たちも2階にやっと上がりました。家のまわりには高いところがないので、じいちゃんをよく冒険広場に逃げれば少し高いから大丈夫だ、って言ってたんですけど、冒険広場はうちよりも海側ですから、まさか津波に向かって行くわけにいかない。真っ黒な津波が押し寄せてくる、と思ったとき、2階しかなかったんです。

2階はちょうどリフォーム中でカーテンも何もありませんでした。そして窓から、津波が来るのが見えるんです。津波が押し寄せてくるのを目の前に見ながら待ってるような状態でした。すごく大きかったです、高いし。2階に上がって津波を見たとき、目の高さでしたから。真っ黒い塊が、生き物みたいな感じでワァーッと来るんです。音も静かに。鳥とか何とか、音がするものがまるでない。自分の記憶の中の音だけがなくなって、そのワァーッと襲ってくるのだけが見えて。そしてその黒い塊が触れたものが、あっという間にその中に吞まれてしまう。並んでいた屋根がどんどんなくなって、回りの景色が変わっていくんです。ああホントに日本沈没なんだな、もう終わったなって思いました。

自分もあの黒い塊の中に入って死ぬんだろうなって思ったんですけど、でも娘が隣にいたんですね、17歳の娘が。娘がすごく可哀相になってしまっ。なんで17歳で命落とさなきゃいけないだろうって。娘に「ごめんね」とか「生まれてきてくれてありがとう」とか夢中で言いました。それぐらいの時間はあったんです。

ばあちゃんは何もない押入の中に入って「なんまんだぶ、なんまんだぶ」って拜んでる。じいちゃんは屋根に登ってワァァ騒いでる。わたしはそのとき、この子だけは助けなきゃいけないと思って「あんたはスイミング習ってるから、泳げるから、お母さんとばあちゃんは多分無理だろうから、何か大きなものにつかまるかなんかして絶対助かりなさいよ」って言ってました。

津波に吞まれて壊されたものが流れてくるのが、もうこのベランダから目の当たりに見えるんです。近所のお宅の屋根が崩れて、うちの前をバァーッと流れていく。もう目の前の家は殆ど壊れて、たくさん並んでいた家のどこが残ってるのか、ぽつんぽつんとか見えなくなって。波がすごく速くて、もう濁流の中でした。庭にあったわたしの車もじいちゃんの車もどんどん流されて。「たすけてえ」って声が聞こえたんですけど、どこから聞こえてるのかわからない。誰も点

けるはずなのに、方向指示器を点けて流されていく車もありました。

じいちゃんは屋根に登ったので、走ってる車が津波に呑み込まれるの見えたりして「車よりも津波の方速えんだなあ」なんて言ってました。バシャバシャバシャって何かが動いてる。人じゃないのかなと思ったけれど、遠くなので助けることもできなくて。とにかく「頑張れー、頑張れー」って叫ぶだけでした。

外を見ているうちに、近所に住む消防に勤めてらっしゃる大友さんって方が、屋根の上に上がってるのに気付いたんです。その人が屋根の上に上がってたんで「あ、屋根！」って思いました。屋根というのは助かるのかもしれない。「流れてきた屋根に飛び乗ろう」と思って、ベランダから身を乗り出して、この家が倒れたら同時に脱出しようと、娘の首根っこをつかんで、津波が押し寄せて来るのを待ってるような感じでした。

そういう状況でいたときに、主人からの携帯がつながったんです。主人は「だいじょうぶ？」なんて、ちょっと軽い感じで言うんです。「津波来てっから、わたし達多分駄目だから。下の子1人だけ小学校に置いてきちゃったから迎えに行ってえ」って怒鳴りました。主人は塩釜の方にはいたので、「塩釜も気を付けてねー」って言って。電源もなくなりかけていたんです。「最後のときのために電源取っとくね」って娘に変わって、娘にも話させて。最後に父親の声を聞かせたかったから。

でも生きなくっちゃと思いました。なんとかしなくっちゃいけないんだけど、なす術もない。横なぐりの雪も降ってくるし、余震も何回もありますし。

気付いたときには庭先がダァーッと濁流になって、色んな物が浮いてました。波の勢いがなくなったんです。ああ、もしかしたらこれは助かったかもしれない、って思いました。津波が色んな物に当たって広がったので、水の勢いが分散して、うちが助かったような気がします。

少し波が収まったら、急に寒くなりました。それでじいちゃんが「何か探してくる」って言って、階段を降りて使えそうなものを探しに行きました。リフォーム中だったので、荷物は全部1階に降ろして2階には何もないんです。家の中はメチャメチャで、1階は津波の水がまだ1mぐらいはありました。大きな家具も壊れたり倒れたりして、家の中をチャポチャポ色んな物が流れている。使えるものを見つけるのが難しいような状態だったんですけど、冷蔵庫が傾いてた中から拾ってきたのが、ソーセージとブルーベリージャムと牛乳と乾パン。あとラジオが上に置いてあったので流されずに済んだ。ベッドは浮いたので助かった布団もあって、それを夜のために持ってきてくれた。

それともう1つ、なぜか風呂敷を持ってきたんですね。見たことある風呂敷だなあと思ったら、わたしが子どもを産むとき使ったものを入れておいてたやつ。戌の日に巻く、塩釜神社の印が押されてる腹帯や、お腰が入ってました。

階段の5段ぐらいまではずっと水が引かなかったんです。水面が沈んだり浮いたりっていうのを繰り返していたので。じいちゃんは合羽を着てジャブジャブ入って行って、とにかく何でもい

いから使える物を手当たり次第に探してました。全部真っ黒い水で、水の上にプカプカ浮いてるから、下に何があるかなんてわからないんです。探してる間にも、ザブザブザブッと波が盛り上がってくるんです。多分2波とか3波とかだと思います。水が盛り上がって来るのがわかると「じいちゃん、また来てる！」って上から叫ぶ。じいちゃんが急いで2階に上がってくる。収まると、また降りて何か探して。そんなことをやってるうちにだんだん日が暮れてきて。

じいちゃんが仏壇からロウソクを何本か持ってきてくれたんで、なんとか夜は過ごせました。夜になると、ヘリコプターで人が救助されるのがあちこちで見えました。この辺全部海みたいになってましたから、ヘリコプターの明かりだけが水面に映るんですね。真っ暗な中で、上からヘリコプターが照らして、照らされた人を吊り上げてるんです。とにかく全部真っ暗、閑上と仙台港の辺りは爆発が起きて、仙台市内も真っ暗です。冒険広場の非常灯みたいな小さいのは見えて、そこからもヘリコプターで人が助けられているのが見えました。冒険広場は小山のようになってるから、そこに逃げた人もいたようです。

わたし達もロウソクで助けを呼んだんです。こっちを映してるな、ヘリコプターが来てるなってのはわかりました。でも、その場においてくれ、みたいな雰囲気を感じ取れたんです。それでわたし達、朝までここにしようって言って、ロウソクは部屋の中の1本だけ残して消しました。外で濡れてる人とか、もっと大変な状況の人もあるんだろうから、わたし達は家の中にいるんだから取り敢えずは頑張れると思って。

ロウソクを真ん中に立てて、4人で2階の何もなかったところに座って、夜明けを待ちました。そのうち娘が「今まで悪い子でごめんなさい」なんて言いだしたんです。じいちゃんが「そんなことない。とにかくここで助かったんだから早くトモナのところに行くべ。なんとか頑張るべ」って励ましました。

そこでラジオを聞いて、荒浜に200、300のご遺体があると初めて知ったんです。荒浜ってそんなに離れてないんですね。200、300っていうと大変な数です。そんなたくさんの方がなんで亡くなったんだらうって、すごくびっくりしました。知ってる方も混じってたらどうしようと思って。そのうち「東六郷小学校に100人孤立」ってラジオで流れて。その100の中にうちの娘はいるんだらうかと心配で心配で。泣きたいようなワァーッって叫びたいような、言いようのない気持ちでしたね。でも連絡する手段もない。

主人に小学校へ行ってくれって言ったけど、主人だって塩釜から来るんだから、途中でとんでもないことになってるんじゃないか、なんて思うと、とにかく救助してもらって早く下の娘のところに行かなくちゃって、それだけでしたね。

次の日の朝には家の中の水は引いてましたが、道路とか田んぼはまだ海のような状態でした。ヘリコプターは飛んでいたんで、とにかく見つけてもらわなきゃならない。何か目印になるものと思って、お腰を旗みたいに振って。庭の方に出て、泥の中からすくい上げてもらいました。京

都の消防の方に「よく頑張りましたね」って声かけてもらって。早く遠くに逃げればご迷惑おかけすることもなかったのに、「頑張ったね」と言われたときはほっとして。

1人1人上げてもらったときに、前の家のおじいちゃんが水の中を歩いてたのを隊員の方が見つけて、その方も一緒に。ヘリコプターに乗ってぐるーっと回ったから、辺りの景色がすっかり見えました。東部道路を境にして東側は真っ黒、西側はいつもの風景で、天国と地獄みたいな感じになってました。若林ジャンクションに降ろされて、前のおじいちゃんは足を怪我していたのでそのまま病院の方へ。そこにいた「山形」って書いてある消防の方に「東六郷小学校に娘がいるんですが、無事でしょうか」って聞いたんですけど「わかりません」って答えだったんです。学校の方は真っ黒でしたから、あそこも津波が来てるんだろうと思って、ますます心配になりました。

テントの中に助け入れられて何人が集まってから、マイクロバスで、道路が通れなかったんで別な方を遠回りして降りたところが六郷小学校の前だったんです。井土浜の知り合いがいて、「あ、生きてたあ！」って涙流して飛びついてきました。

「子ども達は」って聞いたら「みんな助かってるよ。中学校にいるよ！」って言われて、ほっとして体中の力が抜けそうになりました。主人も中学校にいて、そこで家族みんな顔を合わせたんです。

主人はその日のうちに娘を助けに行きたかったけど、行けなかったんです。それで1度中学校に入って、朝になるのを待って、膝ぐらいまで水がある中、歩いて東六郷小学校へ行ったようです。それから娘達と六郷中学校に来た。下の娘と会ったのは主人の方が早かったです。

子ども達は自衛隊の方に助けてもらってました。小学校の方も大変だったみたいで、わたし達が見た光景よりも悲惨なことがかなりあったようなんです。娘もやっとこのごろ、校庭で1人のおばあちゃんが波にさらわれていったとか、先生が一生懸命人工呼吸してるのを見たとか、亡くなられた方のご遺体が並んでるところがあったとか、喋れるようになりました。震災の後しばらくたってから。それまでは喋れなかったんですよ。子どもたちがそういう光景を見ていたと思うと、言葉になりません。

1年ぐらい前にチリ地震ってあったんです。みんなは逃げる気がなかったんだけど、わたしは海で育ったので「いやあ津波を馬鹿にしちゃ駄目なんだよ、とにかく逃げよう」って言って、子ども達は遠くの親戚に預けたんです。じいちゃんとかばあちゃんも学校に行くよりは遠くに逃げてっからわって。わたしは避難者にアルファ米とか用意しなきゃならなかったんで学校へ行ったんですけど、結局は何にもなかったんですね。10m来る来るって言われてたけど何もなくて、夜の8時ぐらいまでただ待機させられて家に戻った経験があったんです。

また同じような感じだと思っちゃったんですよ。あれがなかったら遠くに逃げたかもしれないです。わたしは小さいころから、津波が来たら遠くへ逃げなきゃ、高いところに逃げなきゃっ

て思っていたのに、なんであのとき遠くへ逃げなかったのかって今も思ってるんです。

わたしの実家は七ヶ浜の代ヶ崎というところで、海のすぐそばでした。小さいころから津波については教えられていたので、両親はきっと逃げてるだろうと思っていました。家はなくなってるかもしれないけれど両親は何とか逃げてるだろうって。1週間ぐらい過ぎてからでしたかねえ、何とか連絡が取れたのは。

そしたら家も助かった。入江になっていて、外洋からの直接の波の勢いはなくて、床下浸水で済んだんです。同じ地区でも土台しかなくなったところもあるのに、家は残ったんですね。80過ぎの両親2人だけの生活だったから、しばらくは避難所にいたみたいです。

まさかそこにわたし達世話になるわけにもいかないですから、避難所で暮らすことにしました。被災した家も心配ですから、通って家の中を片付けたい。避難所の方が色々な情報が来るし、支援もありましたから。

でも、みるみる子どもが痩せて行くんですよ。人さまから「痩せたね」なんて言われると、気が気じゃなくて。何食べさせたらいいんだろうと自力でお店に並んで食べ物を探して。精神的なストレスもあったんだろうと思います、カーテンも何もないですからね。1か月近くなると、下の娘が夜になると涙がバァッと。泣くんですよ。回りも心配して「なんで泣いてんの」って聞いてくれるんですけど、本人もよくわかんないみたいで。

地震の当日、1人で泣いていたみたいなんです。東六郷小学校に下の子だけ置いて、わたし達家に戻りましたから。目の前で車や人が流されるの見て、戻ったわたし達も流されたと思ったようなんです。そのときは父親だってどうなってるかわからない。まわりの方たちもわたしは助かってないだろうと思って娘に声も掛けられなかったみたいで。家族はみんな死んで自分1人になっちゃったって思いながら、ひと晩中泣きながら不安な状態で過ごしていたんです。それが共同生活の避難所の中で、自分でもよくわからないままだんだん出てきた。

先生方も毎日のように顔を見せてくださったんですけど、耐えられなくなってきたんです。わたしも健康面でおかしくなったし、主人の仕事の都合もあったし、他にも色々重なって、自力でアパートを探すことにしました。仮設ができるのを待っていたんではいつになるかわからないし、どこの仮設に入れるかはできてからでないと決められないって聞いたもので。じいちゃんばあちゃんはおれたちはいいよ、まだ避難所にいるよって言うんで、わたし達だけでアパートをみつけて、4月11日に4人で移りました。

最初はみなし仮設扱いではなかったので、自分達でどれぐらいの間アパート暮らしできるのかっていう不安もあったんですけど、後になって遡ってみなし仮設にしてもらえるってのがわかって。何もないので、電化製品から何から全部そろえました。全国からたくさんの支援物資をいただいたおかげで助かりました。最初っからそろえなきゃないってのはこんなに大変なことかと思いましたね。

被災した家に戻って片付けなんかしていると涙がこぼれます。宝探しみたいに使えるものをさ

がすだけ、あとは捨てるしかない。5月の連休にはお父さんが一生懸命通って、写真を、水もなかったのをペットボトルに何本も汲んで、ベビーバスみたいなもの見つけてそこで1枚1枚洗ってました。思い出だけでも取っておこうと洗ったんですけど、今も砂がザーッとこぼれます。

うちは何百年と続いた家系で、井土浜の一番端にあったので、遠北っていう屋号でした。こちら辺は田んぼで、稲が黄金色に実った風景がホントにきれいでした。のどかな良いところで暮らしてたんだなあって改めて思います。ほとんどが農家で、1軒1軒の敷地も広くて。震災の何年前まではホテルが飛んでました。星空もきれいだったんです。ツバメが毎年来て、巣を作って、巣立って行って、それが何かのときに何十羽と電線のところに戻ってくることもあるんです。「あらあツバメ帰ってきたねえ」なんて嬉しかったですよ。トンビも鷹も飛んでいました。近くに馬小屋があったので、子どもが小さいころはよく遊びに行きました。冒険広場の近くに乗馬クラブができたんです。その馬小屋も流されたんですけど、何頭か助かったと聞いたので、よかったなあと思いました。

そういう暮らしが全部なくなってしまっただけでねえ。集団で移転になればコミュニケーションも違うんでしょうけれども。危険区域になるって話が出たあとで、地域がバラバラになってしまった気がしますね。昔からがちり結びついた土地だったんです。小学校の子どもなんて、顔も名前も家族もすっかりわかって、誰か風邪引いたなんて言ったら夕方にはみんなに知れ渡ってるような。それだけ強い絆があったんです。

震災後若いお嫁さん達が集まってお茶飲みする機会があったときに「もっと集まる機会があるといいね」って、大友さん達と始めたのが手作りサークル「マートル」です。今も続いてて、自分達でできる好きなものを作っています。みんな同じ思いなんですね。前のコミュニケーションをそのまま持っていたっていい。儲けとか、そういうんじゃなく、みんなでやりたいって。精神的にもそれで助けてもらってます。そういうのがなかったら家の中でテレビ見て、泣いてる生活がずっと続いてましたから。

家の復興は何とか形になったとしても、心の復興はむずかしいと思います。亡くなった方々の事を思うと、生き残ってしまって申し訳ないと思います。亡くなった方々の無念の思いを感じながら生きていく、そういう思いでずっと暮しています。

## これからも、井土の人たちとつながってきたいと思います

大友 広美 (1962 年生まれ)

震災時 若林区井土在住

ひまわりって、常に太陽の方を向いて大きく力強く開いています。わたしたちが作ったひまわりのブローチもそんな感じで、元住んでいたところのイメージに合っていて、作っているみんなにとって、地元への思いと明日に向かう気持ちにつながるものです。震災グッズという考えではなく、東六郷のイメージを伝えるものとして作りました。

今、「マートル」という手作り作品の会をやっています。このひまわりのブローチもマートルの作品で、「六郷を訪ねる」というイベント用に作らせてもらったものです。安全ピンを取ると本の葉にも使えるように考えました。

マートルは、震災の年の暮れに話が出て、年明け早々に活動を始めました。その頃には、石巻などでは色んな震災グッズを作り始めていたんですね。「被災地のお母さんたちがミサンガを作って、500円で売って収益にしています」なんていうニュースが報道されていました。でも、そういうものを作っているところはみんな仮設住宅で、支援してくれる人がいて教えてもらって作ったりとか、デザイナーの人がいてグッズを開発していたりとか、支えてくれる組織がしっかりあったんですね。でも、民間の賃貸住宅などの「みなし仮設」だとそういう支援は全然無いんです。仮設住宅はみんな1か所に集まれるけど、みなし仮設は、民間のアパートとか戸建ての賃貸とかにバラバラで住んでいますから、集まる場所などがありません。それでも「何かやりたい」と思っていた人が何人かいました。

仙台市の地域説明会などが市民センターで開催された時に、終わった後、いろんな不安を抱えながら聞きに行ったお母さんたちが、どっかでランチして行こうと集まった場所で、「他の所みたいにミサンガ作ったりとか、なんでできないんだろうか。そういうことできる場所欲しいよね」なんて話が出てくるようになったんです。

売ってお金にしたいって声も上がっていました。わたしは震災前、個人的に小物を手作りしていて、作品を委託で販売してもらっていました。少し落ち着いたから、また作り始めようかと思っていた時に、そういう話を聞いたんです。それで、作るんだったら販売してあげたいなって思ったんです。

被災して仕事がなくなった人もいるし、東六郷小学校に避難してきた地域の方々と子どもたちって、目の前で人と車と家が流れているのを見たり、避難した先でお年寄りが低体温になっていくのをそばで経験しています。そういう子どもたちは、学校から帰ってきた時にお母さんが家にいないと不安に思う気持ちが強いんです。お母さんは、生活のことを考えれば働きに行きたいけど、子どものことを考えると出られないという話も聞いていたので、できれば少しでもお金になればいいなと思いました。

何かしたいんだけど何をしたらいいのかわからない。私にできることといえば、職場に来たボランティアの人たちが持ってきてくれる物を、みんなに届けるくらいだったんですね。その他いろんなこと、やりたいけど出来ない。お母さんたちの話を聞いてるうちに、それではと思って、わたしの作品を置かせてもらっている友達のところ、みんなの作品を置かせてもらうことは可

能かと問い合わせてみました。友達が大丈夫だよって言ってくれて、販売先が見つかったのが12月27日頃でした。さっそく、作りたいと言っていたメンバーに電話をして「こんな形でOKもらったけど、やる？」と聞いたら「やりたい！」って。

「じゃあみんなに声かけて」と言って、1月7日に集まりました。最初は3～4人だったんですが、仲間に声をかけて人が集まって来て、今は10人位になりました。

集まる場所も無かったので、最初は今泉のプールの和室でした。そこは市の施設で、2時間だけ無料で貸してくれるんです。一番初めは布もありませんでした。わが家は2階が残ったのでそこにしまっていた生地があり、使わないと思って実家に置いて来ていたのを、「やっぱり持って帰る」と言って持って来ました。「とりあえずこの生地あるからこの生地でどう？何とか好きな物やってみない」と、スタートしました。

プールの和室を何回か借りて、あとは六郷市民センターで集まっています。軽食喫茶店のようなどころでも集まりましたが、そのお店から、「作ったものを置いてもいいんだよ」と声かけてもらって、とても嬉しかったです。

地震の時、わたしは勤務先で太白区山田にある「縄文の森広場」にいました。小高い丘の上に堅穴住居が3棟立っている広いところです。見学者が途切れた時間帯で、中にいたのは職員だけでした。高台にありますから仙台市内が見下ろせるんです。「大きな地震だったけど煙ひとつついてない。火事がないみたいで良かったね」なんて仲間と話していました。

その日は時間通り勤務して、施設を出たのは午後5時少し過ぎ。女川とかに津波が来ているようだというのは、ラジオで何となく知っていたんですが、仙台に津波は来ないだろう、来たとしても津波じゃなくて床上浸水程度だろう、家の中は泥だらけになるかもしれないな、なんて感覚しかありませんでした。それが、車に乗ったらラジオで、荒浜に津波が来て人が流されて遺体が百体以上あるかもしれないと放送されていて、あれっと思いました。

家は若林区井土浜、海から2キロ近く離れたところです。松林があって、貞山堀があって、また松林があって、さらに県道があるので、結構な距離です。ただ井土浜って、貞山堀と井土浦川という大きな用水路があって、水が集まる場所ではあるんですよね。浸水しやすい場所ではあったんです。

夫は消防署職員なんですが、勤務日ではなくて明け番の日でした。仕事柄、家は出てるだろうって心配はしなかったです。年寄りもいないし、娘たちも仕事に行ってる時間だったし、家には誰もいないと思ってました。浸水してても家には戻れるという感覚でいたんです。

帰り道は信号機もついていなくて、暗くて、車が渋滞している状態でした。長町のあたりに来た時は、30分たっても車1台分も動かない。どうしようと思っている時に夫と電話がつながり、家に残っているのが分かりました。「自分は今、家の2階にいる、家には戻って来れない」と言われて、井土地区も大きな津波が来たのが分かりました。実の姉が太白区にいたので、渋滞の中

を何とかUターンして姉の家へ行きました。

夫は、わたしと電話がつながる前に職場と連絡が取れていて、夫がそこにいるということは仲間の方は知ってたようです。付近には他にも2～3軒残っていた人たちがいて、木に登って手を振ってる人とか、家を流されて屋根の上にいる子どもとかもいたようです。

夫は死を覚悟したみたいです。このままでは危ない、屋根の上に登っていれば屋根で浮く、そう思って水が落ち着くまでは屋根の上にいたようです。そして次の朝にヘリコプターで救助されて、そのまま仕事場に行きました。

うちは娘が2人いて、下の子は職場が市役所の近くなので、霞の目営業所まで車で行って、あとはバスで通っていたんです。その娘も帰って来れませんでした。途中まで職場の方と歩いて来て、霞の目営業所から自分の車に乗って家へ帰るつもりだったんだけど、どの道を通っても、この先は行けないよと言われて帰れない。途方に暮れたような電話が来ました。これが下の子とやっと連絡がとれた電話でした。娘には、六郷中学校が避難所になっているから、そこへ行くように言いました。

上の娘は北海道で、リアルタイムでテレビを見ていたので、とにかく心配したようです。連絡がついたのは夜中になってからでした。

その日は姉の家に泊まって、次の日はいろんなところに地震の連絡をしなければならなかったので、車で職場へ行きました。午前中だけ仕事をして、午後からは娘を迎えに避難所へ向かいました。娘と一緒に姉の家に1か月くらい世話になって、その後は1人暮らしだった叔母のところに、その後、6月にみなし仮設に移ったんです。

地震から1週間くらい後に、姉と娘と3人で自宅を確認しに行きました。南部道路を過ぎたあたりで風景が違って、東部道路を越えたら完全に別世界になっていて、何も考えられなかったですね。感情の動きがストップしたというか、向かう途中、東部道路を越した時の風景の違いとかのショックが大きくて、自分の家を見たときも「はあー、うちはこれか」というだけでした。

これといった気持ちの動きもなく、「何が大丈夫で何が駄目だったんだろう」とか、「うちの流された物どこへ行ったんだろう」とか、漠然とっていました。自宅にあった車や、農機具のトラクターとかコンバインとかも全部流されました。家と作業小屋とビニールハウスとがあったんですが、作業小屋とビニールハウスは全て無くなっていて、母屋の方は1階は突き抜けて柱だけ。井土浜は海沿いまで合わせると100数軒あるんですが、残ったのはほんの数軒だけでした。

うちと、北側の家（ちょうど改築してたんです）と、前の家はちょっと残って、まわりは全部駄目でしたね。うちは23年ほど前に建てていますが、解体に来てくれた業者さんが、瓦ひとつ動いてないのにびっくりしていました。家は津波が来なければ大丈夫だったんです。

見に行ったときは道路も無くて、自衛隊の人が主要道路だけ道を開けてくれて、脇道は手付か

ずのまま。中の方に入った家の人たちは、広い道路に車を止めて入って行ったようです。それまでは通れる道も無いし、遺体も大分あったみたいです。自衛隊の人たちと消防や消防団の人たちが瓦礫の排除とか遺体の片付けとかをやっていてくれました。

井土浜で亡くなったのは40数人。100世帯の中で40数人です。ここまでは津波は来ないだろうと思ったんでしょうね。1度は東六郷小学校に避難したんだけど、そのあと戻った人もいて、そういう人たちも津波にあってしまいました。年寄りはずでに避難していたんだけど、それに気付かないで「お母さんお母さん」って探しに戻って行ったりとか……。最後まで避難誘導していた若い人たちが随分いたので、そういう人たちの家族も小学校に避難していましたが、ひと晩中気が気でなかったと思います。

うちの夫は地震のすぐ後で仕事に行こうとしたんですが、作業小屋の戸がかなり壊れていたの、作業小屋の中の片付けをし、戸を全部立ててから行こうと思ったそうです。戸を立てているときにおかしな雰囲気を感じて2階に上がったら、津波が柱のように、壁のように、松の木を越えた高いところに見えたと言っていました。夫は2階に上がったけれど、車はそのまま流されていきました。

その車、井土浜の大分離れた田んぼで見つかったんです。田んぼの中に刺さってる状態で、その手前に娘の軽自動車があって、奥の方にトラクター、こっちの側にはコンバイン。車や農機具がそこに溜まってました。家の西側が道路だったので、道路が水の通り道になって、家の物は集中して流されていったようです。台所のものはすっかり無くなって、家の中に、どこ家のものかわからない耕耘機などが入っていました。松の木が根のついたまま家の中に刺さっていたり、東側の壁のところには隣の家の柱が刺さっていたり……。

とても住める状態じゃなかったですね。とりあえず仮設に行かなきゃと思ったんですが、成人4人が働いてると、仮設の抽選の対象にならないんです。仕方ないからアパートを探そうかと思ってたところに、アパートを借りてもみなし仮設として扱いますという話がありました。みなし仮設も無理だとは思ったんですが、とりあえず話だけ聞きに行くって夫が行って見たら、大丈夫だということがわかり、今は長町にアパートを借りて住んでいます。

飼っていた犬は、あの日、たまたまトリミングに出して家になかったの、助かったんです。アパートでは無理なので、姉のところでも預かってもらうことにしました。うちの犬は13歳で、いつ体調を悪くしてもおかしくない年でした。飼い主が近くにいた方がいいし、わたしが仕事の行き帰りに寄りやすいところ、ということで、太白区の西多賀か長町あたりでアパートを探しました。

マートの活動で作るものは、ひまわりのブローチもですが、みんなが作れるものを作ろう、作りたい物を作ろうということで、震災グッズという意識はありませんでした。モールの中の委

託ショップ「スマートエンジェル」に出していたので、かわいいねとか、この商品いいねって、手にとってもらうために作っていたものです。今は、モールパート2の中に催事扱いで出しています。

催し物としてずっと長く置くという形で、手作りの作家さんたちが100人位が集まって作っているお店です。そういうところに置くんだから手を抜いたのは作れないよ、お金出して買ってもらうんだから、手に取ったときに「この商品にこの値段出すのは嫌だな」と思われるようなのは作れないよ、というような基本的なことは言いますが、あとはみんな自由です。

モールにも、最初は「被災者の作品」という形では置いてなかったんです。その後、モールさんの方から「震災に遭った他の人たちのものも用意したいから、震災復興グッズとして出してください」という話がありました。それで、震災復興ブースというのを作ってもらって、そこに置いていました。

あるイベントに参加したときに感じたのですが、震災グッズって、仮設のお母さんたちの作品を、支援団体の人たちがイベントに持って来ていたんですね。作った被災者は出てこない。持ってくるのは支援ボランティア。自分たちで作って自分たちで持ってきたのは、わたしたちだけでした。お客さんに「このお金、どこに行くんですか」って聞かれた時、ボランティアの人が「被害に遭った人たちが仮設で作って、その人たちの手許に行くんです」って説明をしている中で、「これはわたしたちが作った、わたしたちのです」って言うのと「それなら買わなくていい」って引いていった方が何人かいたんです。支援してもらっているのと、支援してもらっていないのではこんなに違うんだって気が付いた最初でした。

被災した本人が売ってこと、ホントに無いんですよ。だから、逆に珍しがられて声をかけてもらえるってことも、最近になって出てきました。震災グッズとして売ろうと思わなかったから、だんだんいろんなところから話があって、活動の幅が広がってきています。作る側にすれば、1番目を向けて欲しいのは作品そのものなんです。

子どもも大人も、今でも心に傷を負っています。ある意味、震災直後よりも、今の方が気持ち的には大変ですね。最初はやはり、どうなるんだろうってみんな葛藤があって、ほっとする暇がないっていうか、ぼうっとする時間がないっていうか、いろんなことをクリアしていかなきゃなりません。目の前のことで手一杯だったのが、だんだん方針も決まって確定してくると、じゃこれから自分たちはどうするんだろうって、ハタと足踏みしてしまう。行き先が分からなくなって、気持ちのやり場がなくなってしまいます。肩の荷がホントは下りてないんだけど、下りてしまったような、ぼうっとした感覚。みんなもあつたような気がするんですよ。

わたしが井土浜に住んでいたのは結婚してからなので、27～8年でしょうか。兼業の形で農業やっていました。そんなに大きい農家ではなくて、何百年と続いている家が多いので、まだまだ新しい方です。震災の時には舅姑とも亡くなっていたので、わたしたち夫婦で作ってしまし

た。畑は半分くらいは休ませて自分たちが食べる分だけ、お米が中心でした。

井土浜の農家は、農機具なども全部駄目になってしまいました。今から全部の機械を買いそろえるとすると、1つだけでも数百万以上です。うちなんかも新しくコンバイン買ったばかりだったので、まだローンを払っているんです。専業で大きくやっている人たちも、今から買うわけにいかないですよ。国の方から、集団営農をするのなら大きな機械を貸しますとの提案をいただいているので、農業組合を立ち上げて、農業をやっていく形になるようです。わたしたちは、自分ではもう耕さないで、その組合に田んぼをお預けする形を取ろうと思っています。機械は、買えませんからね。今から家を建てて農業機械も、というのはちょっと無理なんで……。

わたしは、元の家は若林区の井土浜なのに、避難して太白区に住んでいるので、集まりがないと元の地域の人との関わりが無くなってしまいそうな不安もありました。マートの活動はみんなのためというより、自分のためにやってる部分も大きいですね。もしもこういう震災がなくて、井土浜の家がそのまま残っているとしたら、みんながちょっと寄って、話ができるような場所を作りたいなと思っていたんです。畑や田んぼに行った帰りにお茶を飲んだりとか、外に習いに行くことはできないけど何かやってみたいとか、お姑さんがいてなかなか抜けられないお嫁さんがちょっと寄ってくつろげるとか、そういう場所を作りたいと思っていました。

震災のあとで、みんなもバラバラになって、スーパーなんかで久しぶりに会ったりしても声をかけられる仲間でいられるかどうか。何かのつながりは持ってたいよなあって思っています。これからのことを考えると、今までの人たちとつながっていたいんですね。

マートのメンバーには藤塚の人もあります。海のすぐそばのところなので1軒だけ残って何も無くなって、瓦礫さえも一切なかったという土地です。そういう人たちも混ざっています。外に出られないお母さんや子どもたちが、家にこもらないで出てきてくれるひとつのきっかけになれば、というのがマートの出発点でした。あとはここから巣立っていってくれればいいなと思っています。

## 言葉って、こんなに無意味なものだったんでしょうか

大友 泰子（1944年生まれ）

震災時 若林区井土在住

井土には、嫁に来てから、あの3月11日の午前中まで、ずっと住んでいました。

24歳で嫁に来ましたから40年以上でしょうかね。わたしたちはこの地域のことを「井土浜」って言ってまして、今年1年生になった孫が、「井土浜って子どものときに遊びに行ったところでしょ」なんて言うんです。今でも子どもなのに、小さい時の記憶があるようなのね。

あの日は、趣味でやっている押し花の講習会があって、震災復興記念館の4階にいました。あの揺れはどこにいてもすごかったし、宮城県沖地震の確率は99.9%って言われてましたから、ついに来たって瞬間的に思いました。参加していた40数名の携帯が、一斉にビビビビって鳴って、ビルが軋むような音、みんなの悲鳴、机の上の物が下に落ちる音など騒然としました。

揺れがある程度おさまってから外に出ると、どこにこんなに人がいたのかと思うくらい、道という道に人があふれていました。広瀬通りの近くでした。

先生がすぐに点呼を取ってみんなの無事を確認して、気をつけて帰ってくださいということで解散しました。わたしの車は、震災復興記念館の斜め向かいにある古い立体駐車場に入れていたんですが、停電で動かなかったのでずっと歩いて帰りました。

その帰り道の話は、いまでも不思議な感じです。後で、お世話になったり協力しあったりする方々皆さんとその途中で会っているんです。

若林区役所まで来たとき、ちょうど若林区の社会福祉協議会の古澤所長さんがいらしたんです。古澤さんと、吉田さん、伊師さんの3人が外に出ていて、「大友さんどうしてたの、大変だよ、もう帰らないでここにいなさい」って声をかけられました。わたしは、地震のことしか考えていませんでしたし、津波など思いもよらなかったもので、とにかく行けるとこまで行ってみますと言って、ずっと歩いて行きました。その時、コンビニはどこもすごい行列でした。わたしも今夜食べるパンでも買って行こうかしら、なんてのきなことを考えたんですが、とにかく帰るのが先だと思って、まずはひたすら歩きました。

バイパスを越えて、東北電力のところから沖野に向かっていくと、今度は地区の民生委員の会長さんに会ったんです。その後、避難所になるとは思いもしないまま六郷中学校まで行くと、その前で、包括支援センターの方に会いました。その方たちもたまたま会議で震災復興記念館にいたということで、偶然にも一緒になりました。

わたしが日ごろの活動で携わっていた方たち皆さんにその帰り道で会って、その後の避難所生活でも本当にお世話になりました。震災復興記念館から六郷中学校まで3時間くらいかかったでしょうか、とにかく夢中で歩きました。でも、その時も津波のことは全く分かりませんでした。

夫とは、バイパスを越えて歩いている時に一瞬携帯が通じて、二言三言話すことができましたが、その後はなかなか連絡がつかせませんでした。

夫は自宅にいて、わたしが民生委員だったものですから、地震の後にご近所をまわってくれた

んですね。それから乗用車で東六郷小学校に向かったんだけど、車を降りたところで、海の方の松林が黒い壁になって迫ってくるのが見えたんですって。初めは何だか分からなかったけど、一瞬おいて、あっ津波だと気付いて慌てて車に乗って逃げたって言ってました。

車が渋滞でなかなか動かなかったようですが、とにかく東部道路は越えたそうです。東部道路を越えて少し行ったところに長称寺というお寺があるんですけど、その道はゆるい上り坂で、そばにある駐車場がまた少し高くなっているんですね。そこに車を乗りつけたそうです。そこまで走って来る間に、藤塚と種次から走って逃げてきた若い女の子が助けを求めている、「俺の車も助かるかどうかは分かんないけど、とにかく乗れ」って言って拾ったんですって。うちの人は釣りをするんで、たまたま車に防寒着を積んでたんですね。それを女の子に渡したら素直に受け取って、おじさんの加齢臭のする防寒服を、2人でだまって着てたんですって。

それで3人は助かったんです。ぎりぎり迫ってくる津波をバックミラーで見ながら、もう生きた心地がしなかったって聞きました。

わたしが六郷中学校の4階に上がって外を見ると、松林が無くなっていて、何これって思いました。名取市の関上の方からは火の手が上がっていました。

その時には東六郷小学校は大変なことになっていたんですね。中学校の廊下を思いつめたようにウロウロしている人がいて、どうしたのって聞いたら、「うちのかあちゃんがさ、津波来てもってかれたんだわ」って言うの。それで初めて知りました。その人は二本地区の人なんですが、東六郷小学校に避難したけどあまりに寒いので、毛布を取りに行きたって言うんです。旦那さんは止めたんですが、「なに、直ぐだから走って行ってくっから」って言うので、1人でやるのも心配なので、2人で軽トラックで行ったんですって。家について、トラックのドアを開けた直後だったそうです。旦那さんはトラックごと流されて、東部道路のフェンスまで行って、そのフェンスにつかまって助かったって話を聞いて、そんなすごい津波が来たんだって、もう言葉になりませんでした。

あの日避難したのは暗幕がある教室だったので、誰かがそれはずして床に敷いたんですね。それでも寒かったですね。その夜は月が出ていて、津波が来た所は水が光っていました。

後から聞きましたが、東六郷小学校では校庭に止めた車に乗ったまま流された人もいたそうです。体育館では、水がバーッとステージまで来てぶつかって、大きな渦が巻いていたって言うんです。その中を人が浮いたり沈んだりしていたって。

東六郷小学校に避難した人は、次の日、自衛隊の車に乗せられて六郷中学校に来ました。わたしたち井土の世帯は、種次の人たちと一緒に六郷中学校の武道館に入りました。家族と連絡が取れない人がいっぱいいて、「死んでるわ、死んでるわって」という声が聞こえ、みんな嘆き悲しんでいました。2日、3日と過ぎるとだんだん様子が分かってきました。

わたしはあの時ほど、言葉なんていらなくて思ったことはありません。家族を亡くした人に

かける言葉はなかなか無いですよ。口に出してもかえってこう、白々しくて。言葉ってこんなに無意味なものなんだろうかって、つくづく思いました。かける言葉がないんですよ。

なかなか家族が見つからない方には、そばにいて手をにぎったり、膝に手を置いたり、肩に手を当てたりしていると、お互い温もりを感じますよね。それだけで気持ちが通じるような気がしていました。そして、遺体が見つければ、良かった、まあ良くはないんですけども、とにかく良かったって気になりました。普段ならありえないけど、家族を亡くしたよその家の旦那さんと肩を抱き合ったりして、泣いたり悲しんだりしました。本当に今なら考えられないけど、そのときの自然な気持ちと態度でした。他の地区の顔見知りの人にも泣きつかれたりして、本当に何と言ったらいいのか……。

避難所ではダンボールの仕切りがあったんですが、わたしたちは皆顔見知りだったから、使いませんでした。その代わり、武道館の更衣室に「使用中」と札をつけたりして着替えていました。六郷中学校は地震対策が終わったばかりで、防火用水などはたっぷりありましたから、仮設トイレは組み立てましたが、ほとんど使わずに済みました。それはとても助かりました。

井土と種次の2地区が入った中学校の武道館には、結構な人数がいました。夜になると雑魚寝状態、通路も狭いものですから、誰かがトイレに行くたびに石油ストーブの持ち手にぶつかる音が妙に響いて、うるさかったのを覚えています。ひと晩中いびきも聞こえて、夜はほとんど眠れずに閉口しました。

六郷中学校あたりは、少しは地震の被害があったんでしょうが、東部道路を境に天国と地獄でした。こっちの人たちはいいなあってつくづく思いましたよ。もし、東部道路がなかったらあの津波はどこまでいったんでしょうかね。

1週間後に中野栄にいる妹が迎えに来てくれました。妹の連れあいがとても気持ちの良いひとで、お姉さんたちをいつまでも避難所に置いておけないって言ってくれました。うちではガソリンが無かったので、行かないわって言ったんですが、大丈夫、ゼロになってもしばらく走るからって。やっぱりすぐに赤ランプになったけど、何とか着きました。その後、なかなかガソリンが手に入らなくて、避難所に1週間くらい行けませんでした。ようやく実家の弟の車を借りて、妹の家から避難所通いをしました。

市や県からの情報は、避難所の本部に来るんですね。中学校の体育館が本部になっていて、そこに各地区の代表が集まっているいろんな情報を知るんです。ですから、避難所にいないと、地区の人のことも分かりませんでした。

妹の家には5月までいて、その後、押し花仲間が持っていた高砂のアパートを借りることができました。戦災復興記念館向かいの駐車場に止めたわたしの車は、3週間くらいたってから連絡が来て、管理する方が機械を手動で延々と回して出してくださいました。軽自動車なので、機械から落ちてどうにかなってしまったんじゃないかと心配していましたが、よく落ちこちないで

いてくれたって思いました。それから避難所が閉鎖になる7月10日まで自分の車で通いました。町内会長が入院されて、他の役員の方は現役で働いていらしたので、避難所の受付に座る人がいなかったんですね。それで、うちは役員でもないんですが、夫と受付に座っていました。

避難所では、いろいろなことがありました。

脳梗塞で車椅子になった方がいらして、武道館の和式のトイレが大変だったんですね。みんなで支えてあげるんですが、見てられなくなって、少し先にある包括支援センターに相談に行きました。あの地震の当日に出会った渡辺所長さんがいて、すぐ次の日の午前中に入れる施設を探して来てくれました。ところが本人は行かないって言うんです。みんなと離れたくないんですよ。息子さんが1人いらしたんですが、お昼頃になってたまりかねて大きな声で怒鳴りつけたんです。そしたら彼女はぼろぼろと涙を流して大声で泣いたのね。今までこらえていたものが涙になって一気に流れ出したんでしょうね。午後になったら行くって言って、車が迎えに来た時にはニコニコ顔で「泰子さん行ってくるからね」って言ってくれたの。その時はあれで良かったんだろうかって思いましたけど。今は施設から出て、息子さんと荒井仮設住宅に入っています。ヘルパーさんが来て調理などもしてくれるようで落ち着いています。

仕切りの衝立がない分、ケンカもありました。家族を亡くして気持ちがとんがっていた方もいました。子どもに当たるようなこともあり、区役所の方などが動いたケースもありました。その子もう高学年になって、元気で学校に行く姿を見かけます。あの小さかった子がすらすらと大きくなって、こんなにも時間が経ったんだわと思います。

何だか震災後すごく涙腺がゆるくなりました。先日も市民センターまつりで太鼓を演奏する東六郷小学校の子どもたちの姿を見て、こんなに頑張っているんだと思うと、涙が出てきました。中学生の黒潮太鼓も立派だなーって。子どもたちの力はすごいなーと思いました。東六郷の子どもたちを見守る気持ちはすごくあります。

初めて自宅のあとを見たのは2週間後くらいでした。家がいくらかでも残っている人は、長靴で入って行って、何やかやと持って来るんですよ。わたしも何かはあるんじゃないかと思って行って見たかったんですが、うちの人は行きたがりませんでした。分かってたんでしょうね、何も無いって。

あまりのすごさに言葉は出ませんでした。田んぼの中に何台もの車が突っ込んだままの状態でした。なぎ倒された大きな松ノ木や瓦礫。自宅はどこか一瞬分かりませんでした。だって、生垣の木も庭の植木も1本も無かったんです。敷地の中に池があって、そこで鯉を飼ってたんですね。その池の形が残っていて、それで我が家の場所が分かりました。もちろん水は無かったですし、鯉もいませんでした。そして、家の周りに「居久根」といって、ぐるっと木が植えられていたんだけど、それが1本も無いんです。根こそぎって、ああいうことなのね。

うちの敷地にはもう何も無かったので、すぐに瓦礫置き場になり、4つか5つくらいの山がで

きてました。まわりの田んぼは湖状態で、ポンプで排水はしてもなかなか水は引きませんでした。そして水が引いた後は、田んぼがひび割れて潮で白く粉を吹いて、亀の甲羅のようでした。

2か月半くらいして行ってみると、その道すがらの田んぼの中に、我が家のものがいろいろありました。洋服などは泥の中で切れたり色も変ったような状態でしたが、その中に、買ったばかりの新しい布団が、しっかりビニール袋のままで汚れずにあったんですね。明日車をまわして取りに来ようと思って帰ったんですが、次の日行ったら何もありませんでした。タンスの引き出しの中もからっぽでした。うちのトラックは井土浦川のところに止まってたんですが、ダッシュボードを開けたら、車検証からなにか全部からでした。何一つありませんでした。ガソリンが抜きとられた車も随分ありました。どんな風にしたんだか分かりませんが、水も引かないうちに抜いていったんでしょうかね。他にもいやな話をいろいろと聞きました。

井土地区は、震災のすぐ後には危険区域ということで、住めないって言われてたんです。何回目かの説明会の時に道路のかさ上げをするから住めるようになるって言われたんですが、もうほとんどの家は解体していたんですね。あれはすごく残念で、市にも文句を言いたいところです。そんなわけで、井土浜は完全に空中分解してしまいました。私が知っている範囲で、もう10軒くらいは別なところに家を建てたり、土地を買ったり、中古住宅を買ったりしています。六郷中学校の近くに10数世帯が集団移転するというのも聞いています。田んぼだったところを買って家を建てる予定の方もいます。

わたしのところは、孫が小学校に入るのを前に、息子たちと二世帯の住宅を建てる話になっていて、設計図も出来てたんですが、孫の入学に合わせてようと建てるのを少し待っていたんです。そこに津波でした。

津波の後、息子が自宅を見て来て真っ先に言ったのは「お母さん、僕はもうあそこに住まないよ」ということでした。ここはもう子どもを育てる環境じゃないからって。それではと、不動産屋さんをお願いしたり、自分たちも探したりと、自宅を建てる準備を始めました。今住んでいる場所に決めて、地鎮祭をしたのが去年の7月、今年の2月に引っ越すことができました。家族を亡くした人は本当に大変だったと思います。人間は忘れるって能力持ってるから、忘れることも大事だと思います。後ろばかり見ていては、初めの1歩が踏み出せません。でも、これは忘れてはいけないことですよ。だからわたしは、なんで井土浜からここに住むようになったかの由来を書いて、外には立てなかった上棟式の旗と一緒に天井裏に入れました。

この近所は、被災してアパートを借りている方がたくさんいますし、道路2本隔てると日辺の仮設住宅なので、最初は気が引けて申し訳ないような気持ちでした。今は、もう50世帯くらいは井土浜から別の場所に移っています。井土浜にもどる方は10世帯あるかないかでしょうか。町内会としても成り立つかどうか、ある程度六郷中学校のそばへの集団移転が進んで、井土浜の

開所式のようなことができれば……。その時がわたしの引き際かしらって思っています。

田んぼは圃場整備が始まっています。うちの田んぼは藤塚の人に作ってもらってたんですが、震災を機に返されました。それで、井土浜で農業法人を立ち上げた方たちに、うちもお願いしました。まだまだ無理なところもありますが、耕作できる田んぼも増えています。

結婚したばかりの頃は農家はしなくていいよって言われていたんですが、だんだんおばあちゃんの見習いをして、農作業日記なるものを書かされて、2年目からは、売る野菜を作るわけじゃないので畑に何植えてもいいからって、わたしに任されました。植えたり、蒔いたり自分の好きなように、見よう見まねで周りの人に教えられたりして続けました。近所はみんな兼業農家で、親戚もなぜか農家じゃないので、収穫したものはもっぱらお裾分けの配達でした。自慢するようだけど、自分でもよくやったと思うの。若さのなせる業ですね。

作業に飽きると、馬場の方に行ったり、貞山堀の方に行ったり。貞山堀から見る景色がなんとも言えないんです。本当にいい風景だなあって眺めていましたけど、みんな変わってしまいました。

今も畑を見ると、わたしもこれ植えてたなとか、この田んぼは植えてから1週間くらいだなとか、穂が出る頃だなとか、どこに行っても目につきます。井土浜が緑の田んぼになったら、たとえば自分が手をかけなくてもみんな見に来ると思いますね。

この辺は、朝に何か変わったことがあると夕方までには全部知れ渡っているの。いい事も悪い事もね。そして今は、知り合いに会うと別の話をしてもやっぱり震災の話になってしまいます。

ある人は、自分が流されそうになりながら、足の不自由なおばあちゃんを抱きかかえていたんだけど、その時みんな見ていたのに誰も助けに来なかったって言うんです。でも、みんなわが身のことで精一杯で、気持ちはあっても体が動かなかったと思うのね。その人は、今でもその話をするとボロボロと泣くの。「津波てんでんこ」という言葉があるけど、そんな緊急のときは誰でもわが身が大事だと思います。わたし、その人を非難することも、見てた人を非難することも出来ないんです。

井土地区は102世帯、350人くらい住んでました。そこで36人が亡くなったんです。もう3年目ですから、記憶がうすれていることもありますけど、誰と話していても最後は地震や津波の話になるんですね。どこに行っても誰と話してもね。

押し花は今も続けています。津波から2週間後に家に行った時、水も引かない泥水の中に、額の角がちょっと出てたんですね。それを見て、あ、これわたしのだって気付きました。それだけ全く無傷だったんです。押し花を始めたばかりの頃に作ったもので、サンタクロースの絵柄なんです。先生にその話をしたら、横浜の作品展で「津波にも耐えて助かった額」として飾ってく

れました。しばらく手元に帰ってこなかったけど、みんなの義援金集めにも一役買ったみたいで  
す。今は、ときどき井土浜に行って花の苗を植えてるんです。押し花にも使えるし、地区に戻っ  
ている方にお会いすることもできます。

ありふれた言い方だけど、人のつながりって大事だなとつくづく思うの。「人」はその字のと  
おりで、支えあって人になるんだってよく言われますけど、それを身をもって感じています。

## 生き物が戻ってこない、人間も住めないんでしょうかねえ

佐藤 洋子 (1948 年生まれ)

震災時 若林区種次在住

種次は広い地区で、県道塩釜亘理線沿いと、東部道路沿いと、その間の中間部の3つに分かれるんです。わたしの家は中間部で、東六郷小学校からまっすぐ南に来る道路沿い。

あたりはずっと田んぼで、道路が津波の通り道になったんですね。わたしの家にも根っこが付いたまんまの松の木が何本も流れてきました。松の木だけでなく、大きな木が家をまたぐように、根っこは田んぼの方で、枝は道路をはさんでわが家の庭の向こう側までできてました。家の中には、松の木が10本ぐらい入っていたんでしょうかね。家は地震で歪んだのもありますが、松の木やほかの大きな木でぶち抜かれた感じでした。

2階はとりあえず残ったんです。下は他から流れてきたものがぶつかったり刺さったりでひどいありさま。ちょうど家まわりにはコンクリートを土台にフェンスを建てたばかりだったんですよ。その土台は残ったんですが、フェンスがスポッとなくなりました。

東部道路のところは瓦礫の山でした。そこまで来た津波が道路に堰き止められて、流れてきたいろんなものが引っかかったんですね。東部道路の下をくぐる道があるんですが、そこを通過して水が流れましたから、潰れた車も家財道具も東部道路の西側にも流れてました。

3月11日の地震のときは自宅でした。午前中はパートの仕事で、帰ってきてご飯食べた後でした。次の日は学校の卒業式、わたしは民生委員だったので来賓として呼ばれてました。それで服を出して着替えてみたりしてたんです。そこに強い地震が来たんで、びっくりしてそのまま前の畑に避難したんです。長かったですね。おさまったので中に入ろうと思ったら、また強く揺れて、畑にしゃがんでました。

そのとき空中で電線がバチンと切れたんです。電信柱が倒れたんじゃない、線がバチンバチンと。そのとき初めて「あ、怖い」と思ったのね。家には入れないし運転するのも怖かったんですが、わたしは民生委員だと思ってそのまま着替えて、車で近所のお年寄りのところを回ったんです。そのときは普通に走れたんですよ。道路に亀裂も入っていなかったし、地震で落ちてきたものもなかった。

おばあちゃんが1人で住んでる家があって、そのおばあちゃんがウロウロと道路にいたもんですから急いで車に乗せて、次のお宅へ行きました。そこでは息子さんがすぐに駆けつけて大丈夫だったことでした。でも次に行ったおばあちゃんは、どうしても家から出ない。「危ない、こんなにごちゃごちゃで。家には入れないから車で避難しよう」って言っても聞かないんです。90歳近い頑固なおばあちゃん「おれ家にいる」って座ったまま動かない。それで「取り敢えずそこから動かないでね」って言って、別なおばあちゃんのところに行きました。おばあちゃん2人とおじいちゃん1人、軽自動車4人しか乗れなかったんで、まず3人を乗せて東六郷小学校に避難しました。

そこで3人を下ろして、もう1回さっき動かなかったおばあちゃんのところに行ったら「いや、孫が来るって言うからおれは孫と一緒に行くから」って言うんです。「孫さん来るなら」ってこ

とわたしはまた学校に戻って、どうしようかなあって校庭に立っていたんです。校庭はもうぎっちり車が入っていました。100台以上ありましたね。知り合いの中には「ここは危ないから、もっと西へ行く」って、出た人もいました。わたしは乗せてきたおばあちゃん達のことがあるから、ここから動けないなと思って校庭に立ってました。そしたら「津波が来た！2階に上がれ」っていう声が出たんですね。先生だったと思います。

それで浜の方を見たんですよ。煙でも立ちこめたような、ワァーッとした波しぶきしか見えなかったです。白いとか黒いとか、水じゃないんですよ、ワァーッという飛沫だけ。なんで波しぶきがあそこに見えるんだろうと思ったんですが、もう松の木がなぎ倒されて、無くなっていたんですね。倒れた松の木が多分そこまで来てたんですよ。貞山堀の両側にある松の木が根こそぎやられて、学校の方に流れて来ていました。いつもは松林にさえぎられて海なんて見えないんです。それがなんで松の木パラパラとしかないんだろう、なんだろ、なんだろ、と思いながら大急ぎで校舎の2階に上がりました。そして上がった窓から見たら、ザーッと水がものすごい勢いで流れて来ました。多分それが第1波だったんですね。2波も3波も来たっていうんですけど、あとは校舎の中にいたので見えませんでした。

一時は、子どもさんとかお年寄りとかみなさん体育館に避難していましたが、学校の子どもたちはすでに2階に上がっていました。そのあとお年寄りたちも「2階に2階に」っていうので登り口に集まってました。

わたしは直接見てないんですが、車の中に残ったお年寄りがいたようです。種次地区に「なつぎ埜」というグループホームがあって、そこの人たちが介護士さんと一緒に避難してたんです。歩けないお年寄りも、車いすのお年寄りもいました。お年寄り10人ぐらいに介護士さん3人ぐらい。介護士さん達が抱えて上に上げたのは5～6人で、5人ぐらい車に残されて流されたようです。びしょ濡れになって2階に上がったお年寄りが1人、次の日亡くなりました。

別の方も亡くなりました。校舎と校舎の間に隙間があるんですが、そこに渦巻くように水がドーンと入って来たんです。そこに巻き込まれた人が5～6人いました。みんなでカーテンをつないだり、タオルをつないだりして引き上げようとしたけれど、上げられたのは3人でおひとりは間もなく亡くなりました。胸を打った女の人は、痛い痛いって言いながら一晩過ごしていました。

東六郷小学校は、外からの階段と校舎の中の階段があったんです。外からの階段は体育館と隣接してるので、体育館にいた人たちはまず外の階段から上がったと思います。わたしも外の階段から上がったんですけど、中の階段から上がった人もいました。波に巻き込まれた人もいたみたいですよ。外の階段を登ってる最中に波が来て、ずぶ濡れになりながら助かった人もいました。

ずぶ濡れになっても、着替えが無いんですよ。小学校なんで体育着は置いてあったんですが小さいんです。それでも借りて着ていましたね、とにかく寒かったんです。

怖い、というより頭が働かないんですね。どうしよう、どうしよう、どうしようって。どうし

ていいか自分がわかんないんですよ。指揮してくれる人がいないと駄目ですねえ。リーダーシップ取る人がいて「こうしなさい」って言うってくれるといいんですけど、そういう人はいなかったしね。先生方も大変だったと思います。消防団の方もいましたけど、どうしようもなかったのね。

ずぶ濡れになって具合悪い人が廊下に7人ぐらい寝てました。毛布も何も無かったです。助かった方もいます。水から引き上げられて、すぐ亡くなった方もいます。

校舎の中に来てから亡くなったのは3人。校庭で車の中において流されたのは、ちょっと何人かわからないです。車ごと人が流されるところは見なかったの、何となくみんな上がったように思っていました。だけど、考えてみると走れない人もいたでしょうね。校庭に立っていたわたしも必死で逃げました。

小学校の中はごったがえしていました。わたしも知ってる人がいるかしらと見回しながら、ウロウロしてたんです。そして、ひょっと外を見たら、もう校庭が海みたいになってたんです。車は水に浮いて勝手に流れてるんですよ。

教室には地区ごとに分かれて入って、人数だけは確認しようってことで避難してきた人の名前を書いて、そのまま夜が明けるのをじっと待ってるような感じでした。水が少しずつ引いて、外は静かなんですね。雪が降ったけど、すごく星がきれいだったんです。寝られませんかずっと外見てたんですけど、閉上が明るく明るく、ひと晩明るく見えてました。火の手は見えないんですが、なんであんなに明るいんだろうと思いつつ見えてました。重油かなんかが漏れて火事がすごかったと、後で聞きました。

水が引いてから先生が避難物資を出してくれました。毛布とお水と乾パン。非常用にストックしてあったものです。最初はそれも取り出せなかったんですけど、水が引いてから毛布を1人1枚ずつ配られて、わたしも主人も貰いました。水は500ミリのペットボトルが結構あったんですね。乾パンもあったんですが、食べる気にもなれませんでした。ひと晩、お水だけいただきました。小学校か向かい側のコミュニティセンターにストックしてあったものでしょうね。

騒ぐ人もいなかったですね。1歳にならない子どもさんがいまして、おっぱい欲しかったんでしょうね。でもお母さんはおっぱい出ないようで、泣くと小学生のお兄ちゃんが「うん、うん、そうだよ」とか言ってあやしてるの。小さい子は泣いていましたけど、みんな静かでしたね。文句言う人もいないし。

ロウソク1本を囲んで、丸くなってひと晩腰掛けに座ってました。スペースが無いわけじゃないけど、寒くて横になれない。ずぶ濡れの人の着替えを手伝ったりして濡れたんですよ。上着も着てたんですけど、誰かにやっちゃったかどうかして、無かったです。家にいたし、着換えて上着を持っただけで車に乗って来たから、そんなに厚着はしてなかった。うちのお父さんはたくさん着てたもんだから、「あんた1枚脱がいの」って脱がせてお父さんの濡れた人にやったのね。

うちのお父さんは、職場の事務員さんの車に乗せてきてもらったんです。その事務員さんは家が別方向ですぐに戻ったんですが、その人も無事でした。あの時、お父さんのことは考え付かなかったですよ。ごったがえしてるところで、人を引き上げるのに「ああ、どうしよう、どうしよう」って焦っているときに、お父さんが「あ、お前、いたのか」って感じで声をかけてきて、そういえばお父さんいたんだなって気がついたの。正直、お父さんどころじゃなかったんです。

東六郷小学校の北側の二木地区は2階までは津波が来なかったから、荷物を取ってこれる人もいました。この地区では2階に逃げて助かった人、結構いたんです。その人たち、持ち出せるものは持って、次の日明るくなってから学校に避難してきました。

わたしが乗せてきたお年寄りたちは大丈夫でした。1人ね、頑固なおじいちゃん、地震がおさまったと思って歩いて自分の家に戻ったんですよ。わたしはそのおじいちゃんの話は、もう避難所に連れてきていましたから気にかけてなかったんです。ちょうど家に着いたあたりで津波が来て、波と一緒に押し込まれたような感じで自宅に入ったそうです。そのまんま水と一緒にウワーッと押入の上の天袋のところまで上がったんですって。88歳ですよ、登ろうと思ったって登れる場所じゃないです。何かに押し上げられたっていうか、運がいいっていうか、怪我もしないんです。次の日天袋から出てきて、自衛隊に助けられたんですって。

それから、迎えにいったとき家から離れなかったおばあちゃん、結局孫さんは来られなかったんですよ。そのおばあちゃんはね、水が来たから、家の中に散乱している家具や荷物の中を2階に上がったんです。次の日、学校に歩いて来ました。それでみんな「あやあ、あそこのおばあちゃん、流されないで家さいたんだっちゃあ」なんて、窓から見てたんです。救助隊の方が走って行って、すぐに搬送してくれました。それから、引き上げられるときに胸を打った女の人、苦しそうだったけど病院へ運ばれました。

あともう1人、うちの近くに103歳のおばあちゃんがいる、避難所でそのおばあちゃんはずぶ濡れになったんです。毛布でくるんで、一晩持つかどうかって心配してたんですけど、病院に運ばれて2～3日入院しただけで元気になりました。

地震の次の日、自衛隊の車で東六郷小学校からJAに移動したんです。1回では乗れないですから、何回にも分けて。わたしは最後の方で、お昼過ぎ、午後かなあ、時間も何もわかんなかったですね。小学校でいただいた毛布と水は持ってきただけど、やはり夜は寒かったです。2階の広いところで、下は畳じゃなくて固い床。湿気っぽいですよね、わたし、まだ濡れてましたしね。その日はアルファ米をみんなで食べましたけど、寒くって寒くって寝られませんでした。東六郷小学校のときは諦めてるし、寒いっていうよりも必死でしたからね。でもこのときの寒さは特別でしたね。

次の日、六郷中学校の武道館へ移りました。武道館は畳敷きでしたし、ストーブもありまし

た。わたしたち「種次」と「井土」の2地区が入りました。体育館にも「今泉」とか「三本塚」の地区が入ってました。「二木」と「藤塚」はJAでした。後になると六郷市民センターも使うようになりました。

武道館に来てからが長くって、あそこの生活は大変でした。まず避難した中に町内の役員さんがいなかったんです。先に立ってくれる人がいなかったから、町内で何かするっていう指示ができなかったんですね。本部が体育館だったんで、いろいろ取り決めるのも体育館に行って話し合うんです。支援物資も体育館に来ます。武道館は結構離れてますから、体育館と武道館を行ったり来たり行ったり来たり。「種次さんは何してんの」って言われたりしてね。リーダーは必要だなあってそこでも感じましたね。

だんだん落ち着いてきてから、町内の受付みたいなのを設けて、その後ろに生活のスペースを班ごとに取っていきました。炊き出しはすぐ始めましたよ。とにかく食べなきゃなんないですから。武道館には合わせて200人ぐらいいましたかね。六郷中学校全体ではかなりの人数でした。わたしたちは、200人分のご飯と味噌汁を作るんです。近くのお店屋さんや卸屋さんでも冷蔵庫が使えなくなって、賞味期限切れるからとか、ストックしておけないからといって、いろんな物をいただきました。最初はそれを食べてたんですが、その後はいろいろと調達してきましたね。5升炊きの釜でご飯炊くなんてやったことない。昔だったらクド（かまど）で炊いたんでしょうけどね。最初はまっ黒になったり、他の地区のできる人に教えてもらったり。そのうちにだんだん慣れてきました。

体育館の前に水道があるので、そこにテントを張って調理場を作ったんです。水は最初、ポンプで汲み上げたんだと思うんです。中の水道は出ないから、バケツに汲んできて使ってたね。間もなく出るようになりました。トイレは仮設のものが結構あったんですが、水が出ないってことはなくて学校のトイレが使えたように思いますね。プールの水を使ったこともありましたけど。夢中だったんで、よく覚えていません。電気も3日目ぐらいからはついてましたね。

間もなく学校とかお勤めに戻る人が多くなって、ご飯の用意をする人も限られました。お昼ご飯はそんなに人数がいらないから楽だったんだけど、夜は何人戻るかわからなかったりしてね。

最初はわたしたちが、しなきゃしなきゃと思って動いてたんです。だんだん慣れてきたら子どもたちも手伝うようになりました。包丁やまな板、鍋釜も結構集まってきましたね。わたしたちは流されて何もないけど、中学校の周辺は流されなかった家が結構あったから、みな持ってきてくれるんです。そのうち班を作りましょうって、当番制にしたんです。お勤めに行ったりしていないときは、わたし達するからってことで。

食事には、ルールみたいなのもあったんです。全部渡ってから「いただきます」、残してはいけない、勝手なことは絶対してはいけないっていうような。ご飯も、みんなに渡る前に食べてると睨まれるような雰囲気がありました。

あと決めたルールでは、お酒は絶対そこでは駄目だったんです。煙草は外で。そうすると夜いなくなるんです。9時消灯だったのね。9時過ぎにそっと入ってくると、酔っぱらってるから人の足踏んだりして。うちのお父さんも好きなんですけど駄目なものは駄目、それでもペットボトルに入れて「お土産」って持って来る人がいました。なんぼか美味しかったでしょうね。辺りに飲み屋さん結構あったし、飲んべえさんは飲まないでいられないんですね。

ずるいなと思うことがあると、こっちが一生懸命やってんのにと、腹が立ったりもしましたが嫌なことばかりではなかったです。

少したってからは町内会長も役員さんもそろって、いろんな指示を出してくれるようになりました。物資はまとめて体育館に来るんですね。それを分けるのに代表が行かなきゃいけないんで、最初はわたしたちが行ってたんですけど、朝昼晩とご飯作るのに忙しくて暇ないんですよ。そんなのも含めて役員さんたちや町内の男の人たちが行って、伝達するようになりました。

被災した家のほうでは泥棒が多くって、監視も必要だったんです。夜は2～3人で組んで地域をパトロールしてました。泥棒、入りましたね。近所の家で、泥だらけでも2階は取りあえず残ったところがあって、油断してたんですね。まさかその家の者が帰れないのに、他所から入って来るわけないって。2階の部屋はパソコンとかテレビとかあったんだけど、それを持っていかれました。わたしの家でも、タンスがどういわけか壊れもしないで東部道路の下のよそ様の庭に流れてたんです。そしたら全部開けられて中を見られてました。衣類の下にタンス預金なんてする人もあるでしょ。うちでは貴金属類はタンスに入れといたんですが、いらぬようなのは置いていって、ネックレスも指輪も持っていかれましたね。

大きい道路はすぐに通れるように片付けられたので、道路沿いのお宅は軒並み泥棒に入られました。津波が来たのは1階の天窓の下までですから、2階にあったものは使えるものも多いんです。田舎のお年寄りって、わりと現金で持ってるんですね。仏壇の下にお金を葬式代として入れておくんですって。おばあちゃん達が「なんで仏壇の下に入れてたお金だけ無いんだろう」って言ってたのを何度も聞きました。仏壇は見つかったんだけどお金は無かったって。

わたしは避難所の武道館を1か月で出ました。人がいなくて、結局わたしたちの年代の人がずっとご飯の用意してたんです。そして夕方になると外に出てる人がわっと戻って来るんですね。ちゃんと出来てるところに来るわけでしょ。でも文句は言われるし、わたしたちにしてみればムツとくともありましたね。

避難所も200人ともなると、荷物がだんだん増えてくるんです。支援物資も、自分で使わないんなら貰わなきゃいいようなものですが、全部流されているといただける物はいただいておこうという気になるんでしょうかね。中学生用のスニーカーを、なんでおばちゃん達がって思うんだけど、欲しかったんでしょうね。わたしもそういうところが無いわけじゃなかったですね。支援

物資は何でもいただきました。

みんな荷物がいっぱいね、寝るところが無いぐらい。狭いし、仕事ばかりあるし、一生懸命やっても文句言われるし、この辺にアパートは結構あったんで、息子が契約してきたんです。それで1か月で引っ越しました。最初は仮設住宅はタダだけど借りたアパートの場合は実費ですよって言われたんだけど、実費でも何でもいいからとにかく出たいなあとと思って借りました。

お年寄りはいいいんですよ。何言われても「んだ、んだ」って言って仲良くやれるんです。でもわたしぐらいだと責任もあるし、子どもにはやいやい言われるし、動かないわけにはいかないしね。お年寄りはみんな仲良かったんですよ。話も楽しいんじゃないかな。丸くなってね、すっかりそこは自分たちの世界になってました。

わたしは種次生まれの種次育ちですから、ここのおじいちゃんおばあちゃんのこと、何となくわかるし何でも言える。だから、私も言われます。でも後はさっぱりしてて、あんまり嫌な思いは残ってないのね。

わたしは別家（べっか）ですけど実家は農家。兄弟は4人で、弟が家を継ぎました。みんな近所に住んでいて、家を流されたので頼るところも無かったんですね。親戚を頼って行った人も多いけど、わたしは行くところがなかったの。弟たちは姉宅で10日間お世話になっていました。

アパートは見つけましたけど、荷物も何も、布団もなかったんです。元の家がどうなってるかも心配でした。息子達は見に行き、通帳とか大事なものは持って来てくれましたが、泥棒が入ってるというの聞いていたんで気になっていました。

ようやく元の家に行ったのは1か月過ぎたころ、アパートに移ってからでした。それまでは泥水と瓦礫で行けなかったです。田んぼの水は2か月ぐらいありましたからね。大きい道路だけは何とか車が通れるようになったんですが、うちの方の田舎道は泥をかぶったまんまでした。1か月ぐらい過ぎて、歩けるようになってから家を見に行きました。そしたら松の木とかよそ様の物置とかがあってもうメチャメチャ。家の中には入りませんでした。流れてきたいろんなものが壊れて引っかかって、とても入れる状態ではなかったですね。初めて家に行った日は様子だけ見て帰ってきました。

その後しばらくして、親戚で「廃車にする古い車がある」って言うんで譲ってもらったの。買い出しに走ったり、家の物を運び出したり、うんと役に立ちました。とにかく片付けなきゃないんですよ。家財道具はほとんど流されましたよ。流されない物でも壊れて使い物になりません。前の家の冷蔵庫が扉に刺さっていたり。ミシンとか重いものは家に残ってたけど、編み機は流されたね。テレビとか自転車とかも、田んぼの中にあるんです。我が家のなんです。「佐藤」って宛名が書いてある手紙なんかもあって、まさかそのままに投げてもおかれませんから、すべて拾いましたねえ。

あとガラスが大変でした。壊れたガラスがその辺に散らかってるんです。それ全部拾いまし

た。少したってボランティアさんが来てくれたんです。木を片付けて貰ったのはボランティアさん。畑を掘り起こして瓦礫も拾ってもらいました。すごいんですよ、瓦やブロック、木の根っこなんかも畑に混ざってましたね。だからトラクターが入れないんですよ。ボランティアさんに手伝ってもらった後も、随分拾いましたね。特にガラスは危ないと思って、ひとつひとつ手でね。拾って拾って拾っての毎日。早く処分したいものは今泉の清掃工場に車で運びました。

でもね、写真が流されないで家の中の隅っこにあったんです。子どもたちの古い写真。取っておいたけど、すぐには手を付けられなかったのね。泥を取って、乾かして、しばらくかかりましたねえ。田んぼの水が引いたら、見覚えのあるものがいろいろ出てきました。家のものだとわかって、そのままにしとくのも嫌なので、使うわけではないけれど拾いましたねえ。拾って拾って拾っての毎日でした。

家のまわりは畑で、わたしも少しは作物を作っています。今は、アパートから通っています。大がかりではないけど、えぐられた畑に山砂を入れて除塩の薬だけ撒いてもらいました。畑には何もしなくても行きたくなるんですよ。それでもちょっと取れたらいいかなと思って、今はブロッコリーとキャベツを植えてるんです。虫を取りながらね。里芋なんかも植えてますが、土が固くて思うように大きくはならないです。畑の土はまだまだです。急にはできないから、少しずつでも畑直していかなきゃいけないかなあと考えています。

塩害のせいだと思うんですが、ヒエとか雑草がすごいんです。どこからそんなにヒエが来るのかねえ。あれぐらいヒエの種落ちたから、これから何十年はヒエとの戦いだなと思っているんです。コスモスなんかも青々育て、いっぱい蕾持つんですが、咲くまでに腐ったり病気になったりしてしまいました。何も育たないよって言われたけど、草だけは青々と育ちました。

そして塩害というか、水のせいか、カエルも来ない、スズメも来ない、「なんだい生き物いないわ」と思うくらいだったんですね。でも今年は虫がいっぱいです。ダンゴムシやコオロギがすごい。その虫が畑に栄養もたらしたのか、カエルが戻って来たり、川にザリガニも見かけるようになりました。ちょっと雨が降って田んぼに水が浸ると海鳥が来てます。キジが更地になった実家のところにいます。トンボもいなくなっていたけど、今年は飛んで来ましたね。ネズミも出るようになりましたが、まだ蛇さんとは会っていないのね。蛇は冬眠しているから出てきてもいいと思うんだけど、駄目だったんでしょうかね。自然って正直なものですよね。生き物が戻ってこない人間も住めないんでしょうかねえ。

わたしのところは、震災前と同じところに家を建てるので、大工さんに頼んでるんです。まだちょっとかかりそうだけど、実家の弟もやっぱり直すって言ってます。

弟は農家なんで、今年は共同で米を作りました。去年まで作れなかったけど、今年は共同で作って普通に育ちました。今、一生懸命稲刈りしてます。大型機械もみんな共同でね。ハウスも

補助で何棟も建てています。でも後継者がいないんですよ。うちの弟もそうなんだけど、ご近所も60代ですね。その子どもたちはやらないですね。もったいないです。せっかくハウスを建てて今度は倉庫を建ててるわけでしょ。弟のところは更地にした敷地を倉庫建てての提供することにしていて、いずれ自分の家も建てつもりです。でも、息子も嫁さんも戻らないって言います。公営住宅に住むつもりのようなのね。弟はやっぱりグループをまとめなくちゃならないので、おれはこっちに住むって言ってます。まだこれからどうなるかわかりませんけどね。

田んぼが黄金色になるとすごくうれしいのね。作れなかったときは、こんなに広いところ、どうなるんだろうと思いましたねえ。機械も全部そろって、よそ様の田んぼも引き受けてたんです。弟はね、農家でずっときたんだから自分はそれしかできないって、60歳過ぎて頑張っています。

東六郷小学校は六郷中学校に間借りしていて、六郷小学校と統合してないんですよ。26人しかいない小学校だけど、わたしたちにしてもPTAも何もない、ここで運動会も無いっていうのはやっぱり寂しいなと思います。賑やかな運動会で、地域ぐるみの大きな行事でした。それが無くなるのは嫌だったから、よかったんですが、今この地区から通ってる子どもは2人しかいません。お年寄りも戻ってきても、若い人達は戻りたがらないですからね。

わたしも元の家に戻ると、夕方がいやなんですよね。何人も亡くなったっていう思いがあるからかもしれないけど、やっぱり寂しいですね。田んぼとハウスだけ。1軒だけ戻っても、今まで住んでいた兄弟がいなくて心細いなあって気持ちがあうんとあります。生き物が好きで、前は犬や猫や鶏がいたんです。鶏小屋も、がっちりした犬小屋も無くなってしまいました。鶏は7～8羽。古い鶏で卵産まないんだけど、朝は結構鳴いてたんです。犬は会社の近くの工場のところで亡くなったのをお父さんが見つけたんです。「あんたに見つけてもらってよかったね」って言いましたけどね。

井土浜に乗馬クラブがあって、馬も結構いたんです。東部高速に引かかるようにして随分亡くなったそうです。流されていったんでしょうね。

亡くなった方は種次だけで22人。助かった人のなかでは、いざこざもあったりしてね。子どもをおいて来たのが心配で戻って、その子どもとお母さんとおばあさんが流された家もあります。道路沿いにあったおじいちゃんとおばあちゃんだけのお宅で、2人とも亡くなったところもあります。

この辺はお年寄り家族が多いんです。ご夫婦で亡くなったのは2家族。1人暮らしの人も5軒ぐらいありました。孫さんもいて5～6人の家族もあつたし。ほぼ100世帯だから300人ぐらいですかねえ、300人のうち22人亡くなったの。若いお母さんもいました。

これからどうなるんでしょうね。でも、みなさん喧嘩しながらも元気ですよ。別に後腐れのな

い喧嘩です。お年寄りが多いですが、いつ行ってもやっぱりニコニコってしています。今年はまだ入れないけど、家を建ててる方も結構います。半分以上は戻ると思いますよ。わたしも何にもない種次に行って、草取りだけなんだけど、ああ今日も1日過ごしたなって感じます。行かないと、ああ今日は何したんだろう、何で行かなかったんだろうって思ったりね。田んぼを見ただけでも、確かに戻ってきてるなって感じはあります。何だかんだ言いながらも、みんな種次が好きなんですよ。農家しかないんだけど、畑があって田んぼがあって、広くていいなあと思います。自然が戻ってるから、みんなが戻る日も来るんじゃないかなあと思います。

## 松林が無くなってしまうと、ごく近くに海が見えるんです

庄子フミ子（1950年生まれ）

震災時 若林区二木在住

自分の家が海の近くだなんて意識、ほとんどありませんでした。自宅は平屋でしたし、松林で海は見えませんでしたから。津波前は松林も一列じゃなく、貞山堀の奥まで何列も幅があったんです。自宅から松林までの間に別の町内があり、沢山の家もありました。今はすぐ海です。松林が無くなってしまおうとごく近くに海が見えるんですね。

3月11日の地震のとき、わたしは畑に行っていました。家からちょっと離れた、車で5分くらいの二又ってところです。前々から、近いうちに大きな地震が来るって言われてましたから「ああ、いよいよ来たか」って感じでしたけど、あんなに長い時間で、いったんおさまってもまた大きな揺れが来たんですよ。畑にしゃがんで、じいっとおさまるのを待っていました。これは尋常なものでないと思って、すぐに家に戻ったんです。その戻る途中も、道路が陥没したり物が落ちてたりで走りにくかったんですが、まずとにかく戻ったんです。

夫は家にいました。夫が無事だったんでほっとして、それから家の中ですね。家の中がまた大変で、とても素足で歩けるような状況じゃなかったんです。とりあえず歩けるようにしなきゃと思って片付けてるうちに、後ろの家の叔母さんのことが気になってきました。75歳の叔母さんが1人で住んでたんです。「お父さん、ちょっと行ってきてみてきて」って、夫に見に行ってもらったんですけど、すぐに戻ってきて「いなかった」って言うんですね。だけど車はある、家の鍵も全部開いてるって言うんです。もしかしたら家の奥の方で腰抜かしてるかも知れないと思って、もう1回行ってもらったんですけど、やっぱりいないって。

それでもわたしは心配で、今度は自分で行って見たんです。裏へ回って声かけてもやっぱりいないんですね。ウロウロしてるうちに近所の防火クラブの班長さんが来て「6メートルの津波が来る」って知らせてくれました。

びっくりして、急いで家に帰って「わたしたちも避難しなきゃ」って夫に言ったんです。後から思えば、その間に大分時間がたってたんですね。40分か50分ぐらいでしょうか。わたしはとっさに車で逃げようと思ったんだけど、夫が「避難は車では駄目だ」って言うので、とにかく歩いていくことにしました。

家を出るときには何も気付かなかったんです。家の前に別な家がありますし、資材置き場なんかもあるので、海の方は全然見えないんですよ。それで田んぼが広がっている道路に出て、初めて津波が見えたんです。下の方が真っ黒で、上が白い煙のような状況になってる。「ワァー津波だ！」って、もう何がなんだか分からないけど、後で思うと東六郷小学校へ走って行くつもりだったんでしょうね、その時点で間に合うはずないんですけど。どうしたらいいのか自分でもわかってなかったけど、東六郷小学校が地域の避難所になってたから、とにかくそこまで行こうとしたんですね。

わたしは全力疾走でした。夫も、わたしの後から走りました。でも、山王神社のそばの集会所の前まで来たら、津波に追いつかれて前へ行けなくなってしまったんです。

もうどうしていいかわからなくて、どうしようどうしようってなったときに、集会所の前の家のご主人がわたしたちを見つけてくれたんです。「2階に上がれ、早く！」って声かけてくれて、わたしはまっすぐ走っていったんです。夫は間に合わないと思って、そばにあった電信柱にしがみつきました。夫は長靴履いてジャンパー着てました。長靴のせいもあって速く走れなかったのかもしれない。家を出る時ジャンパー着てたのは着替えたとかじゃなくて、そばの作業場に外に出るときのために置いてあったのを、ちょっと肌寒くなったんでひっかけてたんです。長靴もそこで履いたんでしょうね。

わたしは濡れずにその家に辿り着いて、とにかく2階に上がりました。自宅からそこまで200メートル以上あるかなあ。全力疾走だったので、2階に上がった瞬間にふらふらっとして、もう動けなくなってしまったんです。何も考えられなくなった。「お父さんいない、お父さんはどうした」って、そこのご主人に言われたんだけど、何言われてるのかもよくわからない。ハアハア言ってるだけで何も考えられなくて、落ち着くまで大分時間がかかったんです。

たまたまこの家に、閑上に行く途中の若者がいました。地震の後で、職場から閑上に帰ろうとしてたんです。この辺までは家がいっぱいあるので海が見えないのね、でもここまで来ると田んぼが広がっているので津波来るの見たんです。それで、その人、道路に車を捨てて走ってきた。わたしたちを見かけたみたいで、ここに来れば助けてもらえると思ったらしいんです。それでその若者が、わたしたちより先に2階に上がってました。そしてもう1人、この家の息子さん、東京に住んでるんですけど、次の日たまたまお母さんの実家のご祝儀があって、その日の午後に東京から着いたばかりだったの。その息子さんと若者、ご主人とわたしで4人でした。

わたしがしばらくして落ち着いたたら、「誰か前の電柱につかまってる人がいるよ」って言われました。2階のベランダからよく見たら、それが夫だったんです。あたりは全部水で、前の家の屋根とあまり変わらないぐらいの、かなり高いところです。電柱は下から登るために出っぱりが付いてますから、そこに手を掛けてしがみついているんです。水に浮かされてどんどん登ったんでしょう。助かってくれていたんでほっとしました。だけど目の前にいるのに、どうすることもできない。そこのご主人も色々考えてはくれたんだけど、何にもできなくて。とにかく2階から「がんばってえ、がんばってえ」って声かけていました。

明るいうちは見えるからそれでもよかったんです。返事も戻ってくるし。電柱の向こうはバス道路のはずなのに道路も何もなくて、ただ泥の海みたいになってました。幸いなことにビニールハウスが流れてきていて、前の家の間に引っかかっていたんです。塩釜亘理線の東側に大きなビニールハウスがいくつも建っていたんです。それが流れ流れてゴロゴロ来て、ここで止まった。バス通りは軒並み電柱も倒れてるんです。うちの夫が登った電柱が残ったというのは、このビニールハウスに守られたの。ビニールハウスが引っかかってくれたおかげで、水の流れが変わって、右と左に別れていったんです。これがまともに来たら、電柱も倒されていたし、つかまったまま流されていったかもしれない。運がよかったんですねえ。

もう一つ運がよかったのは、松の大木が流れてきたこと。それで、その木を足で引き寄せて、電柱につかまって松の木に座っていたんですね。それで体力が保たれたって。ずうっと立ちっぱなしでは、すぐ持たなくなってしまうから。夫が電柱にすがってる間にも、ヘリコプターが何機も飛んで来たそうです。手を振ったけど、全然気が付いてもらえなかったって。それ、後で聞いた話ですけどね。

明るいうちはお互いの姿が見えて、声をかけあっていたんですが、暗くなったら真っ暗で何も見えない。停電で電気もないしね。声だけが頼りで、代わる代わる声かけをして、返事が戻ってこなければ何回も声をかけるってような感じでした。声が戻ってくれば、まだ大丈夫ってことです。何回か津波が来て、そのたびにすごい心配しました。その家のご主人が「降りられたら降りてこい」って声をかけて、夫も何回か降りようとしてみたらしいんです。でも、とにかく足が下につかないとどうすることもできないので、また登って、ずっとその状態でいました。

うちの息子も地域の消防団に入っているのですが、勤めは中央の方なので、お父さんが今こういう状況なので何とか助けて貰えるようお願いしてくれて、携帯でメールしたんですけど、それは届きませんでした。娘は泉の方にいるので、夜になってから今度は娘にメールしたんです。そしたら娘には届いたんですね。娘は警察と消防に連絡しようとしたんだけど全くつながらなかったようです。わたしも、お父さんが助かった後すぐにメールしたんですが、そのメール、娘のところに届いたのが3日後だったそうです。みんなすごい心配していたとのことでしたが、どうしようもありませんでした。

その日の夜、11時ぐらいでしょうか。夫自身も限界を感じたのかどうか、降りてみたら足が何とか下に付いたんですって。

山のほうだと、水が引くって言うと一気に引っちゃうのね。ところがこの辺は平地なので、ある程度水が引いても、それ以上はなかなか引かないんですよ。すごい時間かかるんです。夫が降りてみたら、水が首の下まであったそうです。でも、これなら何とか家まで行けるんじゃないかと思っただけです。電柱のあったのは場所的に一番深いところだったみたいで、家に近付くにつれて少しずつ水から身体が出たみたいです。

わたしが階段の降りられるぎりぎりのところまで降りて、携帯の光をつけて「ここだよ」って合図してました。「いつまで何してるの、ここだよ、ここだよ」って言ってるのに、なかなか来ないんです。足場が悪いどころじゃないんですよ。トラックが玄関前に流されて横になってる。階段の上がり口には松の大木が根こそぎ流れてきてる。その家の1階部分はもちろん天井近くまで水が来たので、床板も剥がれたような状態だったんです。とにかくものすごい瓦礫で思うように進めないんですが、わたしの方は心配ではがゆくて、とてもとても長い時間でした。それでも何とかたどりついたんです。

夫はもう手も足も動かせる状態じゃなかったですね、凍えちゃって。わたしが全部脱がして、そこのご主人の衣類をお借りして着替えさせました。借りるというより、上から下まですべていただきました。運がいいことがいくつも重なったんです。反射式の石油ストーブがあったんですよ。たまたま東京にいる息子さんが帰って来るといのでストーブ用意していて、油も一杯入ってたんです。それで一晩暖めてもらいました。そこのお部屋にホッカイロがあったのも幸運でした。

だからほんとに、痩せてる夫なんですけど、おかげで低体温にもならずすんだんです。そしてあとで聞いたんですけど、夫は自分は電柱に登れたから助かったけど、わたしは流されたと思ってたって言うんです。

朝になったらその家のご主人が「もしかしたら食べる物あるかもしれない」って、探しに行ってくれました。そこのお宅は柱だけ残して台所もスポッと抜けちゃったんですけど、それでも、でも何か残っているかもしれないと、下に降りていって、袋に入ったおせんべい、袋開けてないのを見つけてきてくれました。とりあえずおせんべい1枚ずつ、ストーブにかかっていたやかんに水があったので、水もみんなでちょっとずつ飲みました。おせんべいも全部食べちゃうとあとで困るから、少しずつにしました。

その奥さんっていうのが防火クラブの班長さんなんです。6メートルの津波が来るって教えてくれた方で、その方が地震のあと出て行ったっきり帰ってこないって言うんですね。責任感のある人だから、声かけて歩いているうち流されてなければいいなあって心配でした。あとで、東六郷小学校の方に避難したとわかったときは、ほっとしました。

次の日の朝、何時ぐらいだったか、自衛隊の方が来てくれたんです。来てはくれたんですけど余震が続いていたので、来るとすぐ、津波警報が出て撤退命令っていうんですか、そういう命令が出たから、また来るからって、すぐに戻っていきました。

息子とはそのとき会えたんです。息子の職場は上杉だったんですが、交通機関もストップしちゃって上杉から六郷中学校まで10キロ以上歩いてきて、そこで一晩過ごしたそうです。次の日の朝、夜が明けるのを待ってわたしたちを探しに東六郷小学校まで来たんですって。お父さんお母さん来てないよって言われて、自衛隊や消防の方々と一緒にわたしたちがいたところに来たんです。そこでようやくお互いに無事が確認できました。

午後になり、そこのご主人が町内の役員をしていたものですから、わたしたちも避難所に行かなきゃなんないと、避難所になっている東六郷小学校へ行きました。わたしは履くものが無かったんです。そこに駆け込んだときはまだ水が来てなかったもので、ブーツ履いてたのに律儀に玄関に脱いで上がっていったんです。それが流されてしまったから無いんです。消防の方に、消防活動するときの長靴を貸してもらって、それをまくって履いて行きました。足の踏み場もないよ

うな状況で、「どうやって行けばいいの」って感じでしたね。

階段の登り口に、根こそぎ横たわってた松の大木には途方にくれました。飛び越えるように進みました。座敷も床板が剥がれて、縁の下みたいになってました。よそから入ってきたものもいっぱい。あたりは、道路もみんなそんな感じでした。散乱してる、なんて程度じゃないんですよ。どこに足を置いたらいいかわからないくらい瓦礫でいっぱいのところを、飛んだり跳ねたりしながら行きました。自衛隊と富山県警の方が、とりあえず井土長町線の東六郷小学校の入口辺りまでは瓦礫を片付けてくれてたようです。わたしたちはそれより東にいたから、片付いてるとこまで行くのが大変でした。

東六郷小学校で町内の人たちと合流して「あらあ、無事でよかったねえ。来なかったから心配してたんだよ」ってみんなに言われて、お互いに喜び合いました。

そして間もなく、自衛隊の車で別のところに移ったんです。東六郷小学校も1階天井まで浸水して、みなさん2階に上がってたんですね。小学校に避難した人たちも、あとで聞いた話では本当に大変だったようです。地震のあとの避難というのはまず校庭であったり、体育館であったり、そういうところに避難するんですね。最初から校舎の中に入るってことはしないんです。でも津波が来るとなって、みんないっせいに2階に上がろうとしたんですね。上がりきれずに流されて亡くなった人や、2階からカーテンをつなぎ合わせて引き上げられた方もいたそうです。ずぶ濡れになった方も随分いたみたいで、ものすごい状況だったと聞きました。わたしたちは運がよかったなあって改めて思いました。

12日の午後みんなと合流した後、自衛隊の車で何組かに別れて移動しました。六郷中学校と仙台農協の六郷支店。六郷中学校にはたくさんの方々が避難していたので、全部は入れなくて、わたしたちは農協の2階の会議室に入れてもらったんです。そこは、下で金融のお仕事をしていることもありますし、本来は指定避難所ではないんです。農協の六郷支店さんの好意で、わたしたちは最終的にそこに落ち着くことになったんです。あとは町内ごとに六郷中学校の体育館、校舎のそばにある武道館でした。農協の支店には、わたしたち二木と藤塚の人たちが入りました。

最初はものすごい人だったので、夜も足を伸ばして横になれるような状況ではなかったですね。何日かたつと親戚の家を頼ったりして出ていく方が少しずつ出てきましたけど、だからといってスペースに余裕はないんですね。2、3日して、それぞれの町内会長さんを先頭に、避難所の運営委員会を立ち上げました。町内会長さんのほかに、賄いとかの関係があるので町内から女性も1人ずつということで、わたしが頼られました。本来であれば防火クラブの班長さんがとも思ったんですが、民生委員だったわたしが引き受けました。

いろいろな大量の救援物資が全部六郷中学校の体育館に入って来ました。その六郷中学校体育館を本部として、朝に委員会を開いて物資の仕分けをしたり、その日の予定を話し合ったり。まず朝6時に会議、それから昼と夕方と、最初のうちは日に3回ぐらい会議があったんです。

慣れていくうちに、会議は朝1回にして、あとは随時必要に応じて、というような声が出てくるようになりました。避難者が全体で1000人ぐらいいましたから、最初のうちは救援物資も、箱を開けて数を数えて、なんて細かく分けてやってたんですが、それではやりきれないという感じになりました。

そのうちに六郷市民センターで和室を開放してくれて、農協から藤塚町内がそちらに移ることになったんです。二木町内だけになったので、それからは大分余裕を持って使えるようになりました。二木は1組から5組まであるんですが、組ごとに居場所を決めた方がいいだろうっていろいろ考えて、あとは最後までそういう状況でした。二木だけだと60人ぐらい、最初はもっといたんですけどね。知り合いを頼って出て行ったり、アパートを借りたりする方もあったりして少しずつ少なくなりました。

避難所生活が始まるのと同時に、町内の方々の安否確認が重要でした。避難所運営にも関わっていたので、思うようにできなくて1週間か10日くらいかかってしまいましたが、何とか確認取りました。二木の町内で亡くなった方は9人、他の町内と比べると少ない方ですが9人の方が亡くなったんです。

二木は世帯数はそう多くなくて、90世帯弱ですね。人数は300人弱。二木町内は井土町内の西、東部道路をはさんで西側までなんです。班は、1組から5組まで。東部道路の西側の1組は道路に遮られて床下浸水程度ですんで、大きな津波被害はなかったんです。東部道路の東と西では天と地ぐらい状況が違ってましたね。大変だったのは5組、2軒はすっかり流されました。家の形はある程度残ったところでも、住めるような状態ではないのね。被害の大きさというのは、水の流れによって大分ひどいところと、それほどでもないところとあったみたいです。水の量は変わらないんですけど、瓦礫の量とか水の勢いとか。松の大木も根こそぎ流される勢いですからね。わが家は4組で、2メートルくらい波をかぶりました。

地震のあった2時から3時というのは高齢者だけが自宅にいる時間帯なんです。若い方はお勤めであったり農作業であったり。でも、高齢者の方たち、結構無事だったんですよ。なぜ無事だったかという、専門農家である消防団の方々がお年寄りがどこにいるかとか、把握できてたんですね。そういうところを3人ほどで手分けして回って、車に乗せて小学校まで連れて来てくれたんです。また毎年の避難訓練、老人会の方は意外と真面目に参加してました。だから割合素早く避難できたんですね。

一番東側の5組の方たちが集中して亡くなっています。声かけがそこまで行き届かないということがまずひとつ。それから一旦は避難所に行ったんだけど、地震から津波までの時間が長かったために、寒さをしのぐ着る物を取りに行くって戻った方、5組だけでも6人亡くなったんです。

あとから聞いた話だけど、ふた組のご夫婦が戻ったんですって。ひと組はご夫婦2人とも亡く

なりました。もうひと組は東部道路若林ジャンクションまで流されて、ご主人だけ助かったの。助かったご主人の話では、目の前に津波が来るまで気付かなかったって。うちの畑のすぐそばなんだけど、畑のところまで水が来るまで全然気付かなかったって。奥さんが着る物を取りに家に入って、ご主人は外で待ってたみたいなんです。この限界で2階に上がって助かったって方も2軒ほどいるんです。だから2階に上がっていれば助かったんじゃないかなと思います。まあ、あとの話なんですけどね。戻らなければよかったのっていうのもあとの話です。

二木町内の避難所生活は、最終的には6月初めまででした。日辺に仮設住宅ができて、農協の支店を全部引き払ったのが6月の初めだったんです。うちの場合は息子の仕事もあるので、4月の初めにアパートを借りて、息子だけ取りあえず先に移りました。わたしたちは立場上すぐには移れないので、しばらくは避難所のお手伝いしながら農協にいました。その後、しばらくはアパートと避難所を行ったり来たり。最初のうちは食事支援された物で作ってたんですけど、避難所の運営も少しずつ変わってきて、自分たちでやりましようっていうふうになったときに当番を決めて、当番でないときは自由に過ごせるようになったんですね。

その間には、自衛隊の炊事班というのでしょうか、その方々が中学校の校庭にテントを張って常駐して、食事の準備してくださるようになりました。それを人数分申告して、いただくことができました。運営会議も日にちがたつうちに少しずつ減らして行って、それなりにうまくできるようになりました。最初のうちはみなさん疲れが溜まってしまったんですが、だんだん上手にできるようになりました。お風呂に思ったように入れないという問題も大きかったです。霞の目の自衛隊での入浴や、温泉地への招待支援は有難いことでした。

みんな顔見知りです。同じ町内はもちろんですし、よその町内でも全く知らない方はそういません。大きな街中の方とは違うのでね。避難所生活で、むしろ団結するようになったというか、そういう面もあったと思います。避難所運営で大変だったというのは、中には個性の強い方いらっしゃるんですよ。トラブルが起きることも多々ありました。それが精神的にすごく疲れしました。

避難所にお借りしていた農協支店のお部屋、最後に皆でお掃除して町内全部仮設住宅などに移ったんです。移れない方も何人かいらして、そういう方は六郷市民センターで藤塚の方と一緒に暮らすことになりました。そこで二木町内の避難所は解散しました。

わたしは、六郷中学校体育館を避難所にしていただいていた三本塚の方々も民生委員として担当していたので、そちらにも足を運んだりして、結局最後まで関わっていました。六郷中学校も7月初め、皆さん仮設住宅に移り避難所は解散しました。忙しかってというより、夢中だったんです、自分のことなんて考えなかったですね。だからといってみんなのお世話してたってという感じもないんですけど、なんか知らないんだけど夢中で過ごしてたってという感じです。やることがあるということは、むしろ元気になれることかな、とも思います。そういうことがなければ、よけいなこと考

えて落ち込んでいたかもしれないです。

みんな知り合いですから、むしろお年寄りたちは元気になりましたよ。普段お茶のみなんかあんまりできないでしょ、それが一気にできるようになったからかしらね。持病のある方はいましたけど、避難生活するようになって体調崩したっていう人は、うちの町内に限ってはあまりいなくて、みなさんお元気でした。そういえば、3人ほど体調を崩された方がいたかな。

二木町内は子どもは多い方でしたね。3世代同居が多いんです。うちの隣では、震災前おじいちゃんおばあちゃん、若夫婦に孫、7人家族だったの。ひ孫も生まれて8人になって、今アパート借りてます。そういうお宅が多かったんです。それが震災のあとは、お年寄り夫婦、若夫婦、バラバラでアパート借りるようになってます。仮設だって狭いから、3人以上になれば1部屋借りられるってことで、別れて住むようになりましたが、それでも町内ごとにある程度まとまって入ったので、コミュニケーション取るにもいいですよ、孤立ってのがほとんどないです。

うちは夫で6代目、初代が安政時代だったと聞いています。あまり手広い農家ではなくて、夫はサラリーマン、農家の方は主にわたしがやっていました。

専業農家の方は大変だったんです。農業機械は半端な金額じゃないんですね。コンバインやらトラクターやら田植え機械やらほとんど揃えてるので、それらの損失というのは家が何件か建つぐらいの金額になるんです。うちあたりでも機械はありましたけど、大きなものっていったらトラクターと田植え機械、脱穀機械くらいでした。よそではみんなコンバインなんですけど、うちは食べる分だけは自然乾燥。あと出荷する分は頼んでやってもらってましたから。専業農家の方たちは、自宅だけじゃなく農業機械もすべて駄目になってしまったので、ほんともう大変だったと思うんです。今になれば頑張って復活されてる方もいるし、また逆に諦めて別な仕事やってる方もいますけれどね。とにかく元気でいてくれればと思っています。

夫も、定年後は少しですが農業やっています。わたしが地震のときにいた畑は40アールぐらいあって、いまだに瓦礫が多くて畑作れるような状況じゃないんです。家のそばにあるほんのわずかの畑は、夫が瓦礫拾いをしながらぼつぼつやっています。わたしも別なところに畑を借りていますが、二木の畑は夫が好きなように作っています。わたしからみると、たまにトンチンカンなこともやるんですけどね、けっこう楽しんでやっているみたいです。

震災直後は、元の土地に戻りたいって人が少なかったんですね。うちの夫も息子もそうでした。結局戻りたいって言ったのはわたしだけだったんです。わたしの実家は岩手の一関で、子どもの頃から魚が大好きでした。魚があまり好きでなかった妹の分まで食べるぐらい大好きだったので、母親に「そんなに魚が好きだったら浜の方にお嫁さんにやるから」って、よく言われてました。こっちに来て、親戚に閑上の人がいったり、海の方に親戚がいったりして魚が豊富で、わたしはすごく嬉しかった。まさか津波で被災するなんて夢にも思わなかったです。

そのうちに夫が畑を作るのに二木に通うようになったんです。もしかしたら気持ちが動いてん

のかなあとと思ったんですが、ずっと黙ってました。そうしたらあるとき突然「おれたちも二木に戻っから」って。嬉しかったですね。息子も反対もしないで、戻るということに決めました。それが去年の秋ぐらいだったかしらね。

9月末の土曜日に上棟式やったんです。元住んでいたところに家を新築して、年内中に戻ります。今どき上棟式やるところ少ないんです。そうでなくたってこんなご時世でためらいましたけど、夫がぜひやりたいって言うものでね。まわりに子どもたちがいるわけなし、住んでる人だってあんまりいないのに、餅撒いたって捨う人いないよって言ったんですが、夫の思いでやることにしました。

どうなるかなって最初は心配だったんです。でも前に近所にいた方たちが来てくれたりして、すごく盛大に終わりました。いろんな方が来てくださったんです。西隣の方、津波をかぶってまだ家直してないんです。南小泉から通って農業してるんですけど、「こういうことは、あといつ見られるかわからないから」って息子さんの孫さんと、嫁いでいった娘さんの孫さん連れて来てくださったんですよ。みんなに盛り上げていただいて、終わったので「ああやっぱり上棟式やってよかったなあ、よかったなあ」って、わたしも夫も大満足でした。やる前は「上棟式なんて何の意味があるの」なんて言ってた息子も、結構楽しんで餅撒きしてたみたいです。夫と息子と、2人の名前而建てることになったのでね。息子が楽しんでいたのもよかったです。

いちばん嬉しかったのは、来てくださった方が喜んでくれたこと。「おかげで元気づけられたような気がする」って言ってくれた方がいました。1度は駄目になりかけた土地に、うちが新しく家を建てて上棟式やったのを見て、力づけられたって言うんです。それ聞いたとき、ほんとに嬉しかったですよ。ここまで来るの大変だったんですけど、ようやく形になったって。家を建てるって、こんなにエネルギーを使うものかって何度も思いましたもの。大変だったというのは、戻ると決めるまでとか、決めた後ローンをどうするかとか、家の設計をどうするかといったことでした。どんな家にするか夫と息子の意見が合わなくてなかなか決まらなかったんだけど、ようやく上棟式まできたんです。

今まで住んでいた家が流されたショックというのは、あんまりなかった気がするんです。40年間、馴染んできた家なんだけどメチャメチャで、もう住めるような状態じゃなかったですから。がっかりした、という気持ちよりも、今しなくちゃいけないことが目の前にありすぎて、落ち込んでいる余裕がなかったのかもしれないですけどね。

時間が経つにつれて少しずつ前の場所に戻る人が出てきました。すぐ隣は夫の弟の家です。まだ新しい家だったので、弟のところでは震災後早いうちに直して、去年の夏ぐらいから戻ってるんです。うちの前は、1軒の方は別な場所に新しく家を買いました。もう1軒の方は家は直したんですが、まだ仮設から出ていないんです。西の隣は大きな農家さんで、お孫さん連れて上棟式

に来てくださった方です。専業農家だったので、被害が大きすぎて再起まで時間かかったんですけど、いよいよやる気になって南小泉から奥さんと一緒に通って、農作業を始めました。さらにその隣はうちより1週間遅れて上棟式だったんです。餅撒きとかはしなかったけど、いま建ててます。またその隣、わたしたちが助けていただいたお宅は専業農家で、震災後すぐに家の片付けを始めて、とにかく自分たちの生活を考えなきゃいけないということで、ちょっと離れたところにあった被災してない畑を使って、すぐに仕事を始めたんです。その年のうちに家を直して、お正月ぐらいには戻ったんですね。そして、またその隣のお宅でも、うちより10日ぐらい前に新しい家を建てました。

そんなに古い家でなかったところは、直して戻られたところが何軒かありますね。最初に話をした後ろの家の叔母さんは、古い家で一人暮らしだったので「そんな古い家取り壊してごちんまりと建てるか、別なところに移ったら」って、まわりから言われたみたいなんですけど、「ご先祖様に申し訳ないから自分はここに戻る。まわりが戻ろうが戻るまいが関係ない」って、すごく再建が早くて去年の夏には戻ったんです。

当時のこと思うと夢を見ているような、現実じゃないような感じがするんですけど、地元に戻ると悲しい現実なんですよねえ。でも今年は田んぼも一部作れるようになったので、その風景を見ると元に戻りつつあるような気持ちになります。自然に恵まれた、すごく居心地のいい、のんびりしたところだったんです。よそに移るっていう選択肢はわたしには初めからありませんでした。前のようにはいかなくても、戻ってくる人が増えると嬉しいですね。

## 支えあい、助け合い、思い合いて大事だなあと実感しました

佐藤はつの（1949年生まれ）

震災時 若林区三本塚在住

午前中は普段と変わったことは何もなかったんです。

わたしは主人と2人暮らしで、朝晩、主人を送り迎えしてるんですね。主人の仕事は4時までですから、それに間に合うように出ればいいんですけど、その日は腕時計を修理に出そうと思ったんです。自宅を2時ぐらいに出て、卸町で銀行の用足しなんかをして、仙台駅東口の駐車場に車を入れました。

エスパルの中にある時計屋さんへ時計を持って行って、3時ぐらいに出るつもりで、仙台駅1階の銀行ATMがある辺りをブラブラしていました。そこにいきなりあの地震です。びっくりして立ち止まったんですが、いつまでたっても終わらないんです。それでとっさに靴を脱いで、それを手に持って、外の駐車場の方に裸足で逃げたんです。そのときに限ってパンプスを履いていて、そのままでは走れなかったんです。無我夢中でした。倒壊したら命がないと思って、周りの人にも「早く出なさい、出ないと危ないよ！」って大声で叫びながら、とにかく裸足でバァーッと駅の外に出ました。

周りのことなどはっきりは覚えてないんですけど、赤ちゃんを連れた若いお母さんがそこで泣き叫んでたような記憶があります。他にも泣いてる人が何人もいたように思います。私は「大丈夫だから、大丈夫だから」って周りの人に声をかけながら、そこにしゃがんでました。そのうちまた大きな地震が来て……。今でも思い出すと震えてきます。

揺れが収まってからすぐ携帯で家族に連絡取ったんですけど、繋がらないんですね。主人は携帯を持ってないので、息子とお嫁さんに電話したんですが、通じません。それから少しして、仙台駅の真ん前の大きな広場に移動しました。タクシープールがある辺りの、駐車場になってる所です。車が沢山ありましたけど、そこにみんな集まって来たんです。エスパルの中がどうなっていたかはわかりません。中には入れない状態でした。広場に人が溢れていて、倒れた方が救急車で運ばれていたり、小さい子どもやお母さんたちなど、泣き叫んでいる方がいっぱいいました。そこでもう一度電話したら、今度はお嫁さんと連絡が取れたんです。

その後、車を止めておいた東口の駐車場へ行って、車を出そうとしてたら息子から電話があって「迎えに行くまでその駐車場から動かないで」って言われました。

だんだん暗くなってくるし、不安な気持ちでずうっとそこにいました。東口の近くにはマンションやアパートが沢山あるんですね。近所に住んでるらしい若い女の人とか男の人が、沢山出てきていました。若い女の人がひとり、駐車場の前にうずくまっていたんです。寒くて、寒くて。「車の中あったかいから、入って」って、声かけて入ってもらって、暫く一緒にいました。近くのアパートに住んでいる人でした。いろんな物が倒れたり壊れたりして、建物も倒壊しそうに怖くていられなくて、逃げてきたって言うんです。

車の暖房はつけたんだけど、やっぱり寒くてどうしようもないんです。その女の方、「アパートに行ってみる。着替えとか靴下とか持ってくる、食べる物も何かあると思う」と言って、1

度戻っていろいろ持ってきました。家の中はみんなゴチャゴチャになってたんだけど、とりあえず入れたみたいで、バナナとかお菓子をいただき本当に助かりました。わたしはいつもパンツとかGパンなんですけど、その日もパンツでしたが、寒かったんですね。ストッキングだけではどうしようもなくて、厚手の靴下をいただいて助かりました。

7時半ぐらいに息子が迎えに来てくれたので、「良かったら、一緒に行かない」って誘ったのですが、遠慮したみたいで1人で駅の方に向かって行きました。実家は山形の方だと聞いていました。携帯の電話番号は聞いていたので、後からかけてみたら、駅前で一晩過ごしたと言っていました。偶然駅前で友達と会って、2人で過ごして大丈夫だったとのこと安心しました。

当日、息子のお嫁さんが大和町の児童館に保育士として勤めていたので、息子はそこへ連れて行ってくれました。地震の直後で息子のマンションも危なかったのですが、まずはそこに避難しました。主人は岡田のヨークベニマルの近くに勤めてるんですね。携帯は持ってないので、息子が会社に電話を入れたら「奥さんが家にいるかもしれないから自宅に戻ると言って、出ましたよ」って言われたようです。深沼の辺りはものすごい津波が来てるっていう情報があったので、もしかして巻き込まれたかもしれないと、心配しました。でも息子は「おかあさん、あきらめないで生きてることを考えて。おれが探すから」と言って、行ける所まで行ってみると探しに行きました。

主人と連絡が取れたのは夜の8時頃です。主人は下半身ずぶ濡れになって会社から歩いて来たんですが、結局自宅の方までは行けなかったんです。六郷小学校の近くに郵便局があって、そこに公衆電話があるのを記憶してたんですね。8時頃に漸くそこに辿り着いて、そこからわたしの携帯に電話を入れてくれたんです。「ここにいるから大丈夫だから」って言うので、「じゃ、そこにいて」って言って、今度はすぐに息子に「郵便局にお父さんいるから迎えに行って」と言って連絡を取りました。携帯も通じないことが多かったようだけど、何とか連絡がとれて本当に良かったと思いました。

息子は、岡田の辺りをぐるぐる探しまわっていたんです。自宅のある辺りは、とても入れなかったのですが、わたしから電話がいくまでは、もしかしたら津波に流されたんじゃないかと、とにかく気が気じゃなかったようです。

大和町の児童館で家族4人揃ったのが8時半頃です。そこで一晩過ごしました。そこは避難所ではなかったようですが、避難してきた人が結構いて、毛布をいただきました。おにぎりもいただいたような気がしますが、私は不安とショックで食べられなかったです。

わたしは車で出かけてたから車も流されなくてすみました。もし家にいたらどうなっていたらと思うと、たまらないですね。家はちょっと高い所にあるものですから、水は1階の天井までは上がらなかったんです。近所では2mぐらい来ましたが、家は1m50ぐらいかなあ。2階に逃げていれば命は助かったとは思いますが、電気もつかない何もない所に1人では心細かつ

たと思います。隣の旦那さんも1人で過ごしたって言いますから、何とかはなったんでしょうけれどね。

震災の日は大和町の児童館に、次の日は六郷中学校に行きました。三本塚地区の人は中学校の体育館が避難場所になったんですけど、その時は津波が体育館まで来るかもしれないということで、校舎の3階と4階に泊まりました。わたしは、その翌日の3月13日から5月18日まで息子のマンションにいました。そして、5月の19日に民間の借り上げアパートに引っ越したんです。その間もずっと、自転車で避難所に通っていました。

町内の方は大体六郷中学校に避難していたんですね。そこで誰がいないとか、誰が亡くなったんじゃないかとかを確認し合いました。三本塚では11名の方が亡くなっているんです。高齢者の方が多いんですけど、まさか息子が津波で流されて自宅の近くで亡くなっていたとは、という信じられない光景を目の当たりにした方もいらっしゃいました。

わたしが元の家を見に行っただのは、息子のマンションに移って暫くして、気持ちが落ち着いてからでした。地区全体が入れない状態で、立入禁止が解除になったのは1週間くらいしてからだったと思います。主人はすぐ行きましたが、私は解除になってからもずっと行かなかったんです。なんか行くのが嫌だったんですね。

私の叔母も、屋敷内の軽トラックの中で亡くなってたんです。自宅の2～3軒隣りで、母の実家です。母はそこから佐藤家に嫁に来たんです。実は、叔母は足が不自由だったんですね。叔父と一緒に軽トラックに乗っていたんですけど、後ろから津波の水が入ったみたいなんです。叔父も一緒に津波を被ったんですけど、叔父は泳いで助かったみたいです。叔母はそのまんま車の中で……。その遺体を確認に行くにも結構時間がかかったから、立入禁止解除になったのは1週間くらい後だったと思います。はっきりは覚えてないんですけどね。

叔父と会ったのは六郷中学校の4階でした。最初、夫婦して亡くなったって情報だったんですが、叔父は無事でした。そのとき叔父から話を聞きました。津波が引いてから叔母に声をかけたんだけど返事がない、反応がなかったみたいです。ああ亡くなったのだと確認して、車のドアを開けて納屋みたいな所まで泳いで、そのの棚につかまって這い上がって避難したと聞きました。多分、中学校まで歩いて来たと思うんです。

その時自宅にいた人の話だと、海みたいだったそうです。そこに、畳みたいな物に女の人に乗って「助けてー」って流されて来たので、近所のご夫婦が2人で助けたみたいで、その方たちは後でヘリコプターで救助されました。それと、馬の死骸が何頭かあったみたいですね。家のちょうど真東に乗馬クラブがあった為だと思うんです。

家の周り一帯は、瓦礫や泥で道が寸断されていてとても入れませんでした。それを地域の方がボランティアで、トラクターなんかで全部掻き分けてくれました。立入禁止が解除されると主人

や息子はすぐ行ったけど、わたしは避難所に通って手伝ったりしていたこともあり、なかなか行けませんでした。

自宅には、行きたくなかったこともあったんです。気持ちの中で足が動かなかったというか、精神的なショックというか。今でも行くと、なんかほっとしないんですよ。周りの景色とか目に入りますんでね。松林はスカスカになってるし、近所の方も亡くなってると思うと、平常心ではいられないんですね。

六郷中学校の体育館には、三本塚の大半の方々がずっと避難生活をしてたんです。私みたいに民間借り上げとか、親戚の方にお世話になってる方もいらっしゃいました。私は8月から民生委員児童委員を引き受けると決まっていたこともあって、体調が悪い時など以外は、そこに自転車で通いました。

強く感じるのは、正しい情報が少なかったことですね。こういう震災時には、わたしもそうですけど、みなさん不安とか苛立ちとかがあって、情報に振り回されるとさらに不安になるんです。

また、避難所では神経が普通と違っていましたね。地域の方は、気のあった人同士隣り近所にいたんですけど、ストレスというか、今までと同じ方とは思えないようなこともありました。プライベートな面でも畳2枚ぐらいの所で、そのスペースに荷物置いたとか置かないとか、そんな話も聞きました。大きな声を出す人がいるとか、夜眠れないとか、いろんな方がいらっしゃいましたね。

人間関係で悩んでる方も多かったように感じました。震災から2か月位経った頃からでしょうか。知ってる方に挨拶したら返事がなかったとか、無視されて不愉快な気持ちになったとか。そんなことが聞かれるようになりました。私も感じたことがありますし、いろんな方からも聞きました。無視されるのは、避難所で生活してなかった人なんですね。わたしたちみたいに民間の借り上げにいる人とか、親戚に身を寄せてる人とかが会いに行くでしょ、そうするとやっぱり、ちょっとその人ではないみたいな感じを受けました。

又、地域の方々も被災されているいろいろな所で避難生活を強いられた訳ですが、支援物資も一部ではありますが、平等ではなかったとの声も聞きました。残念な気持ちです。兄弟が継いでる実家に身を寄せてる人がいて、そこでお昼までご馳走になるのが気が引けるので、避難所に行ったんですね。その方は自分も避難しているし、同じ被災者だからと思って行ったんだけど、「あなたはここに避難してるんじゃないから駄目です」って言われたようです。

おかしい話だと思うのね。わたし自身に言われたら言った相手に言うんですけど、聞いた話なんと言うことはしませんでした。挨拶するかしないか、支援物資を貰えるか貰えないかという問題は小さなことだと思いますが、その根っこにあるものを考えてしまいました。

地域の被災した家や道路の瓦礫と泥は凄かったです、わたしの家も瓦礫と泥に埋め尽くされていました。1階は泥がいっぱい詰まっているし、仏壇の物がお風呂場で見つかったり、家の中は大変でした。松林から流れてきた大木が倉庫にガラスを突き破ってゴロンと入ってましたし、屋敷にも木が1本枝ごとバァーッと流れてきていて、そこに泥とか瓦礫とか全部くっついていました。よそから運ばれてきたような、壊れた材木とかもありました。

それを主人が行ってボランティアの方にもいろいろ手伝っていただいて、瓦礫と泥を片付けました。ああいう方々って飲み物とか用意して行っても一切受け取らないんですよね。「そういうの受け取れないんです」っていうことですね。そして、こちらの都合のいい日に来てくれるんですね。何回も「この日はいかがですか」って言われて、主人も仕事してましたので普通の日は駄目で、「土日で」と言うと、それでも快く引き受けてくれました。会社員の方とかも結構多いということが分かりました。普段は企業に勤めている歴とした社会人で、休みの日になると来てやってくれるんです。自分の家のように一所懸命汗を流してやってくださる姿を見て、主人は感激してましたし、わたしも話聞いているだけでありがたく大変感激して涙が出ました。

大変なことをいろいろ抱えてる時でしたから、どんなに励まされたかわかりません。ボランティアの人たちの協力があって、私も助かったし、地域の方みんなもホントに助かったと思います。経済的な面でも援助していただきましたけど、ボランティアの方々の気持ちにすごく励まされていた気がします。

この度、わたしが民生委員児童委員を引き受けたのは2回目なんです。初回は平成12年の6月から16年の11月まで約4年5か月でした。もう両親は亡くなりましたが、最初の民生委員児童委員は両親の介護で退任しました。また引き受けるとは思っていなかったのですが、60歳のときに乳癌の手術しまして、命を助けていただいたし、又、いろいろな方にお世話になりましたので、これからは地域の方にご恩返しをしたいと思って引き受けたんです。

後世に残したいなんてそんな大それた話ではないんですけど、確かに震災で気付いたことが多々あります。

まず、病気になった時も感じたんですけど、人は1人では絶対生きられないのです。あの人の世話になりたくないと思っても、どんなときに世話になるかわからないし、それこそ1人2人じゃなくて沢山の人の支えというか、助けというか、それがないと生きられないです。支え合い、助け合い、思い合いって、そういうのがすごく大事なあとというのが、実感として強く感じました。実際力もだし、ちょっとした言葉だけでも勇気ももらえる。人生の中でいろんな災害にあうかもしれないし、困難なことが起きるかもしれないけれど、そんな時が一番他人への思いやりが大事になると思うんですね。相手を思う気持ち、優しい声かけ。病気の時もそうでしたけど、わたしはそういうもので助けられたんです。どんな時でも人への思いやりがあれば自分に返ってくるし、自分も温かくなって前向きに生きられる。自信が出てくるっていうか、こんな自分

でも思ってくれる人がいるんだって、頑張ろうっていう気持ちになれますよね。

今までお盆とかお正月とかご挨拶して交流があって、親戚で繋がってると思っていた人が、震災後何もない。電話のひとつもないし、会ってもいないっていう人が結構いるんですよ。かえって他人というか、あまりお付き合いのなかった人が、わたしの場合は高校の同級生が支援物資を持って来てくれたり、電話を頻繁にかけてくれたり。物をいただきたい訳じゃないんですけど、親しいと思っていた人が途切れてしまうと、なんかそっちの方がショックだったりしてね。

それと、わたしたち民生委員児童委員は責任ある役目なんですけど、こういう震災時にどこまで支援すべきなのか、ということがあります。勿論高齢者の方とかを支援する役目がありますし、優先する要援護者の方もいます。でも、まずやっぱり自分自身だと思うんです。それから家族ね。自分自身と家族の安全確保が最優先で、それから、要援護者とか高齢の地域の方とか近隣の方とかですよ。それが大事だという思い、本音っていうか、ありますよね。自分の命を捨てて、それは美談として報道されるかもしれませんが、立派かもしれないけど、やっぱり命があつてですから、そこは違うと思うんです。

他の県の民生委員の話ですが、たまたま地震の時いなかった人が高齢者を助けたり全然できなくて、非難されて悩んだと聞きました。まあ確かに悩んだと思いますよね、「あんた民生委員してて、なんで肝心の時いないんだ」なんて言われたら。

わたしも悩むと思いますが、そういうのを何かの形で地域の方に理解して貰うということも必要だと思ってるんです。「やっぱり人間だし命があつて皆さんのお世話できるんだから、何かあつたら私逃げるかもしれないよ」というようなことを冗談みたいな口調でも言っただけで、浸透させていくのが大事な事かなあと思っています。「民生委員の手引き」にもそういうことは書いてあるんですけど、なかなか難しいことですね。地域の人に少しずつ言っていきたいと思っています。

分からない人は多いですよ、今でも言われますから。「お金もらってるんでしょ。だからいいんじゃない」って。報酬とか給料とかいただいている訳じゃないし、今は名誉職ではないので、ほんとにボランティアなのです。損得考える人は民生委員はしないですよ。私は皆にお世話になるから皆のこともお世話しようって、ただそれだけです。

私は、三本塚の家には主人と2人だけで住んでいました。息子達は沖野のマンションです。うちは1階は全滅で、2階と外枠だけ残ったんです。地震に強い鉄筋コンクリートの家だったんで、住めるかどうか震災後業者さんに調べて貰い、大丈夫という事が分かったので、修理して住む計画は立てています。

わたしは生まれてからこの土地を出たことがないんです。4人姉妹の長女で、三本塚で生まれて育って、主人と結婚して、養子縁組をして4代目を継いでいます。わたしは農家なんですけど、若い頃からずっと勤めていましたから、家族だけでアパートみたいな所に住んで、食べる分だけの野菜とか米とかの買い物をして暮らすっていう、憧れみたいなものもあつたんですよ。農家だ

から米はあるし、野菜もある。自分で作ってましたし、今も作っています。それで、家をどうするかってなかなか決められないでいたんですが、孫が生まれて、その孫が2歳ぐらいになれば落ち着くから戻りたいね、という話は家族の中で何度か出ていました。

土地の雰囲気って変わってきましたね。わたしが子どもの頃は、学校から帰って来ると、近所の方が「ご飯食べていがいん」なんて声かけてくれたんです。ご馳走になって家に帰ると「なんだべ、さくいこと」なんて母に怒られたりして。「さくい」って、方言で遠慮がないってことですけど。今は近所の子どもの「車に乗って行かない」なんて言っても「けっこうです」って断られます。子どもの頃、私は「さくい」方だったので、声かけられると喜んでついて行ったり、スイカを作ってる所で食べさせて貰ったり、トマトをポケットに入れて貰って来たりしました。今はそういうのがあまり無くなっていますね。

でも、何と言ってもここからの復興です。息子が5代目になって孫が6代目になる訳ですから。震災前のコミュニティとは違うけれど、新しい世代が入ってきて、古いことも大事にしながら、また新しい三本塚ができていくといいと思います。

あの日修理に出した腕時計は、手元に戻り動いていましたが、その後壊れて、今は新しい時計と共に震災後の時を刻んでいます。

## 東六郷栄あれ

片桐 正志 (1952 年生まれ)

元 東六郷小学校校長

東六郷小学校に私は3年間勤務しました。最初着任したときは、何も問題がなくて、平和的な良いところだなあと思いました。田んぼや畑がずうっと広がっています。3世代同居で、おじいさんおばあさんは農業、息子さん夫婦は外に働きに行ってる。専業農家は数人ぐらいだったでしょうか。3世代同居だから子どもの基本的な生活習慣もしつけもきちんとできていてね。家庭がしっかりしているんです。

地域の人たちは何があってもまず学校で、いろんな行事、学芸会、運動会、みんな協力してやっていました。運動会なんか、学校の校庭のまわりを地域のテントがグルーッと囲むくらい建ちますから。学校行事が地域のお祭りみたいなものでね。地域のコミュニティが生きっていて、その中心が学校なんです。良いところに赴任したなあとって過ごしていて、その最初の1年が終わろうとする3月に、あの大津波でした。

だから私は、本来の東六郷小の良いときを知っている最後の校長ってことになりますかね。学校の建物は残っていますが、今子どもたちは六郷中学校にいます。私はそこでその後の2年間を過ごし定年退職となりましたが、子どもたちはまだ中学校で学校生活をおくっています。

私は当日、たまたま運転免許センターに免許証の書き換えに行っていたんです。大きな地震があったので、これは大変だと思って急遽学校に戻りました。東部道路に沿った海側を通ってきたんですが、もし津波が来ている時間だったら巻き込まれた可能性もあると、後で思いました。

地震があったのが2時46分、3時半ごろに教頭と会っているの、そのころ学校に着いたんでしょう。私が着いたときには、子どもたちはすでに2階に上がっていたんですが、校庭で車の中にいる人や、体育館に残っている人がまだ大分いました。

大きな地震があったので子どもたちは1度外に出ました。雪が降ってきたのでこれでは寒いというので体育館に入りました。避難訓練の地震後のマニュアル通りですね。ちょうど4、5日前に、若林区役所の人たちと地震が起きたらどうするかという話し合いをしていたんです。地震が起きたらこういうふうには地区割りしましょう、という話をして、教頭と2人で確認しあっていたので、私がいなくとも教頭がすぐ実行したんですね。

3時半ごろ教頭と会って、そして40分ごろに松並木を越えて津波が来るのが見えた。子どもたちはもう2階に上がっているから大丈夫だろうと思ったんですが、体育館にいた人たちを避難させなければなりません。近所の人たちが集まってきたんです。地震が収まった3時ごろ、地域の人たちが、徒歩、自転車、自動車などで学校に避難してきていました。その人たちが体育館にいたわけです。

津波が見えてもすぐ来るわけじゃないんですが、早くしないと体育館が巻き込まれる恐れが出てきた。校舎2階に昇るには、昇り口が3つあるんです。北と、西と、中央階段。中央階段は校舎の中にあります。北とか西、特に危ないのは西側の昇り口で、そこだと津波が来たとき直撃になるので、そっちはできるだけ避けたかったですし、すでに2階に昇るために人が昇り口につな

がっていて、動かなくなっていました。それで、その並んでいる人たちを、校舎の中だとまだ時間が稼げるかなと思ったので、校舎の中に誘導して内部の中央階段から昇るようにしたんです。

子どもは1年生から6年生まで全部いました。2時46分ですから、子どもがまだ学校に残っている時間帯です。当時在籍していたのは49人。そのほか入学前の幼稚園と同じ「幼児学園」が併設されていましたが、その子どもたちは前日に卒園式をしていました。卒園しないで残っている子どもが15人ぐらいいましたが、午前で帰っていて、1人だけ預かり保育の子どもがいました。1人だけなので、その子は幼児学園の先生が抱っこしていました。

その時学校には、子どもが49人、それに地域の人たちが来て、あわせて480人ぐらいでした。住民の方々に加えてこの地域で働いていた人もいました。湾岸工事をしていた人たちで、車で逃げて来ていました。

津波がどんなふうに来たかは見ていません。誘導しなければならなかったのを見ている余裕なかったですし、中に入ってしまえば見えませんでしたから。松林のところを越えて黒くは見えましたが、それ以後は見ていません。教室などに避難した人たちは窓から見ているかもしれません。

東六郷小の子どもは全員無事でした。混乱もなかったですね。無我夢中ですから、ただ逃げるだけです。480名でひと晩学校で過ごしたときも、子どもたちはそんなに取り乱さなかったと思います。教職員も18人全員いました。教職員は目いっぱい動いていましたね。避難所開設の準備、避難してきた人のお世話、水を配ったり毛布を配ったり。備蓄している物が多少はあったんですが、全部下にあるので、最初に出した分しかありません。備蓄倉庫自体が1階にあるものですから、あとは流されてしまいました。とても寒いので、体育館に出した毛布なども持って2階に上がりました。そういう作業は全部職員がやりました。

駐車場も職員でした。整理や誘導、それと、車の中にいる人への声かけですね。それに時間を取られていますから、職員も逃げ遅れ、私と用務技師さんが最後のほうになりました。

女性の用務技師さんは、逃げ遅れているうち波が来たので、1度流されたんです。外にいるときに津波が来て急いで校舎の中に走り込んだんですが、中央階段のところまで逃げたときに、後ろから波がボンと来たんですね。それで足を取られた。流されて、中庭にドーンと落ちたんです。それで海の方に持って行かれないですみました。運がよかったです。中庭に落ちなかったら海まで流されたかもしれません。その後は消防のホースみたいなのを垂らして引き上げました。その方は、身体の後遺症に悩まされて、今も病院通いしています。

逃げ遅れた私は、1階のさらに北側、できるだけ海から離れたところへ行こうと思って、奥へ走りました。北側に多目的図書室みたいなどころがあるんですが、その高いところに上がりました。そこまで逃げたとき波が来たんです。遅れて入ってきた技師さんと職員の上まで水が来ていました。ヒタヒタヒタッと水が来て、そこに溜まった感じです。波が動いていれば引っ張られたんでしょうが、そこで止まったので引っ張られずにすみしました。

そのほか溺れそうになった人が、お年寄りなど10人ぐらいいました。廊下にいた人とかが、端の図書室まで波で流されてきたわけです。

津波の水ってものすごく冷たいんですよ。私が水に浸かったのは腰あたりまでですけど、冷たいのは何とも言えないです。全部かぶったらどのぐらい冷たいことか。水が止まるまでですから1時間ぐらい浸かってましたかね。流されてきたお年寄りは水の中でアップアップしてますから、高いところに上げてやりました。図書室なのでいろんなものが流されてきていて、本棚とかもあったので、できるだけそういうものの上に上げました。とんでもなく冷たかったので、どうしても低体温になると思います。

津波が収まったあと、その人たちを2階に上げました。何かに乗せて上げたんですけど、何だったか。毛布みたいなのに乗せて、引っ張り上げたような気がしますね。

多分そのあとに第2波や第3波が来たんだと思います。次の日見たら、軽トラックが校舎の中央階段のところにおつかって止まっていたんです。みんなが上がったあとにさらに津波が来たんでしょう。誘導していたときは軽トラックなんかありませんでしたから。

その後は具合の悪い人の世話とかさまざまなことがありました。とにかく本部を立ち上げなければいけないので、本部を開設しました。在校生49人の学校に480人の避難でしたが、学校の広さは十分でした。教室はオープンスペースのカーペット敷きで、教室と廊下が一体になっているんです。1つの区画に100人ぐらい入りました。ただ寒かったですね。本部は理科室だったんですが、ものすごく寒かった。みんな濡れてるわけですから。着替えもなくて、自分の体温で乾かすしかないんです。人がたくさんいる教室の中に行くと、あったかいと感じました。あるものをかき集めて、カーテンとかいろんなものを持ってきて、それをかぶったりしました。停電だったので、暖房も全く無いです。ストーブも全部1階に置いてあって。電気を使わないストーブがあったんですが、卒業式の準備をしていたもので、それも全部体育館でした。あれがあれば停電でも役に立ったんですがねえ。

人が逃げるので精一杯、物を持ち出す余裕はありませんでした。まず子どもです。子どもを安全なところに逃がす。迎えに来た保護者には子どもを渡す。8人渡しましたね。保護者は、働いている人が多いので、会社などから戻ってこられない人がけっこういました。被害にあった保護者もいてお2人が亡くなっています。お2人とも逃げ遅れて津波にあいました。子どもたちの家は「二木」とか「井土」とか「種次」、そして「藤塚」。「井土」と「藤塚」はほんとに海の近くです。

避難してきたのは抱っこされた乳幼児から若い人、お年寄りが多かったですね。学校に親が来ない子どもたちでも、同じ地域だとみんな知っていて、どこそこの孫だとかいって面倒をみてくれました。地域のコミュニティがしっかりしているから、安心して地域の方といられる。避難者を地域ごとに分けて子どもを地域で見てもらったから、子どももあんまり取り乱さなかったと思います。前から避難計画の中に、子どもも避難者も地域ごとに分けようというのがありました。

何かあったとき来られない親も多いだろう、と想定していましたのでね。でも、そうは言っても、1年生などはやっぱり不安だったでしょう。

この学校は地震や火災のときの地域の避難所になっていました。でも津波の避難所ではなかったんです。子どもたちの避難訓練にしても地震に関してだけで、津波ということは誰も考えていませんでした。体育館の1.8mぐらいまで水が来ました。新聞で見ると野蒜なんかと同じでした。野蒜の方が高いかな、という感じですけどね。野蒜の場合も校舎2階に上がった人たちは助かったようです。

あとで地域の人から聞いたんですが、1611年の慶長の津波のときにこの辺も大被害を受けて、他の土地に移ったりしたので、その後しばらくたって、新しい人が入ったそうなんです。確証はありませんが、新しい人たちが土地を作り直したので津波の伝承はされなかったということでしょうか。

ひと晩、寝るにも寝られない状態でした、寒くって。ヘリコプターがどんどん飛んだり、コンビナートの火が見えたりしていました。携帯も通じない。食べ物は1人あてビスケットが2、3枚。ほとんど食べていないですね。ただ、星がきれいだったのを覚えています。

11日の津波の後に亡くなった方が3人います。避難してきて、校舎の2階に上がりましたが、水をかぶっていて低体温でした。89歳とか90歳のお年寄りでした。子どもたちは亡くなったところは見えていないと思います。息をしなくなったな、というときに別な部屋、理科準備室に運びましたので。見ている子どもも少しはいるかもしれませんが、ほとんどの子どもは見えていません。家族が見せないし、隣り近所の人たちが見せないようにした、心に与える傷を考えて。外の風景もそうです。津波の瞬間なんかはできるだけ見せなかった。これが都市部だったらそういうふうにはならないですよ。知らない子どもだったらね。「井土」だったら「井土」の子どもたち、みんな知ってるわけですから、自分の子どものように気を配ってくれたんです。

閑上を車で走っていて、車ごと流されて東六郷小のところに引っかかった人がいました。ここは垣根が高いし電信柱があるので、ぶつかって止まったんですね。そこにいたのはわかってたんです。でも水が高かったのでこっちも助けに行けないし、あっちからも来られない。「だいじょぶか」って声をかけるぐらいで。そうすると「だいじょぶだ」って答える。声はかけあっていたんですがそのまま車の中でひと晩過ごして、翌朝水が少なくなってから自分で歩いて来たと思います。消防団が迎えに行ったんだっただけかな、そのころは消防団が来てくれていましたから。屋上では火を焚いていたので、そこでその人を暖めてもらいました。いろんな木とか、どっからか持ってきて屋上で焚き火をしてたんです。木は濡れているけど、石油を持ってきた人がいたんですね。

すぐ目の前にコミュニティセンターがあるので、消防団がそこの備蓄から食べ物とか毛布とかを上げてくれました。朝5時ごろですね。道路をはさんで真向かいのコミュニティセンターに備

蓄していたものは結構あったんです。津波は来たんだけど流されなかった。入口が海と反対向きだったので、それもあるかもしれません。

翌朝明るくなると、保護者の中には子どもが心配で歩いて探しにくる人もいました。8時半ごろには、福井県警と自衛隊が来ました。かなり具合の悪い人は10人ぐらいで、もともと持病があって薬を必要としている人も数名いました。そういう人たちをまず先に病院に運んでもらって、それからあとは乳幼児、小さい赤ちゃん、その親と、体力がなさそうな人から順番に連れていってもらいました。自衛隊のトラック、1回に乗れるのは10人ぐらいなんですが、それを何回も何回も、JAのところや六郷中学校まで繰り返し往復してもらいました。六郷中学校は海から4.2キロ。うちの学校は海から2キロ、中学校までもだいたい2キロです。

そのとき校庭は、腰から膝ぐらいまでには水が下がっていました。膝から下ぐらいになると自衛隊の車とか入れますからね。学校のまわりに比べれば、道路の方が早く水が引いていたようです。順番に行ったり来たりして運んでもらって、私が1番最後、六郷中に行ったのが午後の3時半でした。

校庭に止まっていた車は全部流されました。教職員の車も、田んぼの中とか、いろんなところに散っていました。校舎の壁にぶつかっている車もあったし、プールに落ちていた車もいっぱいありました。

校庭や体育館に残った人たちもいたと思います。学校に集まった人たちでも、寒いので車から出ない人もいたようでした。悔やまれるところです。教職員は誘導とか、地域の人のお世話をするので、余裕はありませんでした。まず子どもたちの安全を確保する、体育館にいる人を誘導する。そこまですていっばいで、車の中の人たちに声をかけて強制的に2階に上げる余裕はなかったです。おそらく車のラジオは聞いていたと思うので、自分たちで校舎に入ってくれていれば……と思っています。

警察や消防団は車の中を探しました。100台以上、100から200台でしょうか。乗っていた人もいたかもしれません。車で東部道路方面へ逃げた人、車を置いて慌てて校舎に入ってきた人、車ごと流された人、3つに分かれたと思います。

流された中には、家に戻った人たちもいます。地震があったのが2時46分、学校に津波が来たのが3時50分だとすると、大分時間があつたんです。1度は学校に避難したのに、忘れ物を取りに行ったりして、家に戻った人が流されてしまいました。1年前にチリ地震の津波警報が出たときに、地域の人たちがここに避難してきたんです。そして夜の9時ごろまでいたんですが、津波は来なかったので解除命令が出る前に自分たちで戻っていきました。今回は、そのことがマイナスになりました。

校長室は校舎の1番端、1番海に近いところにありました。水の痕を見ると多分波が2方向か

ら来たと思います。残ったのは机1つだけでしたね。金庫が3つあったんですが、それも持っていかれました。そのうちの1つは300 mぐらい先の畑の中に埋まっていた。切られて、開けられていましたね。子どもたちの指導要録とか卒業台帳とかが入っていました。卒業台帳はすごく大事なんです。卒業台帳が無いと、誰がいつ卒業したか過去のことが全くわからなくなるんです。戸籍簿のようなもので、それは必ず探すようにと教育委員会から言われていました。金庫は開けられていたんですが、卒業台帳はそのまま中にありました。本当に良かったです。開けた人は、金目のものが何も無いなと思ってがっかりしたでしょうね。

台帳の文字、昔の人が墨で書いたのは滲まないですね。最近のインクで書いたのは全部滲んでいました。墨は強いですね、感心しました。写真も無くなったんですが、データがパソコンのサーバーに入っていたので、復旧できました。そのサーバーに入っていたものは、昔の写真も全部残っています。

保護者に引き渡した8人の子どもたちですが、どうなったのかわからないわけです。無事なのかどうか。家が無くなっていますから、どこに行っているかもわからない。被災した人たちは六郷中学校の武道館に2つの地区が、あとはJ Aの建物に入っていました。そこに入った人についてはわかりますが、入っていない人はわからない。だからそれから1週間は、在籍する子どもたちがどこにいるかの把握でしたね。保護者の友達関係をたぐって情報を得ました。

私自身の家は津波被害は受けませんでした。実家が気仙沼で、母親が1人で住んでいました。そこは流され火事にもなりました。幸い逃げるときに誰かにおぶってもらって助かった、と母が言っていました。そういうことがわかったのは1週間以上過ぎてからです。津波の直後は、そこまで頭が回らなかった感じでした。母の無事を聞いたのは妹からです。千葉に住んでいる妹が気仙沼の知り合いと連絡を取って、避難所にいた母を迎えに行ってくれました。

地震の翌日、3時半に私が最後に六郷中学校に移って、そこからすぐに今後の学校のことが問題になりました。これからどうしていくのか、学校をどこに再建するかが最初の課題でした。六郷小学校がすぐそばにありますから、本来なら六郷小なんです。でも六郷小も体育館が壊れましたし、他のところも大分修理が必要でした。教育委員会の方でも「じゃあ六郷中学校に！！」という感じで決まりました。六郷中も全く被害が無いというわけではなかったんですが、体育館はしっかりしていました。六郷小も六郷中も津波は来ませんでした。その前の地震で多少被害が出ていたんですね。応急修理をして、東六郷小の子どもたちはどうにか六郷中で学ぶことになりました。

卒業式も終業式もやってないわけですから、いつやるかというより、いつできるか、ですね。結局、卒業式は3月30日になりました。六郷中学校の方も3月30日でしたから、中学校は午前中にやって、時間をずらして東六郷小は午後でした。

入学式と始業式は4月19日にやりました。それまでは休みです。教室としての形を整えるためにいろんな物をそろえる必要がありました。机も全部違います。小学校低学年の子どもが中学生の机では無理ですよ。また中学校は遊具が無いですから、設置した鉄棒で遊ぶくらいしかありません。遊具も設置して欲しいって教育委員会に言ったんですが、ここは中学校だからと作ってもらえなかったですね。「遊具が必要ならば六郷小学校に移ればそこで遊べるのではないか」とPTA会長さんが教育委員会から言われたこともあるようです。

学校では、去年保護者に「六郷小学校の方に移りますか」というアンケートを取っています。ほとんどの親は「移りたくない」ということだったので、PTA会長さんたちがじゃあ次年度も六郷中学校でお願いしますと、教育委員会に伝えました。

親の気持ちとしては、2年たって今やっと子どもが落ち着いたばかりなのに、また移れというのは負担なんじゃないかというのがあります。子どもの心を一番に考えたいという思いが親にはある、教師もそうです。六郷小学校は規模が大きくて、児童が600人ぐらいいます。600人のところに今25人になっている東六郷小の子どもが混じって、別な学校と言ってもね。

中学校では、うちの方で1階を全部借りて、2階3階に中学生です。中学校も一時期に比べて人数が減っています。多いときは5、600人いたんですが、今は400人以下になったので、どうにかスペースは確保してもらいました。幼児学園も六郷中学校の中にあります。1階と、2階3階は全く別なので、中学生とはほとんど会うことはありません。何かのとき一緒に行事をすることはありますが。

別に、遠慮しながら間借りしている、という感じではないですね。自分たちが小学校を卒業したらいずれ上がる学校なんだし、兄弟も保護者もいますから。温かく見守ってくれている中学生と先生方には感謝しています。

東六郷小学校の建物は今も元の場所に残っています。教育委員会では、修繕はしないので六郷小学校に入ったかどうかと言っています。統合ではなくて、統合の前にまず六郷小学校に入って、東六郷小学校をそこに作ったらどうかと。

そうすると保護者は考えるんですね。今年の東六郷小学校の新入生は1人でした。本来だったらもっといるはずと思いますが、最初から子どもを六郷小へ入れた方が子どもにとっていいのかなと親は思います。今年入った子どもにしても、先のことを考えると東六郷小よりも六郷小に入れた方がいいのではないかって、親はものすごく悩んだと思います。その子どもが入れば先生2人は確保されるし、新入生がいないのはさびしいので私としては入ってほしいとは思っていましたが、もう学区レベルの話じゃないんです。今回入った子どもは兄弟が東六郷小にいましたので、兄弟関係で入るといことは多いですね。

あとは、お父さんやおじいちゃんが東六郷小出身なので自分の学校へ入れたい、というのがあります。

当時の教師はほとんど残っています。子どもの心のケアのために残りたいという教師が多かったです。やむを得ない事情で移った者はいますけれど、今は心のケアが必要だということを教師たちは実感していました。

震災後の子どもたちは学校ではそうでもないんですが、家ではいろいろ出ていたようです。トイレに行けなくなったとか、夜中に目が覚めるとか。住むところも、広い家でゆったり暮らしていたのが、避難所生活になったりアパート生活になったり、急激な環境の変化から来る精神的なストレスがあったと思います。おじいさんおばあさんは避難所に行って、夫婦はアパートに入る。そんな家族がたくさんありました。家庭ごとにそれぞれ複雑な事情をかかえましたね。

今困っているのが、テレビやゲームの時間がものすごく多くなったことです。そして、食生活。1番変わったのはそこですかね。お父さんお母さんは仕事で帰りが遅くても、前はおじいさんおばあさんがいて、決まった時間に食事をするし、声かけもします。テレビばかり見てるとか、勉強しろとか。でも今はアパートですから、お父さんお母さんが帰ってくるまでは、自分たちの自由です。子どもたちもいろんな悩みを抱えてるから、テレビとかゲームとかに走るんですよ。震災後の2年間は、教師にしてみれば、子どもの基本的な生活習慣を元に戻したい、という思いがありました。食生活とかテレビやゲームの時間とか、学校にとっては大きな問題なんです。生活習慣というのは、人間が生きていくうえでの本質にかかわってきます。軽く見ていいことじゃないんです。

流されたのは建物だけじゃない、目に見えない心の中の大事なものが流されました。だから子どもたちにしてみれば学校で友達に会う、友達と遊ぶ、先生と会う、勉強する、これがやっぱり楽しみなんじゃないですかね。嬉しそうに学校に来ていました。子どもにとって、同じ担任の先生がずっといるというのは、心強いんですよ。

東六郷小は開校が57年前ですから、65歳から下の人たちは東六郷小出身です。津波の前の時点でも、六郷小と一緒にいるという統廃合の話は出ていました。それが急速に進んだ感じですよ。子どもが急激に減りましたしね。

地域の再建といったときに、学校の果たす役割はあると思います。良い学校ですからね。建物だって平成8年に建て直してまだ17年、立派なんです。津波はかぶったけれど、修理すれば十分に使えます。学校の近くにある民家は流されなくて、逃げ遅れて2階に上がった人たちは助かっています。自宅を修理している人も多いです。

元の東六郷小のまわりは住める地域なんです、住宅再建可能地区。怖いからもう戻りたくないという人もいますが、いち早く直して戻った人もいます。人が戻っているのになぜ小学校が作れないのかってPTA会長さんは言うわけですよ。でも教育委員会では安全対策がとれないので、学校は戻れないと言っています。

消防団が元の小学校の校庭で消防訓練しようとしたら、危ないからという理由で許可されなかったそうです。校庭や学校の建物はちゃんとあるのでね、地域の人はその必要としているんで

す。地域が学校を盛り立ててくれたと同時に、学校が地域コミュニティの中心だった。小学校が無くなるということは、コミュニティの中心が無くなるということです。私は、危ないということをふまえて、子どもが戻れるように安全対策をすることが大事だと思っています。そうすることによって、前のようにすばらしい地域、すばらしい学校がよみがえるのではないのでしょうか。

「東六郷栄あれ」



津波から一夜明けた二木地区の様子(提供:庄子フミ子)



津波から逃げて電柱につかまる二木地区の庄子さん(提供:庄子フミ子)



周辺の家々が失われた貞山堀(撮影:佐藤正治)



震災前の貞山堀風景(撮影:村井英三)



震災後もない荒浜小学校(撮影:佐藤豊)



屋根の上から撮影した津波当日の井土地区(提供:大友広美)



屋根の上から撮影した津波当日の井土地区(提供:大友広美)



震災から8日目の井土地区(提供:大友広美)



ほとんどの家が失われた井土地区(提供:大友広美)



震災前の井土地区風景(提供:菊地裕子)



# 「東日本大震災 ― 若林区の記録」 (抜粋)

仙台市若林区災害対策本部



## 第1章 地震被害の概況

### 1 地震概要（気象庁調べ）

- ・発生日時 平成23年3月11日 14:46頃
- ・震央地名 三陸沖（北緯38.1度、東経142.9度、牡鹿半島東南東約130km付近）
- ・震源の深さ 約24km（暫定値）
- ・規模 マグニチュード9.0（暫定値）
- ・市内震度 震度6強 宮城野区 震度6弱 青葉区、若林区、泉区  
震度5強 太白区（震度7 栗原市）
- ・津波 3月11日14:49 太平洋沿岸に大津波警報発令（気象庁）  
津波の高さ 仙台港 7.2m（推定値） 到達時刻：不明  
（3月13日17:58 津波注意報 解除）

### ※ 最大余震（4月7日23時32分頃）

- ・震央地名 宮城県沖牡鹿半島東南東約40km付近
- ・震源の深さ 約66km
- ・規模 マグニチュード7.1（推定値）
- ・市内震度 震度6強 宮城野区 震度6弱 青葉区、若林区 震度5強 泉区  
震度5弱 太白区

### 2 被害状況等

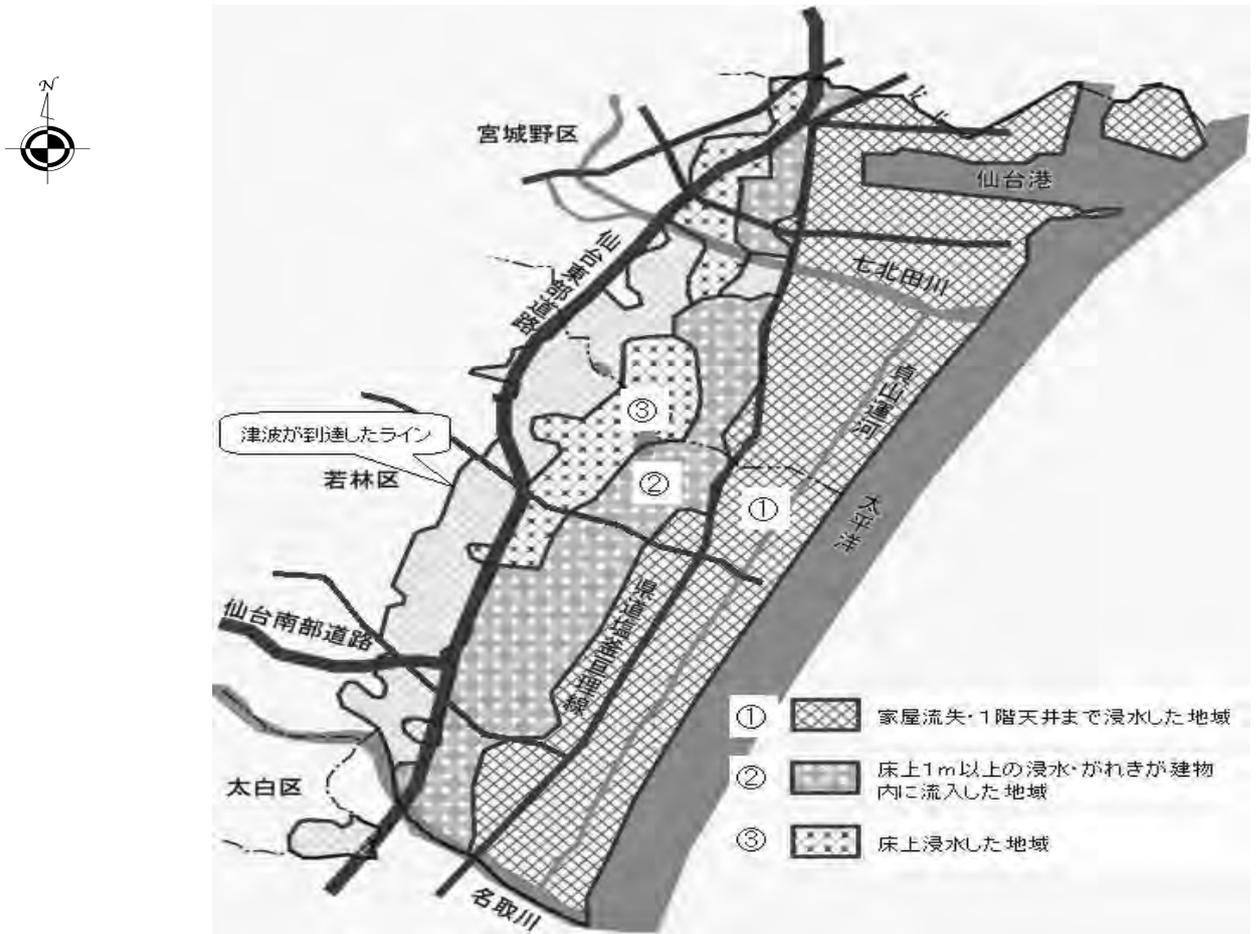
東日本大震災による仙台市の被害は全市域に広く及んだが、特に東部沿岸地域における津波被害と丘陵部地域における宅地被害が特筆すべき特徴といえる。特に若林区においては大津波による被害は甚大であった。

#### (1) 津波被災の状況

- ① 浸水世帯：8,110世帯うち農家1,160世帯)
- ② 農地被害：海水浸水約1,800ha等
- ③ 産業施設の損壊：仙台港周辺の工場等
- ④ ライフライン施設の損壊：南蒲生浄化センター、ガス局港工場等
- ⑤ 交通インフラ施設の損壊：仙台港、仙台空港等



【津波による被害状況図】



(2) 人的被害(平成 24 年 3 月 6 日 11 時現在)

・死者

市内で死亡が確認された方 797名(男性448名,女性349名)

(仙台市民以外の方91名, 市内で発見された身元不明の2名のご遺体数を含む。)

仙台市民の方 872名(男性491名, 女性381名)(市外で死亡が確認された方168名を含む。)

※1 いずれも, 災害関連死の認定を受けた方 143 名を含む。

※2 本市独自の集計のため, 警察発表の数値と異なる場合があります。

※3 市内で死亡が確認された方のうち、ご遺体の発見場所の区分は以下のとおりです。  
(災害関連死の認定を受けた方を除く。)

青葉区 1 名、宮城野区 305 名、若林区 338 名、太白区 8 名、泉区 2 名 (合計 654 名)

※4 下記の行方不明者のうち死亡届の提出が確認された方については、宮城県の指導により死者数に含まず。

・行方不明者: 32 名 (男性 17 名、女性 15 名) (うち、死亡届の提出が確認された方 27 名)

・負傷者: 重傷 275 名 (内 4/7 余震: 6 名)

軽傷 1,994 名 (内 4/7 余震: 65 名・7/25 余震: 2 名・7/31 余震: 1 名・8/19 余震: 1 名)

(3) 建物被害(平成 24 年 2 月 26 日現在、若林区:若林区固定資産税課資料)

	全 壊	大規模半壊	半 壊	一部損壊	計
全 市	29,469 棟 (11.8%)	26,064 棟 (10.4%)	78,086 棟 (31.3%)	115,949 棟 (46.5%)	249,568 棟 (100%)
若林区	6,608 棟 (14.8%)	6,795 棟 (15.2%)	13,566 棟 (30.4%)	17,651 棟 (39.6%)	44,620 棟 (100%)

(4) 被災宅地(平成23年8月19日現在)

4,031 宅地(青葉区:1,290、宮城野区:484、太白区:1,365、泉区:892)

(5) 避難者の状況

	3 月 11 日 23:30		3 月 12 日	
	全 市	若林区	全 市	若林区
避難者数	70,507 名	18,374 名	105,947 名	20,449 名
避難所数	172 箇所	53 箇所	266 箇所	54 箇所

\* 各区の避難所は7月31日をもって全て閉鎖した

\* 福祉避難所

① 避難者の状況

避難者数: 288 名 最大 168 人 (3 月 24 日、25 日)

② 避難所の状況

施設数: 40 箇所 (老人福祉センター4 箇所、障害者福祉センター4 箇所、介護保険施設 32 箇所)

避難所開設期間: 3 月 11 日～10 月 6 日

(6) 応急仮設住宅等への入居状況(平成 24 年 2 月 29 日現在)

プレハブ住宅: 完成 1,505 戸, 入居決定 1,498 戸

プレハブ福祉仮設住宅: 完成 18 戸, 入居決定 17 戸

公務員住宅等: 入居決定 799 戸

借上げ民間賃貸住宅(\*): 入居決定 8,593 戸 \* 今回の東日本大震災から新たに認められた

(7) ライフラインの復旧状況

①電気:停電 138 万戸

3月12日より順次復旧、5月10日 概ね全域復旧

②都市ガス:ガス局港工場が津波により被災、全供給停止 358,781 戸

3月23日より順次供給開始、4月16日 全面復旧(津波被災地を除く)

③水道:断水約 23 万戸(断水人口 約 50 万人、断水率 50%)

3月29日 全面復旧(津波被災地を除く)

④下水道:南蒲生浄化センターが津波被災により機能停止、簡易処理にて対応

4月18日より脱水汚泥処理開始

⑤市営バス:3月12日 主要間路線での運行再開

3月28日 休日ダイヤでの運行に切替 4月18日 通常ダイヤでの運行に切替

⑥地下鉄:3月11日～3月13日 運休(3月12, 13日 バス振替輸送)

3月14日 富沢駅～台原駅間 運転再開(泉中央駅～台原駅間シャトルバス運行)

4月29日 全線運転再開

\*出 典:東日本大震災における本市の被害状況等(第 89 報)平成 24 年 3 月 6 日 11 時 00 分現在

東日本大震災仙台市における被害状況及び対応状況について(中間まとめ)平成23年10月

平成23年3月11日 東日本大震災 仙台市被害状況 平成23年11月

【指定避難所等一覧】

(1)指定避難所

	名 称	所 在 地
1	南材木町小学校	若林区南材木町 84
2	荒町小学校	若林区荒町 86
3	連坊小路小学校	若林区連坊一丁目 7-27
4	南小泉小学校	若林区一本杉町 17-10
5	六郷小学校	若林区六郷 11-11
6	七郷小学校	若林区荒井字堀添 53-2
7	荒浜小学校	若林区荒浜字新堀端 32-1
8	若林小学校	若林区若林四丁目 3-1
9	東六郷小学校	若林区種次字山王前 2-6
10	遠見塚小学校	若林区遠見塚一丁目 22-1
11	大和小学校	若林区大和町三丁目 16-1
12	沖野小学校	若林区沖野三丁目 20-1
13	古城小学校	若林区古城二丁目 1-1
14	蒲町小学校	若林区蒲町 41-1
15	沖野東小学校	若林区沖野字高野南 89
16	八軒中学校	若林区南小泉字八軒小路 9-1

	名 称	所 在 地
17	南小泉中学校	若林区一本杉町 2-1
18	六郷中学校	若林区六郷 13-1
19	七郷中学校	若林区荒井字遠藤 9-3
20	蒲町中学校	若林区蒲町 9-1
21	沖野中学校	若林区沖野二丁目 29-50

(2)今回の震災において職員を派遣した指定避難所  
以外の避難所等

	名 称	所 在 地
1	六郷市民センター	若林区今泉一丁目 3-19
2	JA 六郷(仙台農協 六郷支店)	若林区今泉一丁目 20-54
3	サンピア仙台	若林区蒲町東 10
4	若林体育館	若林区卸町東 2-8-10
5	七郷市民センター	若林区荒井字堀添 65-5
6	荒町市民センター	若林区荒町 86-2
7	霞目駐屯地	若林区霞目 1-1-1

## 第 2 章 地震発生からの経過

地震発生から避難所閉鎖までの主な若林区の動きと避難所運営の経過を取りまとめた。

月日	被災の状況 及び復旧状況	仙台市及び 若林区役所の動き	避難所運営
3/11 (金)		仙台市災害対策本部設置	保健福祉班会議を開催し、避難所への職員派遣準備開始
(14:46)	発災(若林区、震度 6弱)	若林区災害対策本部設置	区災害対策本部より全 21 指定避難所開設の指示有り
(14:49)	大津波警報発令	3号非常配備発令	全指定避難所へ各々 3 名の職員派遣
(15:51)	荒浜上空(へり)より津波確認	区役所庁舎内の市民・職員の安全確認	荒浜小、東六郷小避難所が津波被災により孤立状態
	区役所崩壊等の大被害なし	区役所及び所管施設等の被災状況確認	18 箇所の指定避難所において運営開始
	電気・ガス・水道停止	市本部へ情報連絡員派遣	
	電話・行政防災無線途絶	区職員の参集確認 171 人	
		建設部パトロール 6 班出動	
		荒浜・藤塚地区へ広報車派遣	
		各避難所からの物資要請を市本部へ送信	避難所数:53 箇所 避難者数:18,374 名
※ 全ての通信途絶により情報収集は困難を極める。			

月日	被災の状況 及び復旧状況	仙台市及び 若林区役所の動き	避難所運営
3/12 (土)	余震続く	区長が区内被災地域を巡視	東六郷小に避難した被災者をJA六郷と六郷中へ陸自トラック及び消防団により移送
	陸上自衛隊霞目駐屯地に市内外からヘリコプターにより被災者移送  一部電力復旧	建設業者に応援依頼、パトロール開始  他都市、民間企業から支援助物資等の受け入れ、避難所への配送の実施  市長、副市長が南小泉小(避難所)を訪問  避難所の危険度判定開始	荒浜小に避難した被災者を霞目駐屯地と七郷小、七郷中へ移送  六郷中に運営職員を派遣  陸上自衛隊霞目駐屯地に職員2名派遣  JA六郷に避難所開設、避難所運営職員派遣  避難所数:54箇所 避難者数:20,449名
※ 通信状況不良により情報収集は困難を極める。			
3/13 (日)	ガソリン不足	被災建築物応急危険度判定受付開始  自衛隊が東部道路以東の被災者搜索。孤立した被災者の移送先について、七郷中と沖野東小を指定	若林区以外の市職員の応援が得られる  霞目駐屯地の避難者を区内の指定避難所に分散移送  避難所数:46箇所 避難者数:16,985名
	※ 通信状況不良により情報収集は困難を極める。		

月日	被災の状況 及び復旧状況	仙台市及び 若林区役所の動き	避難所運営
3/14 (月)		「仙台市からのお知らせ」を 各避難所へ送付	他都市からの派遣職員避難所運営支援開始
3/15 (火)		仙台市災害ダイヤル設置 (3/31 まで)	
3/16 (水)		福祉タクシーによる通院支 援開始  若林区災害ボランティアセ ンター開設(4/26 まで)	市医師会より各避難所へ一般用医薬品配付  自衛隊による避難所への物資配送開始  霞目駐屯地の避難者移送終了
3/17 (木)		戸籍住民課オンライン復旧	
3/18 (金)		人工透析患者に対する優 先給油証明書の発行開始	
3/19 (土)		グランディ 21(遺体安置所) への無料バス運行開始 (3/29 まで継続)	
3/20 (日)			自衛隊による炊出し(副食)開始 南材木町小避難所閉鎖
3/21 (月)			沖野小、沖野東小避難所閉鎖
3/23 (水)	市ガス一部供給開始	市長が避難所を訪問(六郷 中、JA六郷、七郷小)	七郷中体育館が危険度判定により使用不可 となったため、若林体育館避難所開設
3/24 (木)		避難所通信発行開始(以 降 4/28 まで計 10 回発行)	

月日	被災の状況 及び復旧状況	仙台市及び 若林区役所の動き	避難所運営
3/25 (金)	約 500 の医療機関が 診療可能な状況となる		
3/26 (土)		市長が避難所を訪問(八 軒中、古城小)	自衛隊駐屯地での入浴サービス開始(6/28 まで実施) スポーツステージ リベラ鶴巻でのシャワー サービス開始(3/31 まで実施) 蒲町小避難所閉鎖
3/27 (日)			連坊小避難所閉鎖
3/28 (月)		避難所集約化についての 事前説明開始	温泉日帰り入浴サービス開始(4/28 まで実 施)
3/29 (火)	水道全面復旧	グランディ21 へのバス運行 終了	
4/01 (金)		仙台市復興基本方針策定 罹災証明申請の受付開始 被災者支援相談窓口を開 設 避難者支援情報ダイヤル 開設(仙台市災害ダイヤル を改称)	避難者数:1,968 名 避難所数:22 箇所
4/02 (土)		被災者が避難所から自衛 隊の車両で被災地訪問(3 日も実施)	
4/04 (月)			新規採用職員避難所運営業務に就く 荒町小、若林小避難所閉鎖
4/07 (木)	M7.1 の最大余震発生		夜間警備・管理の委託開始

月日	被災の状況 及び復旧状況	仙台市及び 若林区役所の動き	避難所運営
4/08 (金)		応急仮設住宅入居者募集 説明会(10日まで各避難 所にて実施)	
4/09 (土)			古城小避難所閉鎖
4/10 (日)			大和小避難所閉鎖
4/11 (月)		避難所巡回相談開始	
4/12 (火)			サンピア仙台避難所開設 3食弁当方式による給食をサンピア仙台避難 所で開始(4/24までに順次全避難所で開 始) 避難所の集約化開始(4/17まで順次実施) 八軒中・蒲町中避難所閉鎖
4/14 (木)			六郷小避難所閉鎖
4/15 (金)			南小泉小・遠見塚小避難所閉鎖
4/16 (土)	市ガス全面復旧		かすみ町中部避難所閉鎖
4/17 (日)			蒲町小避難所再開設 七郷小、七郷中、南小泉中、沖野中避難所 閉鎖
4/18 (月)	市バス通常ダイヤ運行 開始		
4/21 (木)		住宅の応急修理申込の受 付開始	
4/22 (金)		宅地内のがれき等の撤去 開始	
4/24 (日)			自衛隊による物資配送終了(以降、区災害 対策本部で対応) 自衛隊による炊出し(副食)終了

月日	被災の状況 及び復旧状況	仙台市及び 若林区役所の動き	避難所運営
4/26 (火)			簡易シャワー等の環境改善設備、順次設置
4/27 (水)		仙台市南部津波災害ボランティアセンター開所(5/31 まで。区ボラセン休止)	
4/28 (木)			避難所運営のための臨時職員採用 委託業務の拡充(24時間警備・管理へ)
4/29 (金)	地下鉄全線運転再開		
5/01 (日)		人事異動  震災復興本部設置	区職員の避難所における夜勤体制終了(夜 間は民間委託による警備・管理のみ) 寝具類の提供及び交換順次開始(全避難 所で実施) 各避難所の清掃・消毒の順次実施  避難者数:1,142名 避難所数:8箇所
5/03 (火)		避難所巡回バス運行開始 (6/30まで継続)	
5/09 (月)		応急仮設住宅2次募集開 始	
5/12 (木)		アルバム、写真、位牌等の 閲覧、引渡し(7/31まで実 施)	
5/23 (月)		損壊家屋等の解体撤去の 受付開始(6/10から解体 撤去工事着手)	
5/29 (日)		応急仮設住宅2次募集入 居開始	
5/31 (火)		仙台市復興ビジョン策定	

月日	被災の状況 及び復旧状況	仙台市及び 若林区役所の動き	避難所運営
6/01 (水)		仙台市津波災害ボランティアセンター開所(南部・北部ボラセンを統合)	避難者数:828名 避難所数:8箇所
6/05 (日)			JA 六郷避難所閉鎖
6/30 (木)		避難所巡回バス運行終了	
7/01 (金)			避難者数:321名 避難所数:7箇所
7/03 (日)			荒町市民センター避難所閉鎖
7/10 (日)			六郷中避難所閉鎖
7/11 (月)		「東日本大震災仙台市慰霊祭」開催	
7/13 (水)		仙台市震災復興検討会議設置	
7/17 (日)			蒲町小、七郷市民センター避難所閉鎖
7/18 (月)			六郷市民センター避難所閉鎖
7/24 (日)			若林体育館、サンピア仙台避難所閉鎖(若林区内の全避難所閉鎖完了)

---

「語り継ぐ震災の記憶」

平成26年3月31日 初版 発行

令和2年10月30日 第2版 発行

聞き書き 佐佐木邦子

語り手	大友 京子	大友 広美	大友 泰子	片桐 正志
	菊地 裕子	最知 幸子	佐藤はつの	佐藤 豊
	佐藤 洋子	庄子フミ子	末永美代子	高野 剛
	高野 和子			
写真協力	大友 広美	菊地 裕子	佐藤 豊	佐藤 正治
	庄子フミ子	村井 英三		

編集・発行 仙台市若林区中央市民センター  
〒984-0827 仙台市若林区南小泉 1-1-1 (若林区文化センター内)  
電話 (022) 286-1901

印刷・製本 株式会社共新精版印刷

---



震災後の東六郷小学校

## 朗読劇「語り継ぐ震災の記憶」



QRコードを読み取りいただくと、仙台市市民センターチャンネルにて本冊子「語り継ぐ震災の記憶」を抜粋し、映像化した朗読劇「語り継ぐ震災の記憶」をご覧いただくことができます。

仙台市若林区中央市民センター